群馬県指定史跡

勘場木石器時代住居跡

保存修理事業報告書

2021

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

群馬県指定史跡　勘場木石器時代住居跡　保存修理事業報告書

二〇二一　群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

群馬県指定史跡

勘場木石器時代住居跡

保存修理事業報告書

2021

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

１．勘場木石器時代住居跡上屋（令和３年１月撮影）

２．初代覆屋（平成元年撮影）

口絵２

史第三十九号

指定通知書

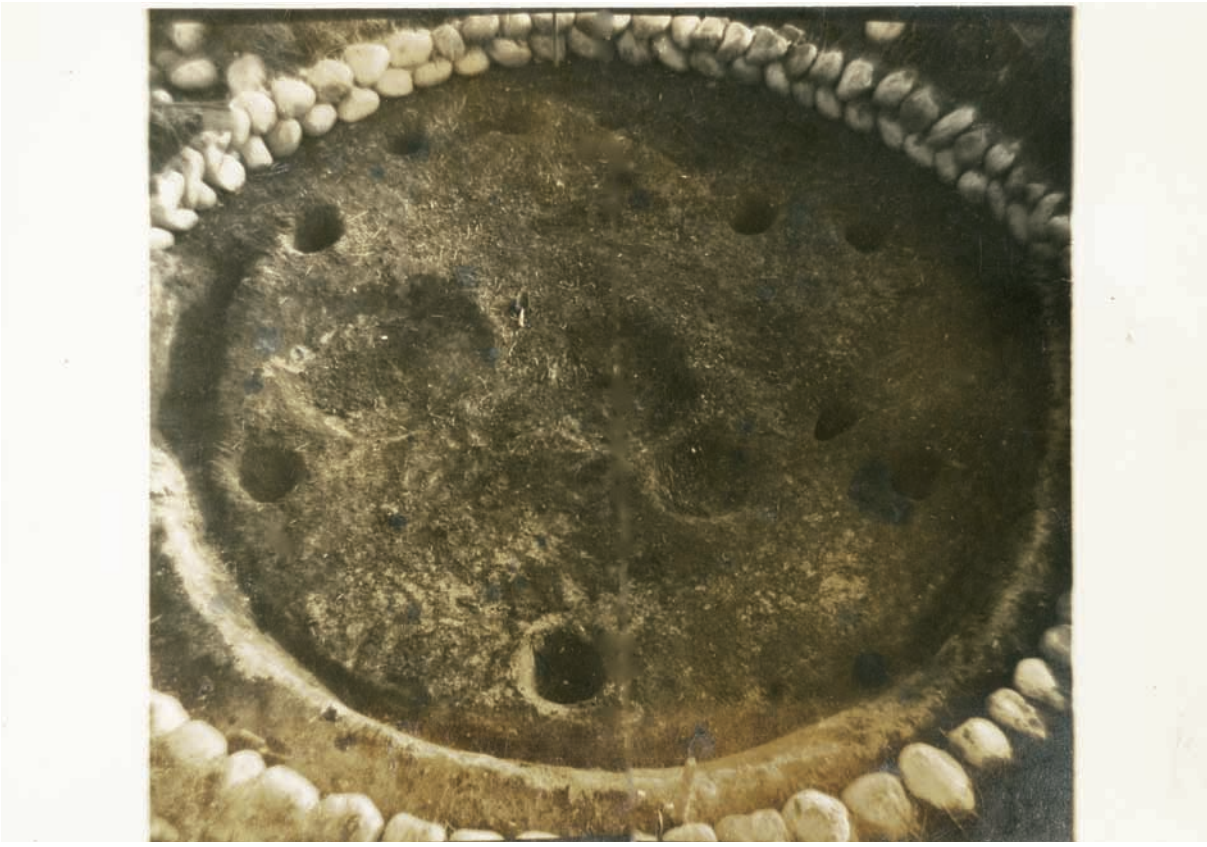
名称　勘場木古墳時代住居跡

右は本日群馬県指定史跡に指定されたから通知します

昭和三十七年一月十四日

群馬縣教育委員会

１．指定通知書



２．発見当時の写真（塩野英介氏提供）

序　　文

長野原町は、群馬県の北西部に位置し、八ッ場ダム（八ッ場あがつま湖）の完成に伴い、地域振興施設の連携とともに、新しいまちづくりを進めています。

長野原町内には、縄文時代中期後半の拠点集落である長野原一本松遺跡・横壁中村遺跡や天明３年の浅間山の大爆発により発生した泥流被災状況を伝える東宮遺跡・小林家屋敷跡に代表されるように、多数の貴重な遺跡の存在が知られています。

教育委員会では、文化財保護事業の一環として、町の貴重な文化遺産である遺跡を保護するとともに、失われていく遺跡の記録保存に努めています。

今回報告する勘場木遺跡は本町で最初の本格的な発掘調査が実施され、昭和 29 年に縄文時代中期後半の竪穴住居跡 1 軒が検出されました。住居跡出土土器は長野県の影響を強く受けており、本地域の当該期土器の様相をいち早く報告された意義は大きく、昭和 30 年 1 月に群馬県史跡に指定されています。

今回の保存修理報告書はこれまで実施された保存修理事業の報告と併せて、再調査の成果を掲載したものです。成果の詳細は本編に譲りますが、本書が町民の皆様をはじめより多くの方々に活用され、郷土長野原の歩んできた道のりを知る一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書発刊にあたり、多大なるご指導・ご協力をいただきました関係機関および関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

令和３年３月

長野原町教育委員会
教育長　市村　隆宏

例　言

1．本書は、群馬県吾妻郡長野原町大字大津字勘場木に所在する群馬県指定史跡勘場木石器時代住居跡の保存修理事業報告書である。

2．本事業および本書の作成には群馬県文化財保存整備補助金・町費が充てられた。

3．本事業は平成２年度・平成17年度・平成30年度～令和２年度に実施された。

4．本遺跡の出土遺物は所有者宅玄関で展示保管されている。その他本書に掲載した資料（図面・写真）のうち所蔵を明記していないものは長野原町教育委員会が保管している。

5．本書は富田孝彦が編集・執筆した。各作業分担は以下の通りである。

編集・執筆：富田　　遺構・遺物写真撮影：富田・藤野　　遺物実測・トレース：柿本・坂井・藤野

図版および写真図版作成：向出・富田

6．保存修理事業において以下の項目を委託した。

平成２年度　上屋設置工事：町田工業株式会社

平成17年度　上屋改修工事：（株）野口工務店

平成30年度　上屋修繕工事：（有）松本設備

遺構面保存処理：（株）文化財ユニオン

測　量：（株）測研

令和元年度　出土石器実測：（株）歴史の杜

7．保存修理事業及び報告書作成にあたり、次の方々、団体から御指導・御協力を賜った。（五十音順・敬称略）

麻生敏隆・飯島義雄・飯森康広・石田　真・今城未知・小野和之・黒澤照弘・小林　正・桜岡正信・塩野英介・塩野通子・千葉博之・藤巻幸男・山口逸弘・吉田智哉

群馬県教育委員会・（公益財団法人）群馬県埋蔵文化財調査事業団

8．調査組織は次の通りである。

事業主体　長野原町教育委員会

＜平成２年度＞

調査組織	教 育 長	櫻井一雄
	社会教育課長	安斉正明
	〃　係長	小林柳一
	〃　係長	篠原敏子
	〃　主事	嶋村　明
	〃　主事	野口芳夫

＜平成17年度＞

調査組織	教 育 長	金子宥巻
	社会教育課長	山口伸行
	課長補佐	樋口　正・白石光男
	係長	中村　剛
	主任	富田孝彦

＜平成30年度～＞

調査組織	教 育 長	市村隆宏
	教育課長	佐藤　忍
	文化財保護対策室長	富田孝彦（文化財係長兼務）
	〃　主任	市川勇気（社会教育係兼務 ～平成30年12月31日）
	〃　主任	田中秀行（学校給食係兼務 令和２年４月１日～）
	〃　主事	髙田靖之（子ども子育て支援係兼務　平成31年４月１日～）
	〃　主事	高橋人夢（令和２年４月～）
	〃	細川剛史（地域おこし協力隊 ～令和元年６月30日）
	〃	古澤勝幸（文化財専門員　令和２年４月～）

凡　例

1．本書で使用した地図は 1：2500「長野原都市計画図」（長野原町 1994）、1：25000「長野原」（国土地理院 2009）である。

2．挿図・図版の方位は真北を示す。

3．挿図・図版の縮尺については下記のとおりであり、各挿図中に示してある。

遺構：住居跡…1/60　炉跡…1/30

遺物：復元土器…1/4　土器片…1/3　剥片石器類…1/2

打製石器類・磨製石器類・礫石器類・その他の石器…1/3

4．挿図に示した遺物の詳細は、観察表に記してある。観察表における復元土器の法量は左側が器高、中央が口径、右側が底径、その他は左側が長さ、中央が幅、右側が厚さを表すことを基本とする。

5．本書における遺構・遺物の計測値について、（　）は現存値、＜　＞は推定値を示す。

6．土層や土器の色調に関しては「新版標準土色帖 2001 年版」（編・著　小山正忠・竹原秀雄、 監修　農林水産省農林水産技術会議事務局、色票監修　財団法人日本色彩研究所）の色名を参考にした。土器の色調は観察表において、外面／内面の順で記し、同一の色調の場合は一つで表現した。

7．挿図中のスクリーントーン・記号は以下のとおりである。

遺構

地　山　　焼　土

遺物

繊　維　　赤　彩　　黒色処理

目　次

口絵
序文
例言・凡例
目次

第１章　勘場木石器時代住居跡の概要…… 1
　第１節　遺跡の立地と環境…… 1
　第２節　遺跡の発見から群馬県史跡指定 …… 13

第２章　保存修理事業…… 29
　第１節　概要…… 29
　第２節　平成２年度事業…… 29
　第３節　平成 17 年度事業 …… 37
　第４節　平成 30 年度事業 …… 41
　第５節　平成 31（令和元）年度事業 …… 50
　第６節　令和２年度事業…… 57

第３章　再調査の成果…… 58
　第１節　概要…… 58
　第２節　遺構…… 58
　第３節　遺物…… 63
《遺物観察表》

第４章　勘場木石器時代住居跡関連文献集成…… 92
　第１節　概要…… 92
　第２節　『群馬県長野原町勘場木石器時代竪穴住居阯について』（山崎報告）…… 92
　第３節　『群馬県吾妻郡長野原町勘場木遺跡調査（概報）』（塩野概報）…… 96
　第４節　「64．勘場木遺跡」『群馬県史』資料編１　原始古代　旧石器　縄文 ……104
　第５節　「勘場木石器時代住居跡（県）」『群馬県の史跡』……110
《報告書抄録》

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1/25,000）…… 3
第２図　勘場木石器時代住居跡の位置図（1/2,500）… 11
第３図「勘場木住居址保存施設費明細書」原本…… 14
第４図「勘場木住居址保存施設費明細書」読み下し文 …… 15
第５図「群馬県指定文化財の申請について」…… 16
第６図「史跡指定申請について」…… 17
第７図「地籍図」（添付書類①）…… 17
第８図「住居跡の見取図」（添付書類②）…… 18
第９図「指定申請委任状」（添付書類③）…… 18
第10図「管理委任状」（添付書類④）…… 18
第11図「発掘後における埋蔵文化財の措置」…… 19
第12図「群馬県指定文化財の指定書の送付について」（左：県→町　右：町→所有者）…… 19
第13図「指定通知書」（上：表書　下：裏書）…… 20
第14図「埋蔵文化財の譲与について」…… 21
第15図「郷土史跡めぐり（一）　勘場木石器時代住居跡」『長野原分校新聞』創刊号…… 22
第16図［平成２年度事業］上屋平面図・立面図…… 30
第17図［平成２年度事業］上屋断面図…… 31
第18図［平成２年度事業］標柱・解説板立面図…… 32
第19図［平成 17 年度事業］軒換気概要図…… 37
第20図［平成 17 年度事業］上屋立面図・平断面図（換気穴設置箇所）…… 38
第21図［平成 30 年度事業］遺構面保存処理範囲図… 46
第22図［平成 30 年度事業］遺構面保存処理概念断面図 …… 46
第23図　山崎氏作成実測図原図（1/50 を 60％縮小）…… 59
第24図　県史掲載実測図（1/60）…… 60
第25図　住居跡実測図（1/60）…… 61
第26図　１・２号炉実測図（1/30）…… 62
第27図　出土遺物実測図１（1/4）…… 65
第28図　出土遺物実測図２（1/4）…… 66
第29図　出土遺物実測図３（1/4）…… 67
第30図　出土遺物実測図４（1/4・1/3）…… 68
第31図　出土遺物実測図５（1/4・1/3）…… 69
第32図　出土遺物実測図６（1/3）…… 77
第33図　出土遺物実測図７（1/3）…… 78
第34図　出土遺物実測図８（1/3・1/2）…… 79
第35図　出土遺物実測図９（1/3）…… 80
第36図　出土遺物１…… 85
第37図　出土遺物２…… 86
第38図　出土遺物３…… 87
第39図　出土遺物４…… 88
第40図　出土遺物５…… 89
第41図　出土遺物６…… 90
第42図　出土遺物７…… 91
第43図　位置図…… 93
第44図　住居址…… 93
第45図　住居跡実測図…… 96
第46図　群馬県吾妻郡長野原町大津・勘場木遺跡周辺遺跡の分布（1：20,000）…… 97
第47図　群馬県勘場木遺跡住居址（1：200）…… 98
第48図　勘場木遺跡住居址出土石器（1：5）…… 99
第49図　勘場木遺跡住居址出土土器（その１）（1：5）…… 99
第50図　勘場木遺跡住居址出土土器（その２）（1：4）…… 100
第51図　位置図…… 104
第52図　住居跡実測図…… 105
第53図　勘場木遺跡の出土土器（１）…… 106
第54図　勘場木遺跡の出土土器（２）　拓影…… 107
第55図　勘場木遺跡の出土石器（１）…… 108
第56図　勘場木遺跡の出土石器（２）…… 109
第57図　位置図…… 110
第58図　住居跡実測図・外観…… 111

挿　表　目　次

第１表　周辺の遺跡…… 5
第２表　経緯年表…… 12
第３表　保存修理事業一覧…… 29
第４表　柱穴等計測表…… 60
第５表　整理調査別出土遺物実測数一覧…… 63
第６表　整理調査別出土遺物実測図互換表…… 64
第７表　出土遺物観察表…… 81
第８表　勘場木石器時代住居跡関連文献一覧…… 92
第９表　吾妻郡長野原町遺跡一覧表…… 97
第10表　住居址柱穴一覧表…… 98

図 版 目 次

写真１
１．着工前状況 …… 32
２．土工　人力床掘
３．基礎工　ベースコンクリート　鉄筋
４．基礎工　鉄筋
５．基礎工　内側型枠…… 33
６．基礎工　型枠組込
７．解体工　覆屋根解体片付
８．仮設工　遺構養生
９．基礎工　基礎出来形①
10．基礎工　基礎出来形②
11．外構工　擬木柵取付
12．外構工　砕石厚出来形
13．外構工　コンクリート打設出来形 …… 34
14．鉄骨工　建方①
15．鉄骨工　建方②
16．屋根工　フェルト張
17．屋根工　長尺平葺き
18．木工事　屋根下地
19．木工事　羽目枠取付
20．塗装工　内部天井出来形
21．塗装工　内部塗装出来形 …… 35
22．塗装工　外部塗装出来形
23．外構工　玉砂利敷出来形①
24．外構工　玉砂利敷出来形②
25．完成　標柱
26．完成　説明板
27．完成　遺構復旧① …… 36
28．完成　遺構復旧②
29．完成　全景①
30．完成　全景②

写真２
１．着工前　棟部 …… 39
２．完成　棟部換気穴
３．着工前　腰部
４．完成　腰部換気穴
５．完成　面戸部換気穴
６．面戸部・腰部・ドア換気穴
７．棟部切取①…… 40
８．棟部切取②
９．棟換気取付①
10．棟換気取付②
11．完成　全景

写真３
１．着手前状況① …… 42
２．着手前状況②
３．着手前状況③
４．作業状況①（雑草除去）
５．雑草除去後状況①
６．雑草除去後状況②
７．雑草除去後状況③
８．作業状況②（遺構精査）
９．遺構精査後全景（真上から） …… 43
10．炉１・炉２（南西から）
11．P1（南から）
12．P2（南から） …… 44
13．P3（北から）
14．P4（北から）
15．P5・P6（北から）
16．P7（北から）
17．P8（北から）
18．P9（南から）
19．P10（南から）
20．P11（南から）…… 45
21．P12（南から）
22，P15（南から）
23．ドローン撮影
24．測量作業①
25．測量作業②

写真４
１．ポリエステルシート敷き込み作業 …… 47
２．ポリエステルシート敷き込み作業完了①
３．ポリエステルシート敷き込み作業完了②
４．ポリエステルシート敷き込み作業完了③
５．ポリエステルシート敷き込み作業完了④
６．擬土塗り作業①
７．擬土塗り作業②
８．擬土塗り作業③
９．擬土塗り作業完了① …… 48
10．擬土塗り作業完了②
11．擬土塗り作業完了③
12．表層仕上げ作業①
13．表層仕上げ作業②
14．表層仕上げ作業完了①
15．表層仕上げ作業完了②
16．表層仕上げ作業完了③

17．表層仕上げ焼土塗布作業 …… 49
18．表層仕上げ焼土塗布作業完了
19．遺構面保存処理完成　全景
写真５　１．着工前　外観① …… 50
２．完成　外観①
３．着工前　外観② …… 51
４．完成　外観②
５．着工前　外観③
６．完成　外観③
７．着工前　壁・ガラス①
８．着工前　壁・ガラス②
９．着工前　軒天・鉄部
10．塗装工事　下地処理①
11．塗装工事　下地処理② …… 52
12．塗装工事　錆止め塗装状況
13．塗装工事　錆止め塗装完了
14．塗装工事　上塗り塗装状況
15．塗装工事　上塗り塗装完了
16．塗装工事　軒天　錆止め塗装完了
17．塗装工事　柱鉄部分塗装状況
18．塗装工事　外壁塗装状況
19．ガラス入替え状況① …… 53
20．ガラス入替え状況②
写真６　１．出土遺物展示状況① …… 53
２．出土遺物展示状況②
３．出土遺物展示状況③
４．出土遺物展示状況④ …… 54
５．出土遺物展示状況⑤
６．出土遺物展示状況⑥
７．出土遺物展示状況⑦
８．資料借用状況
９．再整理作業①（水洗い）
10．再整理作業②（分類・接合）
11．再整理作業③（接合・復元） …… 55
12．再整理作業④（復元・着色）
13．再整理作業⑤（実測）
14．再整理作業⑥（写真撮影）
15．資料返却状況
16．出土遺物再展示状況①
17．出土遺物再展示状況② …… 56
写真７　１．トレース作業 …… 57
２．図版編集作業

第１章　勘場木石器時代住居跡の概要

第１節　遺跡の立地と環境

１　遺跡の位置

勘場木遺跡が所在する長野原町は群馬県北西部にある吾妻郡域の南西隅に位置し、東は吾妻郡東吾妻町（旧吾妻町）・高崎市倉渕町（旧倉渕村）、北は吾妻郡草津町・同郡中之条町（旧六合村）、西は吾妻郡嬬恋村と接し、南は浅間高原を経て長野県北佐久郡軽井沢町と県境をなす。本町は高間・白根の両山系と大洞山系とに挟まれた吾妻川流域地帯の北部と、高原地帯の南部とに大別され、高原地帯を除きほとんどが河川・渓沢に向かう山岳傾斜地帯である。

町の北西には草津白根山（標高 2,170m）、南西には浅間山（標高 2,568m）が位置する。町域も北部は高間山（標高 1,341.7m）や王城山（標高 1,123.2m）、吾妻川より南に丸岩（標高 1,124m）や菅峰（標高 1,473.5m）など、南部は南東から南にかけて浅間隠山（標高 1,756.7m）、鷹繋山（標高 1,431.4m）、鼻曲山（標高 1,655m）など、周囲を 1,000m ～ 1,800m 級の険しい山々で囲まれている。

長野原町の河川は長野県境の鳥居峠付近（標高 1,362m）を水源とする吾妻川が東流し、それに万座川や熊川・白砂川など主に両岸の山地から発する諸支流が注ぎ、渋川市街地付近で利根川右岸に合流する。町域は吾妻川の中流にあたるが、かつて酸性を帯びた水質をもつ支流の流入により、中流より下流にかけて魚類の生息に適さない状態であった。しかし石灰投入による中和処理が開始されて以来、水質の改善が行われている。

吾妻川両岸は大字長野原付近でやや幅が広く、河岸段丘が発達する（第 1 図）。この段丘面は最上位・上位・中位・下位の 4 段階で形成されている。これら段丘面とその上位の丘陵上に縄文時代～平安時代にかけての遺跡が多く見つかっており、現在でも住宅地や田畑として利用されている。これらの段丘は約 21,000 年前に浅間山から噴出した応桑泥流堆積物が侵食されて形成されており、その上を覆っている関東ローム層中には約 11,000 年前に噴出した浅間 - 草津黄色軽石層（As-YPk）が堆積しているのが認められる。現在の吾妻川からの比高差は最上位段丘面で約 80 ～ 90m、上位段丘で約 60 ～ 65m、中位段丘で 30m 前後、下位段丘で約 10 ～ 15m を測る。大字川原湯から東では川幅が狭まり峡谷をなし、吾妻渓谷を形成している。

長野原町が含まれる浅間山周辺地域は、気候的には太平洋側の気候区に入るが、高地であることから寒冷な中央高地型の気候がみられる。しかし吾妻川沿いの標高 600m の谷底から、最高点の浅間隠山の 1,756m までと起伏に富んでおり、地理的条件も変化が大きいため、地区ごとに気候・気象に変化が見られる。降水量も地形により変化するが、年間降水量は関東平野各地域とほぼ等しい。降水量の年変化は日本海側

と異なり冬季に少なく夏季に多い。

勘場木遺跡は町域北部の吾妻川流域帯に所在し、吾妻川の支流である遅沢川左岸の段丘上に立地している。調査地点の標高は 708 m位である。

2　周辺の遺跡

長野原町における遺跡分布状況は昭和 48 年に群馬県教育委員会刊行の『群馬県遺跡地図』に依っていたが詳細な遺跡の分布の把握は不十分であった。その後、町教育委員会は県教育委員会文化財保護課の指導のもと、昭和 62 年度から 3 ヶ年かけて、全町を対象とした遺跡詳細分布調査を実施し、199 の遺跡包蔵地を確認した[1]。また平成 6 年度から令和元年度まで八ツ場ダム建設事業に関連した工事用進入路や水没地域の工事に対応して（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が継続して調査を実施した。新たな包蔵地の発見や遺跡名の変更などの必要性から平成 14 年 3 月と平成 16 年 4 月に遺跡地図の改訂を実施した。その後も小さな変更を繰り返しているが、令和 3 年 1 月現在で 226 の包蔵地（指定史跡等を含む）が把握されている[2]。

本遺跡の位置する吾妻川流域地帯は大きく東西に分けることができ、東部地区はダム湖及びダム関連事業と直結していた地域、西部地区は東部寄りの大字長野原地区以外は基本的にはダム関連事業とは無関係の地域である。本遺跡はその西部地区に属している。

本遺跡を含む吾妻川流域地帯西部地区にも多くの遺跡が分布している（第 1 図・第 1 表）。遺跡は基本的に吾妻川とその支流沿いの河岸段丘上に占地しているが近年丘陵上にも遺跡が発見されはじめ、これまで空白だった時期を埋める遺構も検出されている。ここでは調査を実施した遺跡を中心に当該地域の遺跡を概観したい。なお、長野原町の現時点での歴史観をなるべく記載する立場から、筆者が実見したり、調査担当者に聞き取った未報告の情報を多分に含んでいる。従って本報告時には多少異なる見解になるかもしれないのでご注意願いたい。

（1）　旧石器時代

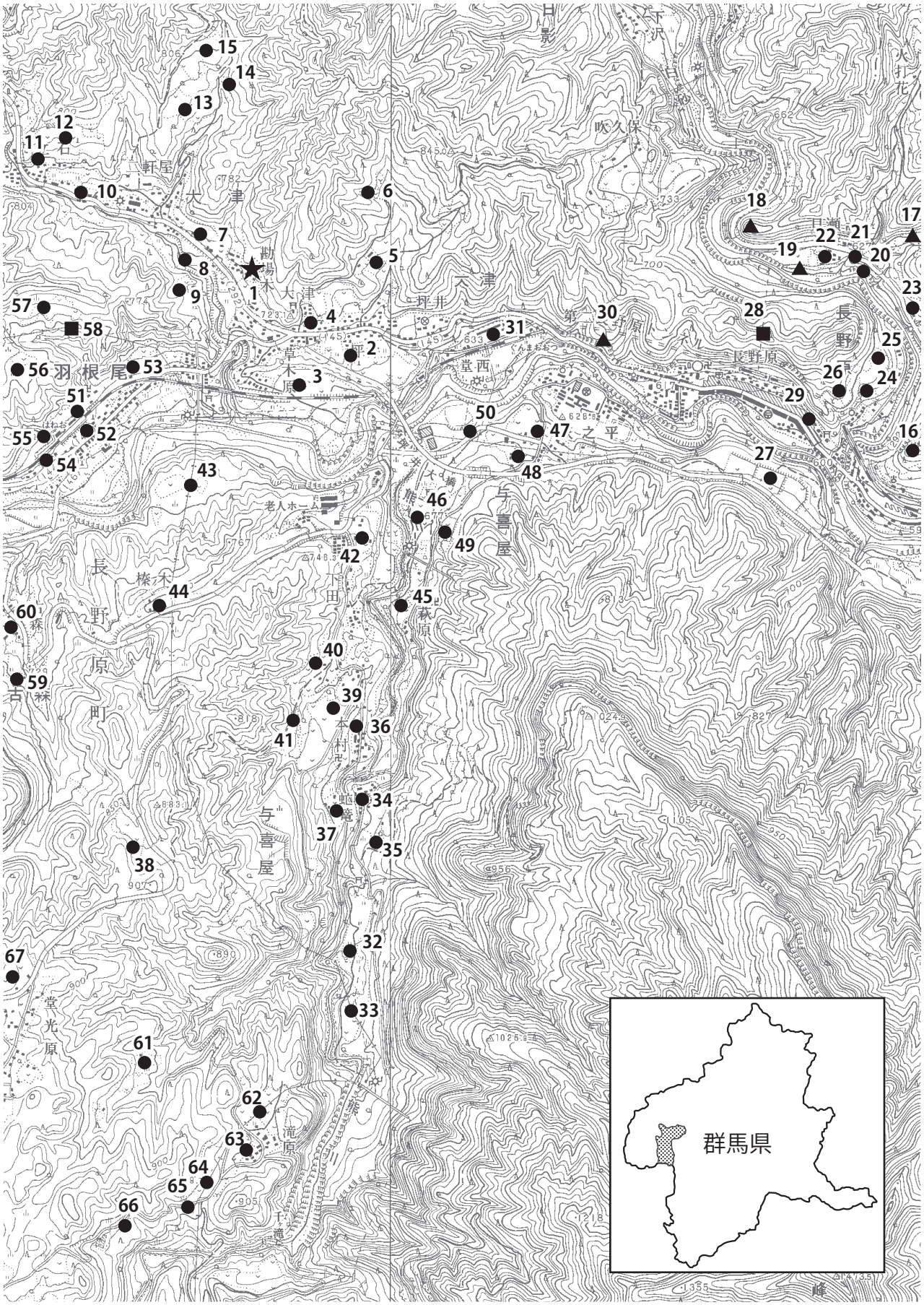
これまでのところ長野原町では旧石器時代に遡る遺跡は確認されていない。柳沢城跡[3]で遺構外ながら細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩製のスクレイパーが出土しているのみである。吾妻川流域は前述したように応桑泥流や浅間 - 草津黄色軽石層（As-YPk）が厚く堆積しており、発掘調査では発見されにくい状況がある。西吾妻地域はもとより吾妻郡内でも旧石器時代は高山村に所在する新田西沢遺跡[4]でしか確認されていないのが現状である。

（2）　縄文時代

縄文時代になると遺跡数も膨大となる。吾妻川及びその支流沿岸の下位段丘面は低調だが主として中・上・最上位河岸段丘および丘陵部に集落が展開する。

①草創期～早期

現在のところ、長野原町で人々の生活が確認されているのは草創期末～早期初頭か



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1/25,000）

らである。該期の遺跡として石畑Ⅰ岩陰[5]がある。昭和53年に群馬県教育委員会により一部調査され、中期を除く草創期～晩期の土器片・獣骨・人骨などが出土している。特に草創期～早期の土器片には表裏縄文・撚糸文・押型文が認められる。平成26年度から國學院大学により学術調査が実施されている居家以岩陰群（17）でも草創期～晩期の土器片・石器・獣骨・人骨が出土している。平成28～31（令和元）年度の調査では岩陰部の灰層中から遺存状態の良い早期中葉・前期前半の埋葬人骨が20体確認されており、その数は今後も増えるだろう[6]。横壁勝沼遺跡[7]では草創期の槍形尖頭器が表採されている。近年、丘陵上での調査機会も増え、楡木Ⅱ遺跡[8]、立馬Ⅰ遺跡[9]、立馬Ⅲ遺跡[10]で早期の集落が検出されている。楡木Ⅱ遺跡では早期前半撚糸文期の住居跡が31軒検出され、遺構外で表裏縄文・押型文・沈線文・条痕文土器片も出土している。該期の住居跡検出数では県はもとより全国的にも有数である。また立馬Ⅰ遺跡では撚糸文期の住居跡の他、沈線文（田戸下層式）期の住居跡も検出され、遺構外では押型文・条痕文をはじめ晩期までの土器片が連綿と出土している。立馬Ⅲ遺跡では子母口式や稲荷台式、沈線文土器などの住居跡が検出されている。さらに同時期の遺物は、調査事例の多い東部地区に偏っており、三平Ⅰ遺跡[11]、三平Ⅱ遺跡[12]、花畑遺跡[13]、幸神遺跡[14]、横壁中村遺跡[15]、長野原一本松遺跡（16）、西部地区では坪井遺跡（２）で確認されているのみである。それまでの岩陰での生活から早期前半撚糸文期になると丘陵上のオープンサイトでの集落に移行していくようである。また石畑Ⅰ岩陰に代表される岩陰遺跡は丘陵部の自然に迫り出した岩場を利用して居住・墓域とするものであるため、県内では分布・遺跡数ともに限定される。吾妻川流域はそのほとんどが河川や渓沢に沿う山岳傾斜地帯であることから岩陰遺跡の立地する条件を満たしているといえよう。岩陰遺跡は長野原町域で21遺跡34ヶ所確認されており、その大半がこの東部地区に集中している。この岩陰遺跡の多さは本町の原始古代の大きな特徴の一つでもある。

②前期

前期の遺跡も少ないが漸増の傾向にある。立地は丘陵上が多いが、河岸段丘へも集落が広がる傾向が見受けられる。前期前半の遺跡は東部地区より西部地区で顕著である。坪井遺跡で前期初頭（花積下層式期）の住居跡と土坑が検出され、土坑内で花積下層Ⅰ式と長野県で主体的な塚田式との共伴が初めて確認された。平成30年度に調査した赤羽根遺跡（13）では、当該期の石器製作工房１軒と土坑４基が検出されている。暮坪遺跡（57）では前期前葉（二ッ木式期）の住居跡、長畝Ⅱ遺跡（48）では前期前葉（関山式期）の土坑と前期前葉（黒浜式期）の住居跡・土坑が検出されている。東部地区では上原Ⅰ遺跡[16]で前期初頭の住居跡、楡木Ⅱ遺跡で前期前葉（黒浜式期）の住居跡が検出されている他、横壁中村遺跡では埋没河道で少量の破片が認められている。前期後半は楡木Ⅱ遺跡、三平Ⅰ遺跡、林中原Ⅰ遺跡[17]で前期後葉（諸磯式期）の住居跡が、川原湯勝沼遺跡[18]で前期末葉の土坑が検出されている以外は遺構外の出土である。

③中期

中期の遺跡は他時期に比して最も多い。中期前半は県内でも極めて限られた検出

第１表　周辺の遺跡

No.	遺　跡　名	町 No.	種　別	時　代	概　　要	備　　考
1	勘場木遺跡	91	集落跡	縄文	本遺跡。県指定史跡。昭和 29 年度調査（県）。中期後半の住居跡 1 軒を検出。前期～後期の遺物が多数出土。本町で最初の本格的な発掘調査である。住居跡出土土器は長野県の影響を強く受けており、本地域の当該期土器の様相をいち早く報告した意義は大きい。	文献 1,2,48,50,53,58,65,66 『県遺跡地図』№ 3125
2	坪井遺跡	86	集落、墓その他	縄文・弥生・古墳・平安・中世	平成３・10・12・14・23 年度調査（町）。縄文中期後半の拠点集落。縄文前期初頭住居跡・土坑、後期前葉土坑、弥生中期住居跡・土坑、平安住居・陥穴、中世配石・集石遺構などを検出。遺跡内に『上毛古墳綜覧』記載の「鉄塚」あり。	文献 1,2,4,8,10,12,26,28,62,63,66,87,189,191,193 『県遺跡地図』№ 3123
3	草木原遺跡	87	散布地　その他	縄文・平安・近世	縄文中期。磨製石斧採集。平成 17・20 年度調査（町）。天明畑 1 枚・溝 1 条検出。	文献 1,2,17,20,48,196,199
4	高平遺跡	88	散布地	縄文・平安		文献 2
5	寺久保遺跡	89	散布地	縄文・弥生・平安	黒曜石片・弥生後期土器片採集。	文献 2
6	寺沢遺跡	90	散布地	縄文	中期。	文献 2
7	熊野遺跡	92	散布地	縄文	中期。平成 15 年度調査（町）。	文献 2,14,23
8	弁天遺跡	93	散布地	平安		文献 2
9	鹿生遺跡	94	散布地	縄文	中期。石器片採集。	文献 2
10	立石遺跡	95	散布地	縄文・平安	縄文中・後期。磨製石斧・石鏃・石匙・石錘採集。平成 16・30 年度調査（町）。縄文中期包含層検出。	文献 1,2,16,39,42,195,207 『県遺跡地図』№ 3125
11	クヌギⅠ遺跡	96	散布地	縄文・平安		文献 2
12	クヌギⅡ遺跡	97	集落跡	縄文	昭和 63 年度調査（町）。中期中葉～後期。住居跡 4 軒（うち敷石住居３軒）、中期中葉の埋設土器など出土。	文献 2,3
13	赤羽根遺跡	98	集落跡	縄文・平安・中世・近世	平成 27・28・30・31 年度調査（町）。縄文時代前期初頭の石器製作跡と大型土坑。平安時代住居跡、鍛冶工房、陥し穴、炭窯。中近世掘立柱建物、方形竪穴状遺構、両側溝を持つ草津道と考えられる道路跡等を検出した。	文献 1,2.33.41
14	大久保Ⅰ遺跡	99	散布地	縄文	中期。	文献 2
15	大久保Ⅱ遺跡	100	散布地	不明		文献 2
16	長野原一本松遺跡	63	集落跡	縄文・弥生・古墳・平安・中世・近世	平成 17・22 年度調査（町）、平成６～ 20 年度調査（事）。　縄文中期後半～後期の住居跡を中心とする拠点集落跡。平安時代住居跡、中世掘立柱建物跡等多数検出。	文献 1,2,23,48,66,80,81,89,93,94,100,101,106,112,126,129,133,136,146,148,185 ～ 199,209,222 旧一本松遺跡
17	居家以岩陰群	80	その他	縄文・弥生	平成 26 ～ 31 年度調査（國學院大學）。岩陰６ヵ所にわたる。	文献 2,59,179 ～ 184,203
18	油郎岩陰群	81	その他	縄文・弥生	岩陰４ヵ所にわたる。	文献 2
19	貝瀬岩陰群	82	その他	不明	岩陰２ヵ所にわたる。	文献 2
20	貝瀬Ⅰ遺跡	67	散布地	縄文・平安	石斧採集。	文献 2
21	貝瀬Ⅱ遺跡	68	散布地	縄文		文献 2
22	貝瀬Ⅲ遺跡	69	散布地	縄文・平安		文献 2
23	東貝瀬Ⅲ遺跡	66	散布地	縄文	チャート片採集。平成 24 年度調査（町）。	文献 2,28,29,32,38,71,201
24	嶋木Ⅰ遺跡	72	集落跡、その他	平安・近世	平成 16・22・24・25・（町）。近世礎石建物、天明畑、溝、ヤックラ、復旧溝。近代ガーター橋橋台石積。	文献 2,16,23,28,29,32,38,71,195,201,202
25	嶋木Ⅱ遺跡	73	散布地	縄文・平安	黒曜石・磁器採集。平成 26 年度調査（町）。	文献 2,32
26	嶋木Ⅲ遺跡	74	散布地	縄文	石錘・石鏃採集。	文献 2
27	向原遺跡	75	集落跡	縄文・弥生・平安	平成５・19・20 年度調査（町）。縄文後期住居５軒（敷石住居２軒）・縄文中期後半埋甕２基、弥生中期土坑７基、平安住居 11 軒・陥穴 14 基、時期不明土坑 52 基検出。	文献 2,6,19,81
28	長野原城跡	85	城館跡	中世・近世	吾妻川左岸、町の市街地北側の尾根上に立地。土塁・堀切・物見台などが遺存している。長野原合戦の舞台。平成 24 年度調査（町）、平成 23 年度調査（事）。天明畑２枚検出。	文献 1,2,28,48,49,51,54,73,149,228
29	町遺跡	219	その他	近世	平成 25・28 年度調査（町）、平成 23 ～ 25・30 年度調査（事）。天明泥流で埋没した集落・生産跡。	文献 2,32,37,151,201,202,235
30	遠西岩陰群	83	その他	不明	岩陰２ヵ所にわたる。	文献 2
31	小林家屋敷跡	211	屋敷跡	近世	平成 13・14 年度調査（町）。天明泥流に埋没した吾妻の分限者小林助右衛門の屋敷跡。石垣１基・土蔵跡１棟・礎石建物跡２棟を検出。	文献 1,2,11 ～ 13,36,60,68,71,72,90,193,206
32	山岸Ⅰ遺跡	133	散布地	平安	チャート片採集。	文献 2
33	山岸Ⅱ遺跡	134	集落跡	縄文・弥生・平安	平成 24 年度調査（町）。縄文前期末土坑１基、平安時代住居跡１軒、陥し穴３基検出。	文献 2,25,28
34	虻篭Ⅰ遺跡	131	散布地	縄文		文献 2
35	虻篭Ⅱ遺跡	132	散布地	縄文・平安	縄文後期。	文献 2
36	与喜屋Ⅰ遺跡	139	散布地	縄文	石斧２片採集。	文献 1,2
37	与喜屋Ⅱ遺跡	140	散布地	縄文	中期。土器片採集。	文献 2 『県遺跡地図』№ 3121
38	所舟遺跡	142	散布地	不明		文献 2
39	上ノ平遺跡	138	散布地	縄文・弥生・平安	縄文前期～後期。弥生中期土器・太形蛤刃石斧等採集。平成 24 年度調査（町）。	文献 1,2,22 『県遺跡地図』№ 3122
40	北沢Ⅰ遺跡	136	散布地	縄文・平安	縄文中・後期。	文献 2
41	北沢Ⅱ遺跡	137	散布地	縄文・平安	縄文中・後期。黒曜石片・内黒土器採集。	文献 2

No.	遺　跡　名	町 No.	種　別	時　代	概　　要	備　　考
42	外輪原Ⅰ遺跡	135	散布地	縄文・弥生・平安	平成 15・16 年度調査（町）。縄文早期包含層検出。遺跡内に『上毛古墳綜覧』記載の「五輪塚」がある。	文献 1,2,14,16,48,76,77『県遺跡地図』№3120
43	外輪原Ⅱ遺跡	141	散布地	縄文	磨石・敷石採集。	
44	榛木沢遺跡	125	散布地	縄文	前期。	文献 2
45	萩原Ⅱ遺跡	130	散布地	縄文・平安	縄文中期。	文献 2
46	萩原Ⅰ遺跡	129	散布地	平安		文献 1,2,48
47	長畝Ⅰ遺跡	126	散布地	縄文	中期。平成 15 年度調査（町）。平安住居 1 軒、土坑 4 基検出。	文献 2,14,194
48	長畝Ⅱ遺跡	127	集落跡	縄文	平成 2・3・21・28・30 年度調査（町）。縄文時代の住居跡・土坑、平安時代の住居跡。	文献 2,4,22,33,39,58,200,205,207
49	長畝Ⅲ遺跡	128	散布地	平安		文献 1,2
50	旧新井村跡	143	村落跡	近世	昭和 55 年度調査（町）。天明泥流に埋没した村落。屋敷跡や用水池などを検出。南側台地上に墓地が残る。	文献 2,55,57,60,68,72,104
51	羽根尾Ⅰ遺跡	112	散布地	平安		文献 2
52	羽根尾Ⅱ遺跡	115	散布地	奈良		文献 2,
53	羽根尾宮原遺跡	113	散布地	平安	平成 18・25 年度調査（町）。	文献 2,18,29 旧宮原遺跡
54	小滝Ⅰ遺跡	114	散布地	平安		文献 2　旧小滝遺跡
55	小滝Ⅱ遺跡	220	その他	近世	平成 23 年度調査（町）。天明畑 4 枚検出。	文献 26
56	宮の上遺跡	116	散布地	平安		文献 2
57	暮坪遺跡	117	集落跡	縄文・平安	縄文中期土器・磨製石斧・凹石採集。平成 12 年度調査（町）。縄文前期前葉（二ツ木式期）住居跡 2 軒・土坑 2 基などを検出。	文献 2,9,10
58	羽根尾城跡	123	城館跡	中世	町指定史跡。吾妻川左岸、城峯山の山頂に立地。梯郭式の山城で土塁・堀切が遺存している。羽根尾（海野）氏の拠城。	文献 1,2,48,49,54
59	田之平遺跡	119	散布地	縄文	中期。	文献 2
60	諏訪原遺跡	121	散布地	縄文	チャート片・石皿採集。	文献 2
61	チガヤ遺跡	146	散布地	縄文・平安	磨石採集。	文献 2
62	滝原Ⅰ遺跡	150	散布地	平安		文献 2
63	滝原Ⅱ遺跡	151	散布地	平安		文献 2
64	滝原Ⅲ遺跡	152	集落跡	縄文・平安	黒曜石片・磁器採集。平成 8 年度調査（町）。縄文後期初頭敷石住居跡 1 軒・土坑 2 基を検出。	文献 2,7
65	滝原Ⅳ遺跡	153	散布地	縄文	平成 25 年度調査（町）。縄文中期前葉住居跡一軒・土坑 2 基を検出。	文献 2,30,201
66	滝原Ⅴ遺跡	154	散布地	平安		文献 2
67	堂光原Ⅰ遺跡	184	散布地	縄文	黒曜石片採集。	文献 2　旧堂光原遺跡

事例で少ないが、丘陵上あるいは最上位段丘に占地しているようである。後半になると河岸段丘の平場を中心として積極的な居住区域を展開している。中期前半の集落は近年東部地区の丘陵上あるいは最上位段丘の遺跡で発見されはじめている。中期初頭（五領ヶ台式期）の遺跡は楡木Ⅱ遺跡で住居跡 3 軒、上原Ⅱ遺跡で屋外焼土遺構を伴う竪穴状遺構が 3 基・土坑21基、上原Ⅳ遺跡[19]で土坑 1 基が確認されている。中期前葉（阿玉台式期）の遺跡は立馬Ⅱ遺跡[20]で五領ヶ台式期～阿玉台式期の住居跡11軒・土坑100基ほど、林中原Ⅰ遺跡で住居跡が 1 軒、幸神遺跡で土坑が検出されている。横壁中村遺跡では中期中葉（勝坂式期）の住居跡、西久保Ⅰ遺跡[21]では同時期の土坑が確認されている。中期中葉（焼町式期）の遺跡は幸神遺跡で焼町土器の深鉢を炉体土器とした住居跡、林中原Ⅱ遺跡[22]と横壁中村遺跡では焼町土器を主体とする住居跡がそれぞれ 1 軒ずつ確認されている他、上ノ平Ⅰ遺跡[23]では同時期の住居跡が12軒検出された。令和元年度に町営横壁土地改良事業の工事中に中期前半の水場遺構が発見され、山根Ⅴ遺跡[24]を追加した。西部地区ではクヌギⅡ遺跡（12）で中期中葉の埋設土器、観奈遺跡[25]で中期前半の土坑が検出されているのみである。中期後半になると列石を伴う拠点集落が吾妻川流域地帯に分布を広げて出現する。長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡を筆頭として近年の調査により石川原遺跡[26]、林中原Ⅰ遺跡、林中原Ⅱ遺跡、東宮遺跡[27]が新たに加わり、西部地区では坪井遺跡に代表される。遺跡を大規模に調査している前 6 者に共通するのは中期後半に引き続き、後期前半（～加曽利Ｂ式期）まで継続して集落が営まれていることである。また坪井遺跡は前 2 者に比して規模は小さいが、弧状石列 1 基、住居跡19軒

（拡張住居含む）、土坑49基が検出されている。土器は大きく４系統（①加曽利Ｅ式土器＜北関東系＞、②曽利・唐草文系土器＜信州系＞、③郷土式土器＜①と②の融合型式＞、④栃倉Ⅱ式土器＜越後系＞）が認められ、特に③の郷土式土器が該期の主体となる時期であり、環浅間山地域を中心に分布し、小文化圏を形成していることが最近分かってきている。この坪井遺跡出土土器の傾向は前６者出土土器、さらに本遺跡出土土器にも看取される。その他、向原遺跡（27）では中期末～後期初頭の敷石住居跡が検出されており、立地から拠点集落のひとつになる可能性が高い。最近の調査では尾坂遺跡[28]で中期後半の住居跡が６軒検出されており、うち３軒が敷石住居と確認され、敷石住居出現期の可能性がある。尾坂遺跡の対岸に位置する久々戸遺跡[29]でも中期末の遺存状態の良い敷石住居が検出され、町では平成30年度に長野原町住民総合センターのエントランス床下へ移築保存を実施した。

④後期

後期の遺跡は規模は縮小するものの吾妻川流域の比較的広い範囲に分布する。上記の中期後半の遺跡の他、西部地区では本町で初めて敷石住居跡を検出したクヌギⅡ遺跡、向原遺跡、滝原Ⅲ遺跡（64）、古屋敷遺跡[30]、東部地区では上ノ平Ⅰ遺跡、石川原遺跡、上原Ⅳ遺跡、林中原Ⅰ遺跡に代表される。後期初頭（称名寺式期）～後期中葉（加曽利Ｂ式期）までの敷石住居跡、掘立柱建物跡は長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡で多く検出されている。長野原一本松遺跡では壁に板材の痕跡を遺す柄鏡形敷石住居跡や方形周礫を明瞭に遺す柄鏡形敷石住居跡が確認されている。また横壁中村遺跡では主軸全長９ｍにも及ぶ大形の柄鏡形敷石住居跡や配石墓群が検出されている。その他、林中原Ⅰ遺跡、上原Ⅳ遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡でも後期初頭～前葉（称名寺式期～堀之内式期）の敷石住居跡等が検出されている。後期後葉（高井東式期）の住居跡は横壁中村遺跡で３軒、久々戸遺跡で土坑が検出されているのみであったが、令和元年度まで調査された石川原遺跡では後期後半～晩期前半の住居跡、配石遺構、水場遺構等が多数検出されている。後期終末（安行１・２式期）に関しては横壁中村遺跡や立馬Ⅰ遺跡で土器片が出土しているがいずれも遺構外である。

⑤晩期

晩期に関してはこれまで石畑Ⅰ岩陰で土器片が出土している他、横壁中村遺跡で晩期末葉（千網式併行）の包含層が確認されているだけであった。遺構の検出は晩期前半は前述の石川原遺跡で確認されてきているものの、依然少なく、後半（特に末葉～弥生中期）に関しては最近の調査で増えつつある。立馬Ⅰ遺跡では晩期末葉の住居跡１軒、横壁中村遺跡では晩期末葉の住居跡２軒、埋甕１基、上原Ⅳ遺跡・西ノ上遺跡[31]では土坑１基が検出されている。立馬Ⅰ遺跡では南信松本盆地に分布する女鳥羽川式土器が出土している。さらに川原湯勝沼遺跡からは該期の土坑が数基検出され、その中の１基は壺棺再葬墓であることが判明している。同一土坑に２個体が埋置されており、ひとつが中沢氏のいう「氷式突帯壺」[32]の上半部が逆位に、もう一方は浮線文系の半精製甕が正位の状態で出土している。この壺棺再葬墓は東日本でも最古級として注目されよう。その他、遺構外ではあるが久々戸遺跡で氷式土器の浅鉢、向原遺跡で大洞Ａ′式まで遡ると考えられる土器片も確認されている。

（3） 弥生時代

弥生時代の遺跡は分布調査の時点で後期に属する３遺跡のみであったが、縄文時代晩期末葉から弥生中期前半までの資料が増えてきている。遺跡は丘陵上あるいは最上位段丘に立地する傾向が強く、縄文時代早期や中期前半と共通しているようである。東部地区では長野原一本松遺跡では中期前半までと考えられる土坑１基、横壁中村遺跡では埋甕（再葬墓か）１基が検出され、東海地方に分布する樫王式土器の甕が出土している。下原遺跡[33]では集石遺構から中期前半を中心とした遺物が認められた。林中原Ⅱ遺跡では中期前半と考えられる住居跡４軒の他、前期末に遡る土坑墓（再葬墓か）、尾坂遺跡でも前期末の再葬墓と思われる土坑や完形土器２個体を出土する土坑、貯蔵穴など、上原Ⅰ遺跡では前期末の短頸壺を納めた土坑、三平Ⅰ遺跡では前期末～中期前半の土坑が数基検出されている。西部地区では遺物出土量が少なく時期が判然としないものが多いが、坪井遺跡でも中期初頭と考えられる住居跡１軒、土坑が５基、向原遺跡では前期に遡るものも含めて中期前半までの土坑が７基確認されている。遺構外では外輪原Ⅰ遺跡（42）、上ノ平遺跡（39）で中期前半までの資料が比較的まとまっている。中期後半に関しては、立馬Ⅰ遺跡で住居跡２軒と土器棺墓２基を含む土坑が数基、後期に関しては、石畑遺跡[34]で土坑１基が確認されているのみである。分布調査時に居家以岩陰群、寺久保遺跡（５）、新田原Ⅰ遺跡[35]で土器片が表採されている他、立馬Ⅰ遺跡では遺構外で、二社平遺跡[36]周辺で後期～古墳時代前期に比定される土器片が表採されている。

（4） 古墳時代

これまで遺構外では他時期の遺物に混入するかたちで５世紀後半の土器片は坪井遺跡、長野原一本松遺跡、二社平遺跡などで確認されてきたが、長野原町で古墳時代の集落として把握されている遺跡は皆無であった。平成15年度に最上位段丘面に立地する林宮原遺跡[37]で５世紀末～６世紀初頭の住居跡が１軒検出されたのが初例である。これに続いて平成16年度の調査で川原湯勝沼遺跡で焼土を伴う土坑から同時期の土師器と遺構外で剣形模造品、下原遺跡でも同時期の住居跡１軒の他、土師器（片）がまとまって出土している。最近の調査では上原Ⅳ遺跡[38]でも５世紀後半～６世紀初頭の住居跡が２軒検出されている。これらは吾妻川に直面した最上位・中位段丘面の自然流路あるいはその周辺で出土していることから水に関連した祭祀遺構の可能性が高い。これら４遺跡で検出された遺構は時期的にほぼ合致しており注目される。さらに上原Ⅰ遺跡で前期と考えられる住居跡からＳ字状口縁台付甕や坩形土器が出土し、中期の高坏を包含する土坑も検出され、これまで空白であった時期の遺構検出事例が徐々にではあるが大規模調査の成果として増えてきている。

また昭和13年に刊行された『上毛古墳綜覧』によれば、大津地区の「鉄塚」（２）、与喜屋地区の「五輪塚」（42）が前方後円墳と報告されている。また昭和11年刊行の『群馬県吾妻郡誌』では林地区の「御塚」が古墳とされ、合計３基が古墳とされている。「五輪塚」は現況で畑としてならされているが、「鉄塚」と「御塚」は円形の形状を保ち、現在は墓地として利用されている。その他、「てつか（てづか）」や林地区中

棚にある「砂塚」に関しては『長野原町誌』で「宮内地区の「てづか」は鉄塚の訛音ではあるまいか。鉄塚の地名には城跡や屋敷跡などに多いといわれ、砂塚との対照がおもしろい」とあり、古墳という認識ではないが同じ林地区に少なくとも「塚」と付くものが３基あるということが注目される。いずれも古墳とするには根拠が薄く、今後の調査に期待したい。

（５） 奈良・平安時代

奈良時代に該当する遺跡は分布調査時の羽根尾Ⅱ遺跡（52）のみで増えていない。これに対して平安時代の遺跡の分布は町内全域に及んでおり、縄文時代とともに本町で原始古代の中心をなす時期である。調査した遺跡を挙げれば、西部地区では、坪井遺跡、向原遺跡、長畝Ⅰ遺跡（47）、長畝Ⅱ遺跡、山岸Ⅱ遺跡（33）、赤羽根遺跡、東部地区では東宮遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡、三平Ⅰ遺跡、下湯原遺跡、西ノ上遺跡、石川原遺跡、川原湯勝沼遺跡、立馬Ⅰ遺跡、東原Ⅰ遺跡[39]、楡木Ⅰ遺跡[40]、楡木Ⅱ遺跡、花畑遺跡、下原遺跡、中棚Ⅰ遺跡[41]、上原Ⅰ遺跡、上原Ⅲ遺跡[42]、上原Ⅳ遺跡、林宮原遺跡、横壁勝沼Ⅰ遺跡、横壁勝沼Ⅲ遺跡[43]、山根Ⅳ遺跡[44]、上野Ⅰ遺跡[45]、上野Ⅱ遺跡[46]、横壁中村遺跡、長野原一本松遺跡、尾坂遺跡などから住居跡や掘立柱建物跡、陥し穴などが検出され、該期集落として把握されている。この中で楡木Ⅱ遺跡では９世紀後半～10世紀前半の住居跡が38軒、竪穴遺構３基が検出され、「長」・「三家」の墨書土器と刻字「称」をもつ石製紡錘車、上ノ平Ⅰ遺跡では住居跡が20軒検出され、県内２例目となる皇朝十二銭「貞観永寶」が出土しており注目される。この他、未報告ではあるが、上原Ⅲ遺跡では鍛冶工房跡１軒・住居跡11軒・焼土遺構６基・陥穴29基など、中棚Ⅰ遺跡では住居跡４軒が検出され、そのうち全容が判明した２軒は一辺が６ｍを超える大形住居であった。このうちの１軒からは「赤」の墨書が大量に出土しておりその性格が注目される。

（６） 中　世

吾妻流域地帯には中世城館跡が点在している。その立地は当時の道との関連性が強く、分岐点の丘陵上など交通の要衝に多い。西から羽根尾城跡（58）、長野原城跡（28）、丸岩城跡[47]、柳沢城跡、金花山砦跡[48]などがあり、その他に林城跡[49]、林の烽火台などといわれている箇所も存在する。これらはいずれも山城である。この中で丸岩城は「丸屋の要害」として『加沢記』にも記され、節理の発達した岩山の山頂に立地している。この丸岩城跡の北西麓に里城としての柳沢城跡が位置し、山城部と丘城部から成る本城を構えている。この柳沢城跡の一部が発掘調査されており、郭跡・堀切・土居・礎石建物・腰曲輪・石組遺構・溝・柵列などが検出されている。遺物のほとんどが礎石建物から出土しておりかつ豊富である。陶器・鉄製品・銅製品・石臼などが出土しており、特に陶器類は常滑系大甕・古瀬戸三耳壺・古瀬戸菊皿・珠洲系陶器甕の他、輸入陶磁器である景徳鎮窯梅瓶などが準完形で出土している。また最近の調査で林中原Ⅰ遺跡範囲内に林城跡が確認され、その範囲や構造が明らかになりつつある。金花山砦跡は明治期の絵図『川原湯真図』に「トリデアト」の

記載があったことから平成12年度に町教委と事業団で踏査して堀切などを確認した。

近年は河岸段丘面の遺跡でも該期の遺構が検出されはじめており、集落として把握されるようになっている。それらを列挙すると立馬Ⅰ遺跡、楡木Ⅱ遺跡、二反沢遺跡[50]、下原遺跡、林宮原遺跡、横壁中村遺跡、西久保Ⅰ遺跡、長野原一本松遺跡、尾坂遺跡となる。このうち、横壁中村遺跡と下原遺跡では石垣で区画された屋敷跡がそれぞれ1棟、長野原一本松遺跡では掘立柱建物群と竪穴状遺構、楡木Ⅱ遺跡でも掘立柱建物群、二反沢遺跡では区画跡のほか羽口や鉄サイなど鍛冶関連遺構などが検出されており注目される。

（7） 近　世

長野原町は浅間火山・白根火山の麓に位置し、古くから度重なる火山災害を被っていることが地層からも窺える。浅間火山の主な噴火活動を概観すれば、すでに9万年前には黒斑山は活動をはじめており、2.4～2.1万年前に黒斑山崩壊を伴う噴火活動があった。その時発生した泥流は、応桑泥流・中之条泥流・前橋泥流と確認された地点ごとに異なる名称で呼ばれている。その後は仏岩火山の活動期で浅間板鼻黄色軽石（As-YP）降下をもたらした。1万年前頃から前掛山の活動が始まり、その噴火により縄文時代中期の浅間D軽石（As-D）、4世紀の浅間C軽石（As-C）、天仁元（1108）年の浅間B軽石（As-B）、天明3（1783）年の浅間A軽石（As-A）という4つの大きなテフラがもたらされた。これらは、浅間山の活動史を如実に物語る証であり、群馬県内の考古年代の指標にもなっている。その中でも天明3（1783）年の噴火は軽石降下後に襲った泥流（鎌原火砕流）により吾妻川・利根川流域沿いの町村に甚大な被害をもたらし、有史以来の記録的火山災害として知られている。この鎌原火砕流によって埋没した嬬恋村の旧鎌原村が昭和54年から調査され、「延命寺観音堂の石段」、「十日ノ窪」など天明の大噴火における被災遺跡として注目を集めたが[51]、翌年に本町でも山間地域若者定住環境整備モデル事業として陸上自衛隊によるグランド造成中に日待供養塔・石臼・農具などが出土し、旧新井村跡（50）の痕跡が確認された。平成14年度には町立中央小学校の屋内体育館・プールの新築に伴って、当時の分限者小林助右衛門屋敷の一部が発見され（31）、石垣・土蔵・礎石建物跡が調査されている。また平成16年度には長野原市街地における下水道工事で建築部材・薬缶・鉄釜・石臼の他、「青面金剛塔」が泥流中から出土しており、さらに平成25・28年度に町道長野原向原線道路整備事業に伴い、旧長野原宿のほぼ中央にあった旅籠大津屋の建物の一部と裏庭を検出し、旧長野原村が壊滅的状況であった一端を垣間見る発見があった[52]。

近年、ダム関連工事に伴う発掘調査により、これまで認識されていなかった下位・中位段丘で泥流に埋もれた遺跡が相次いで発見された。それらを列挙すると、嶋木Ⅰ遺跡（24）、東貝瀬Ⅲ遺跡（23）、町遺跡（29）、下田遺跡[53]、下原遺跡、中棚Ⅱ遺跡[54]、西宮遺跡[55]、東宮遺跡、石川原遺跡、西ノ上遺跡、川原湯勝沼遺跡、横壁勝沼遺跡、横壁中村遺跡、西久保Ⅳ遺跡[56]、尾坂遺跡、久々戸遺跡などがある。これらの遺跡では主として畑跡・ヤックラ・道・石垣・溝・井戸・覆屋構造物な

どが検出された。現時点での成果として天明泥流に埋まった畑景観の復原や「ツカ」や平坦面から推定される「単位畑」の構造、さらには泥流とその逆級化構造のメカニズムなどに関して詳細な検討がなされている。また東宮遺跡、西宮遺跡、尾坂遺跡、下田遺跡などでは民家跡も検出されている。特に東宮遺跡は泥流に埋没した川原畑村、石川原遺跡は川原湯村を面的に調査した貴重な発見である。建物跡のほか畑・道・溝・石垣・集石・土坑等を検出した。通常遺存しない建築部材や漆器など植物遺存体の検出例が多く、当時の川原畑村の景観復原はもとより、近世建築学、民俗学など多角的な分析に寄与する部分が大きいと考えられる。さらに隣接する西宮遺跡では埋没畑とともに南北方向に復旧溝（坑）が検出され、被災後の復旧の痕跡が本町ではじめて確認された。

また推定される泥流到達範囲外でも該期の遺構・遺物は確認されている。林中原Ⅱ遺跡、上原Ⅳ遺跡、二反沢遺跡、幸神遺跡、長野原一本松遺跡が該当する。このうち上原Ⅳ遺跡では溝（旧河川流路）を検出しているがそこから下駄や曲物の底・農具・石鉢・陶磁器など生活道具が出土している。

第２図　勘場木石器時代住居跡の位置図（1/2,500）

第２表　経緯年表

年月日	イベント	備　　考
昭和 28 年暮れ	遺跡の発見	塩野要造・新一
昭和 29 年 1 月	竪穴住居 1 軒を発掘	〃
同年 1 月 23・24 日	現地調査、実測図作成	山崎義男
	『群馬県長野原町勘場木　石器時代竪穴住居阯について』	〃
同年 1 月 29 日	書面上の勘場木遺跡住居址および遺物の発見日	
同年 2 月 1 日	「遺物発見届」提出	町教育長桜井東介→県文化財保護委員事務局長
同年 2 月 3 日	「遺物発見届」提出	塩野要造→警察署長
同年 2 月 5 日	「保管證」提出（住居址・土器・石器）	塩野要造→県教委教育長黒沢得男
同年 5 月 7 日	「勘場木住居址保存施設費明細書」発行	大津区長黒岩喜四郎→町教委
同年 5 月 11 日	県教委社会教育課岡田氏より手紙、14 日に参上の旨	県教委→町教委
同年 5 月 19 日	県指定史跡申請に向けて、「指定申請委任状」と「管理委任状」を作成	塩野要造→町教育長　塩野要造→町教委
同年 5 月 21 日	「県指定史跡指定申請について」提出	町教育長桜井東介→県教育委員会
同年 11 月 12 日	県教委岡田氏より再度手紙、11 月 25 日までに尾崎氏（群大教授、県文化財専門委員）に調査依頼をするようにとのこと	県教委→町教委
同年 12 月 28 日	発掘における文化財の措置の書類作成	町教育長桜井東介
昭和 30 年 1 月 14 日	群馬県史跡指定　史第 39 号	
同年 3 月 3 日	昭和 29 年 12 月 28 日に提出された書類に基づき、塩野氏に遺物が譲与された旨の書類	文化財保護委員会→塩野要造
同年 3 月 5 日	「郷土史跡めぐり（一）勘場木石器時代住居跡」『長野原分校新聞』創刊号	
同年 5 月 5 日	山崎義男氏、塩野氏宅来訪か。5 月 6 日のはがき、来訪時のお礼（5 月 7 日安中の消印）	山崎→塩野
昭和 44 年 5 月 6 日	測量図「勘場木住居阯（縄文期）」	三洋開発株式会社企画部
昭和 45 年 11 月 16 日～ 23 日	第 7 回群馬県移動博物館「郷土の文化財」展へ遺物貸し出し 会場：吾妻信用組合 2 階大会議室（中之条町伊勢町）	群馬県立博物館
昭和 47 年 12 月 25 日	『群馬県吾妻郡長野原町（群馬県史跡指定）勘場木遺跡』	塩野新一
昭和 51 年 3 月	「勘場木遺跡」『長野原町誌』上巻	
昭和 52 年 7 月～ 53 年 1 月	「集印メモリーサイクリング」集印箇所に選定される	（財）日本サイクリング協会
昭和 52 年 9 月 11 日	「初秋の吾妻渓谷（関東耶馬渓）と浅間火山博物館などに天明の浅間山噴火のあとをみる。」『関東の史蹟と文化財　第 369 号』 関東史蹟会第 395 回例会にて見学	関東史蹟会
昭和 62 年度	群馬県史に掲載するため、遺物の実測と遺構補足測量を実施。	能登健・桜岡正信
昭和 63 年 3 月	「勘場木遺跡」『群馬県史』資料編 1	
平成元年 3 月 31 日	「勘場木石器時代住居跡」『長野原町の文化財』	町教委
平成 2 年度	保存修理事業①　上屋設置工事	
平成 3 年 4 月 14 日	上毛新聞記事「外からでも観察 OK　長野原の勘場木住居跡保存用の新覆屋が完成」	
平成 11 年 2 月 1 日	「勘場木石器時代住居跡」『群馬県遺跡大辞典』	上毛新聞社
平成 13 年	「勘場木石器時代住居跡」『群馬県の史跡（原始古代編）』	群馬県教育委員会
平成 16 年 3 月	「石器時代の住居跡」『写真集「大津のあゆみ」』	長野原町公民館大津分館
平成 17 年 1 月 30 日	『群馬の遺跡・2　縄文時代』掲載	上毛新聞社・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団編
平成 17 年 8 月 30 日	県教委による上屋現況視察	飯島課長・前川副主幹
同年 9 月 5 日	県指定史跡「勘場木石器時代住居跡」の保護策について（案）	県教委文化課
平成 17 年度	保存修理事業②　保存施設改修工事	
平成 25 年 3 月	「勘場木石器時代住居跡」『遺構露出展示に関する調査研究報告書』	奈良文化財研究所文化遺産部遺跡整備研究室編
平成 29 年 6 月 9 日	県教委による現況視察	小林主幹
平成 30 年度	保存修理事業③－１　再調査・測量・遺構保存処理	
平成 30 年 4 月 23 日	「現状変更等許可申請書」・「土地の所在等異動届」提出	町教育長→県教育長

年月日	イベント	備　　考
同年６月25日	「群馬県指定史跡勘場木石器時代住居跡の現状変更等（保存に影響を及ぼす行為）の許可」について・「群馬県指定史跡の所有者変更届について」通知	県教育長・文化財保護課長→町教育長
同年９月３日	「第43回全国遺跡環境整備会議資料集作成にかかるアンケート調査について」回答	
同年９月10日	県教委による現況視察	小林主幹・今城主事
平成31年１月８日	「現状変更等終了届について」	町教育長→県教育長
平成31（令和元）年度	保存修理事業③－２　遺物再整理・上屋改修工事（屋根・壁・低反射ガラス交換）	
令和２年度	保存修理事業③－３　（保存修理事業報告書作成）	

第２節　遺跡の発見から群馬県史跡指定

１　遺跡の発見と保存

昭和28（1953）年の暮れに土地所有者である塩野要造氏とその子息新一氏両氏が畑を田圃にするため開墾作業中に偶然完形土器１点を発見したのに興味を覚え、発掘を続けているうちに住居西南部を発見したので、なお続行して翌昭和29（1954）年１月に竪穴住居を１軒検出した。そこで同町教育長桜井東介氏が来橋して、県会図書室長萩原進氏にその旨を報告し、県文化財専門委員であった山崎義男氏が同年１月23・24日に現地で大雪のなか遺跡・遺物を調査するに至った。

同年２月１日付けで「遺物発見届」が町教育長から文化財保護委員事務局長あて、同年２月３日付けで「遺物発見届」が塩野要造氏から長野原警察署長あてに提出された。いずれも書面上の発見日は同年１月29日となっている。また同年２月５日付けで「保管証（住居址・土器・石器）」が塩野要造氏から県教育長あてに提出された。

遺跡の保存については、同年5月７日付けで「勘場木住居址保存施設費明細書」（第３・４図）が当時の大津区長黒岩喜四郎氏から町教育委員会へ報告されていることから、発見からまもなくして保存の方針が決められていたことが理解できる。また明細書の内訳をみると、保存施設の建設費36,466円とあり、同年町一般会計に同額が計上されていることから、建設費に町費が充てられたということである。この明細書から農閑期を利用して地元の労働奉仕も加わり初代保存施設が設置されたことが明らかになった。寄付も地元大津村だけでなく、隣の羽根尾村からもされており、当時の地元の盛り上がりが想像される。

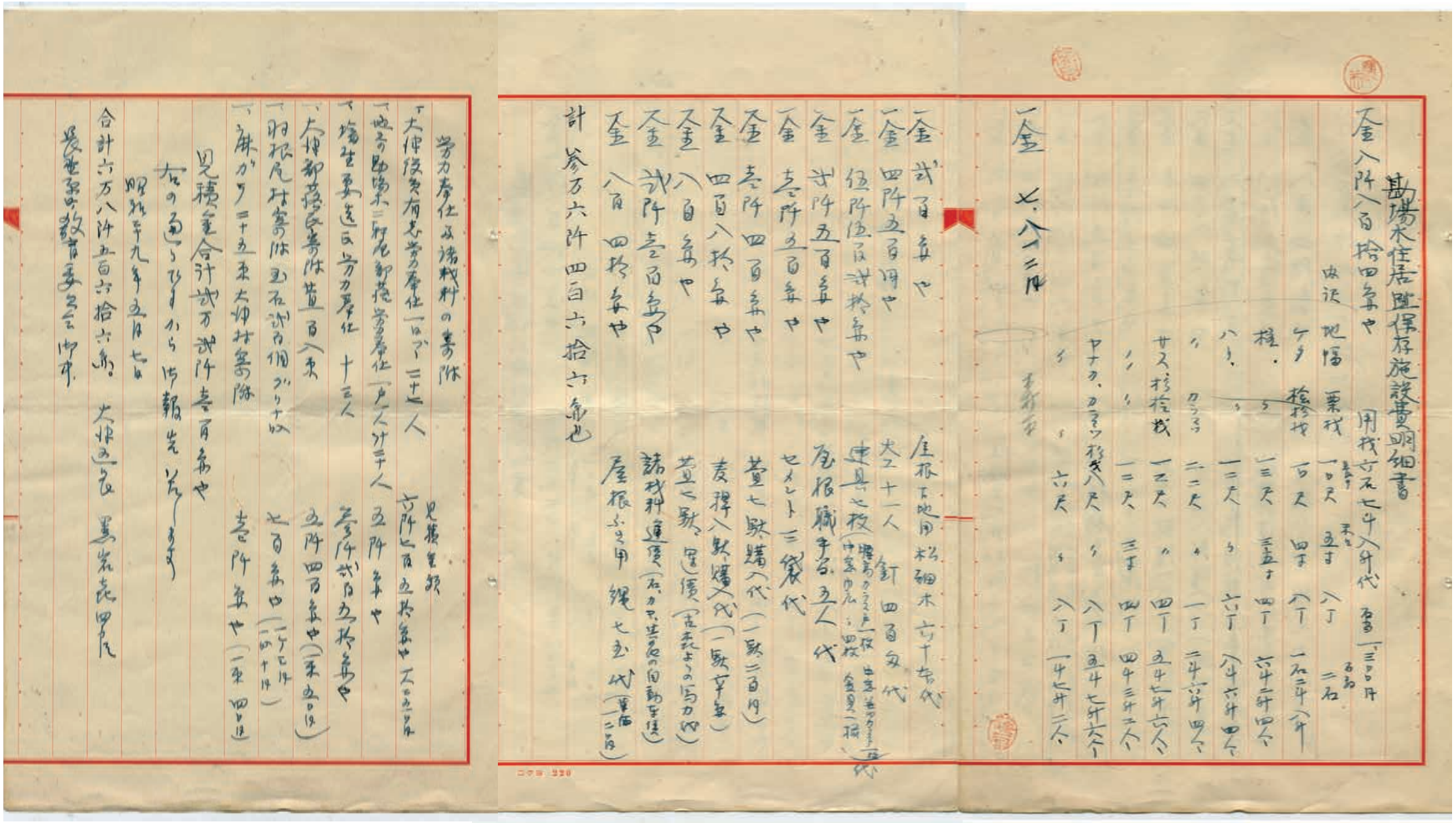
２　群馬県史跡指定に至る経緯

勘場木石器時代住居跡の経緯年表を第２表に示す。

発見から県史跡指定までは約１年間であった。この１年間にどのような動きがあったのかを当時の綴りから書類を通して見てみることにする。

まず「群馬県指定文化財の申請について」（第５図）に申請に向けた注意事項が５点記されている。

１．群馬県指定文化財の申請は群馬県文化財保護条例（昭和27年条例第54号）及び群馬県文化財保護条例施行規則によること。



第３図　「勘場木住居址保存施設費明細書」原本

勘場木住居址保存施設費明細書

一金　八仟八百拾四圓也　　用材六石七斗八升代　石当一、三〇〇円

内訳

		長サ	末口	石高
地幅　栗材		一〇尺	五寸　八丁	二石
ケタ　桧杉材		一〇尺	四寸　八丁	一石二斗八升
柱　桧杉材		一三尺	三-五寸　四丁	六斗二升四合
ハリ　桧杉材		一二尺	三-五寸　六丁	八斗六升四合
ハリ　カラマツ		二二尺	三-五寸　一丁	二斗六升四合
サス　杉桧材		一二尺	三-五寸　四丁	五斗七升六合
サス　杉桧材		一二尺	三寸　四丁	四斗三升二合
ヤナカ　カラマツ杉材		八尺	三寸　八丁	五斗七升六合
ヤナカ　カラマツ杉材		六尺	三寸　八丁	一斗七升二合

一金　七、八一二円

一金　弐百圓也　屋根下地用松細木　六十本代

一金　四仟五百円也　大工十一人　釘四百匁代

一金　伍仟伍百弐拾圓也　建具七枚　（腰高ガラス戸一枚・中窓並巾ガラス戸一枚　中窓巾広ガラス戸四枚・金具一揃）代

一金　弐仟五百圓也　屋根職手間　五人代

一金　壱仟五百圓也　セメント　三袋代

一金　壱仟四百圓也　萱　七駄購入代（一駄二百円）

一金　四百八拾圓也　麦稈（わら）　八駄購入代（一駄六十圓）

一金　八百円也　萱　七駄運價代（古森よりの馬力代）

一金　弐仟壱百圓也　諸材料　運價（石、カヤ、其の他の自動車價）

一金　八百四拾圓也　屋根ふき用縄　七玉代（単価一二〇円）

計　参万六仟四百六拾六圓也

労働奉仕及諸材料の寄付

一、大津役員有志労力奉仕　一日づつ二十七人　六仟七百五拾圓也　一人二五〇円

一、地元の勘場木二軒屋部落労力奉仕　一戸一人計二十人　五仟圓也

一、塩野要蔵氏労力奉仕　十三人　参仟弐百五拾圓也

一、大津部落民寄附　萱百八束　五仟四百圓也（一束五〇円）

一、羽根尾村寄附　玉石弐百個グリ十叺七百圓也（一ケ三円、一叺十円）

一、麻ガラ二十五束　大津村寄附　壱仟圓也（一束四〇円）

見積金合計弐万弐仟壱百圓也

右の通りですから御報告いたします

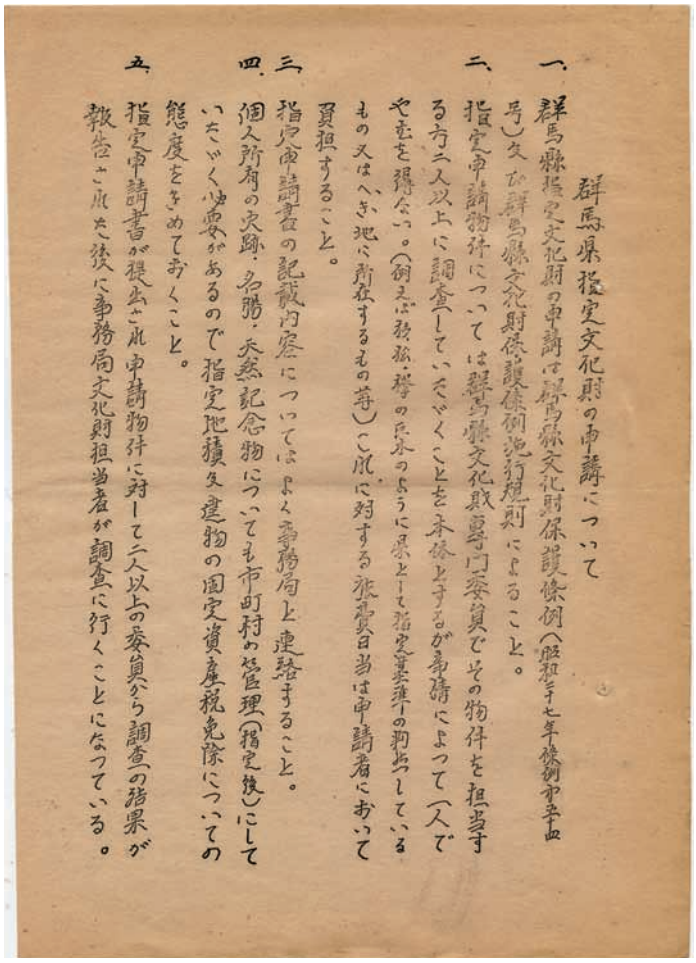
昭和二十九年五月七日

合計六万八仟五百六拾六圓　大津区長　黒岩喜四郎

長野原町教育委員会御中

末口…丸太の太さを表す用語、片方が細い丸太の細い方の直径
駄…馬一頭に背負わせる荷物の重量の単位　約135kg
グリ…裏込め石のこと
叺…カマス、筵で作った袋、土嚢の先祖
最後の合計は五万八仟五百六拾六圓の間違いである。

第４図　「勘場木住居址保存施設費明細書」読み下し文



群馬県指定文化財の申請について

一、群馬県指定文化財の申請は群馬県文化財保護條例（昭和二七年條例第五四号）及び群馬県文化財保護條例施行規則によること。

二、指定申請物件については群馬県文化財専門委員でその物件を担当する方二人以上に調査していただくことを本体とするが事情によって一人でもやむを得ない。（例えば杉・松・欅の巨木のように県として指定基準の判断しているもの又はへき地に所在するもの等）これに対する旅費日当は申請者において負担すること。

三、指定申請書の記載内容についてはよく事務局と連絡すること。

四、個人所有の史跡・名勝・天然記念物についても市町村の管理（指定後）にしていただく必要があるので指定地籍及建物の固定資産税免除についての態度をきめておくこと。

五、指定申請書が提出され申請物件に対して二人以上の委員から調査の結果が報告された後に事務局文化財担当者が調査に行くことになっている。

第５図　「群馬県指定文化財の申請について」

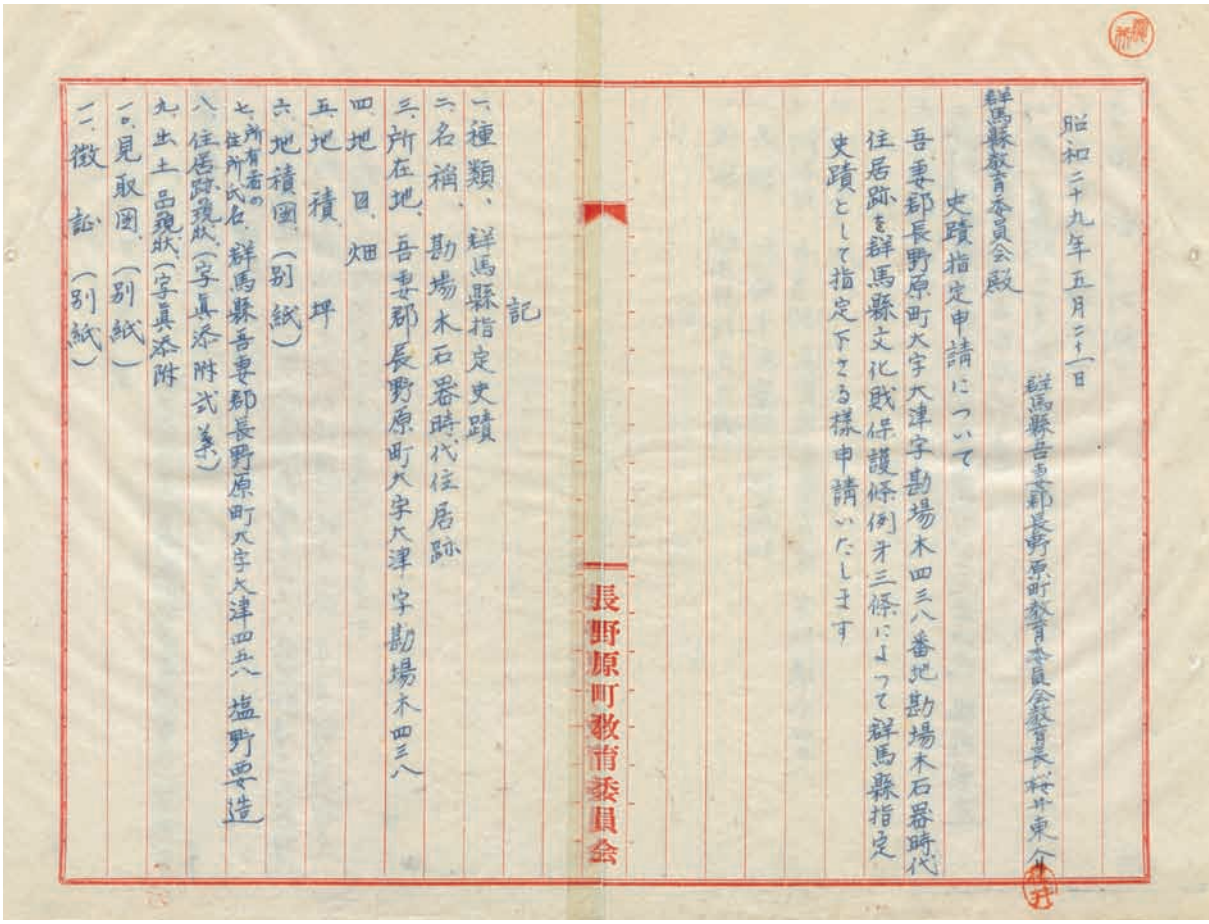
２．指定申請物件については群馬県文化財専門委員でその物件を担当する方二人以上に調査していただくことを本体とするが事情によって一人でもやむを得ない（例えば杉・松・欅の巨木のように県として指定基準の判断しているもの又はへき地に所在するもの等）。これに対する旅費日当は申請者において負担すること。

３．指定申請書の記載内容についてはよく事務局と連絡すること。

４．個人所有の史跡、名勝、天然記念物についても市町村の管理（指定後）にしていただく必要があるので指定地籍及建物の固定資産税免除についての態度をきめておくこと。

５．指定申請書が提出され申請物件に対して二人以上の委員から調査の結果が報告された後に事務局文化財担当者が調査に行くことになっている。

指定に向けての動き出しは、昭和29（1954）年５月11日付けの県教委社会教育課の岡田氏からの手紙であろう。同年５月14日に来町する旨が記されており、上述の注意事項３ないし５に基づき、現地調査ならびに申請書作成に関する指導がなされたと考えられる。岡田氏の来町の後、県指定史跡申請に向けて同年５月19日付けで塩野要造氏から町教育長宛ての「指定申請委任状」（第９図）と同じく町教委宛ての「管理委任状」（第10図）が作成され、同年５月21日付けで「県指定史跡指定申請書について」（第６図）が町教育長から県教育委員会宛てに作成・提出されている。申



昭和二十九年五月二十一日

群馬縣吾妻郡長野原町教育委員会教育長 [illegible]

群馬縣教育委員会殿

史蹟指定申請について

吾妻郡長野原町大字大津字勘場木四三八番地勘場木石器時代住居跡を群馬縣文化財保護條例第三條によつて群馬縣指定史蹟として指定下さる様申請いたします

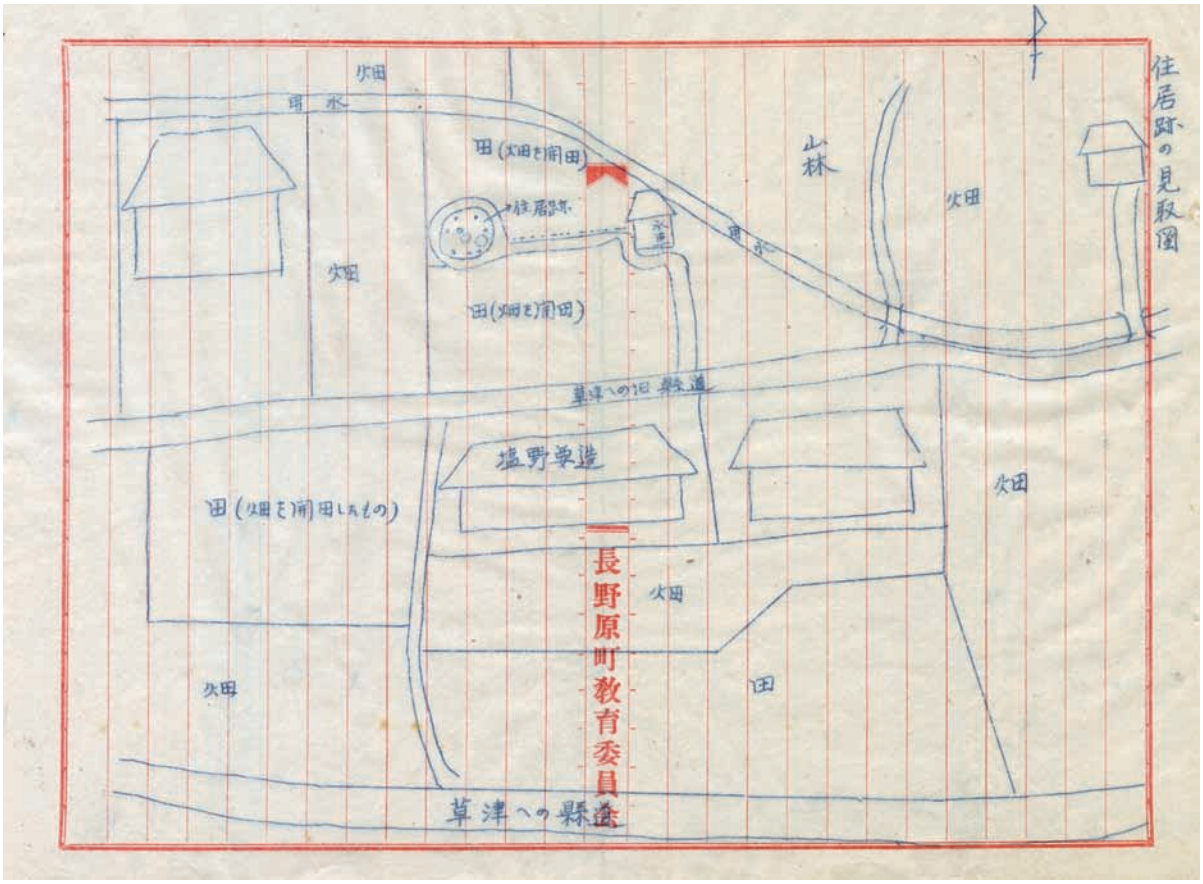
長野原町教育委員会

記

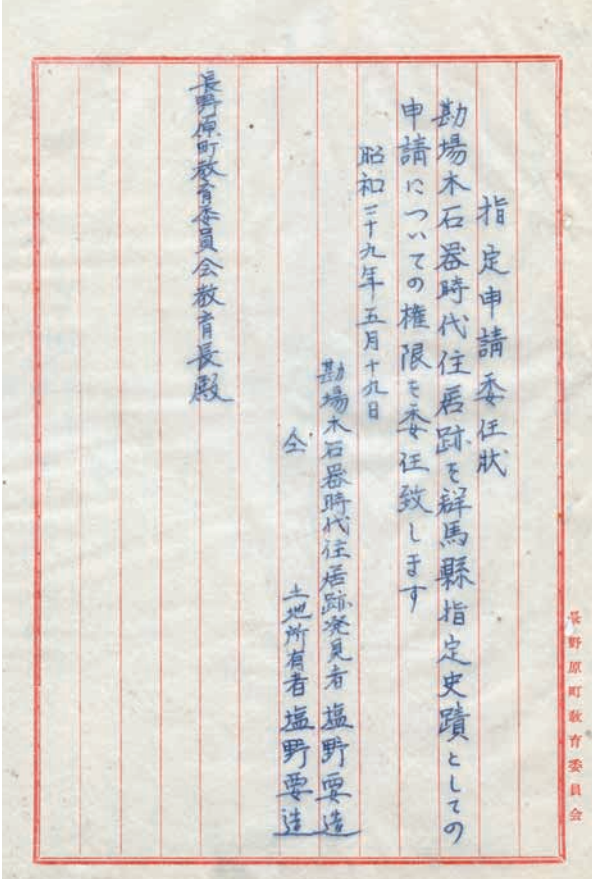
一、種類、群馬縣指定史蹟
二、名稱、勘場木石器時代住居跡
三、所在地、吾妻郡長野原町大字大津字勘場木四三八
四、地目、畑
五、地積、坪
六、地積図（別紙）
七、所有者の住所氏名、群馬縣吾妻郡長野原町大字大津四五八 塩野要造
八、住居跡現状（写真添附式第）
九、出土品現状（写真添附）
一〇、見取図（別紙）
一一、徴証（別紙）

第６図 「史跡指定申請について」

第７図 「地籍図」（添付書類①）



第８図　「住居跡の見取図」（添付書類②）



指定申請委任状

勘場木石器時代住居跡を群馬縣指定史蹟としての申請についての権限を委任致します

昭和三十九年五月十九日

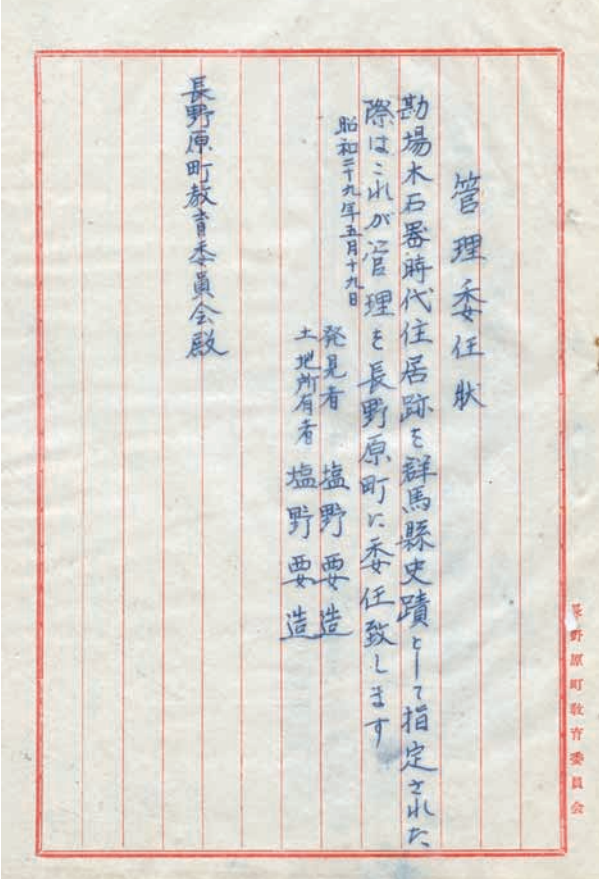
勘場木石器時代住居跡発見者　塩野要造

仝　土地所有者　塩野要造

長野原町教育委員会教育長殿

長野原町教育委員会

第９図　「指定申請委任状」（添付書類③）



管理委任状

勘場木石器時代住居跡を群馬縣史蹟として指定された際はこれが管理を長野原町に委任致します

昭和三十九年五月十九日

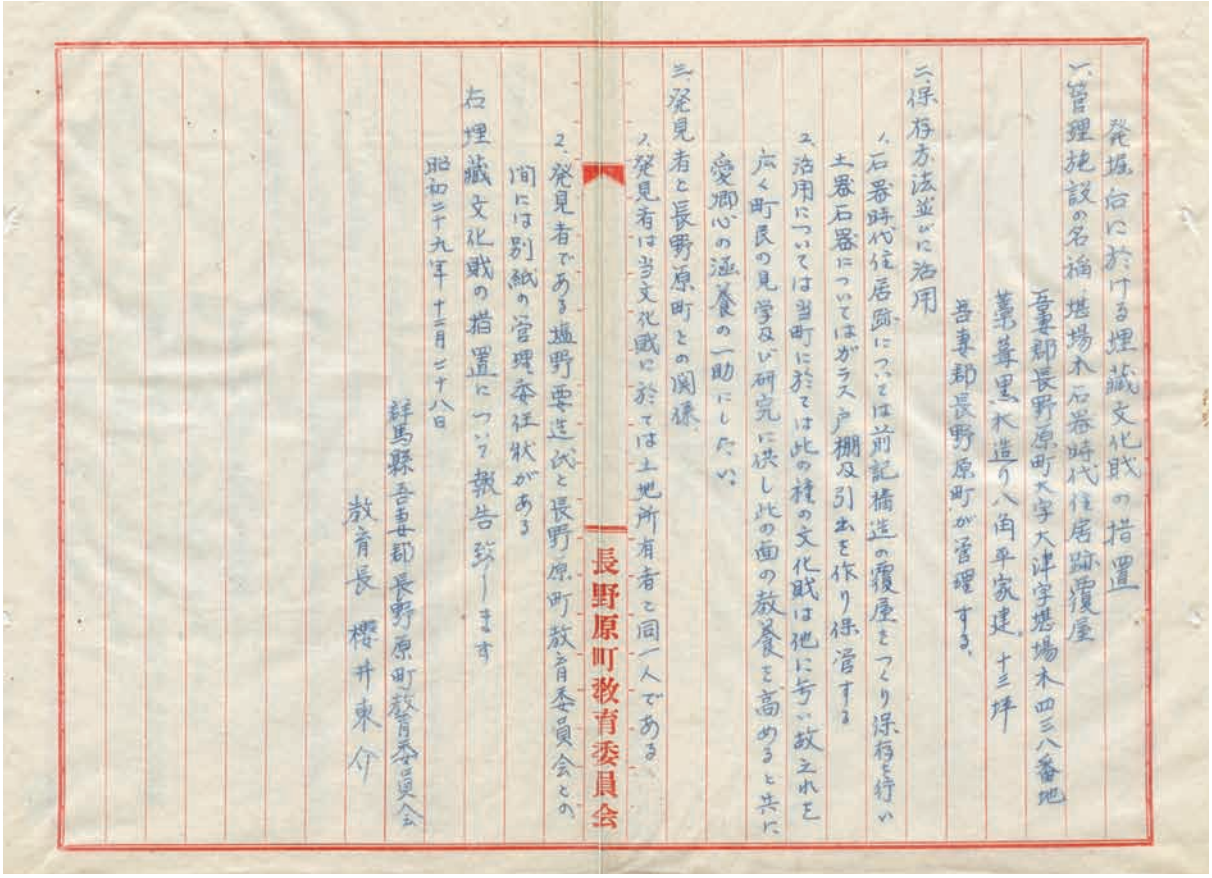
発見者　塩野要造

土地所有者　塩野要造

長野原町教育委員会殿

長野原町教育委員会

第 10 図　「管理委任状」（添付書類④）



発掘后に於ける埋蔵文化財の措置

一、管理施設の名称 堪場木石器時代住居跡覆屋
吾妻郡長野原町大字大津字堪場木四三八番地
藁葺黒木造り八角平家建 十三坪
吾妻郡長野原町が管理する。

二、保存方法並びに活用
イ、石器時代住居跡については前記構造の覆屋をつくり保存を待ち
土器石器についてはガラス戸棚及引出を作り保管する
ロ、活用については当町に於ては此の種の文化財は他に与し故之れを
広く町民の見学及び研究に供し此の面の教養を高めると共に
愛郷心の涵養の一助にしたい。

三、発見者と長野原町との関係
イ、発見者は当文化財に於ては土地所有者と同一人である
ロ、発見者である塩野要造氏と長野原町教育委員会との
間には別紙の管理委任状がある

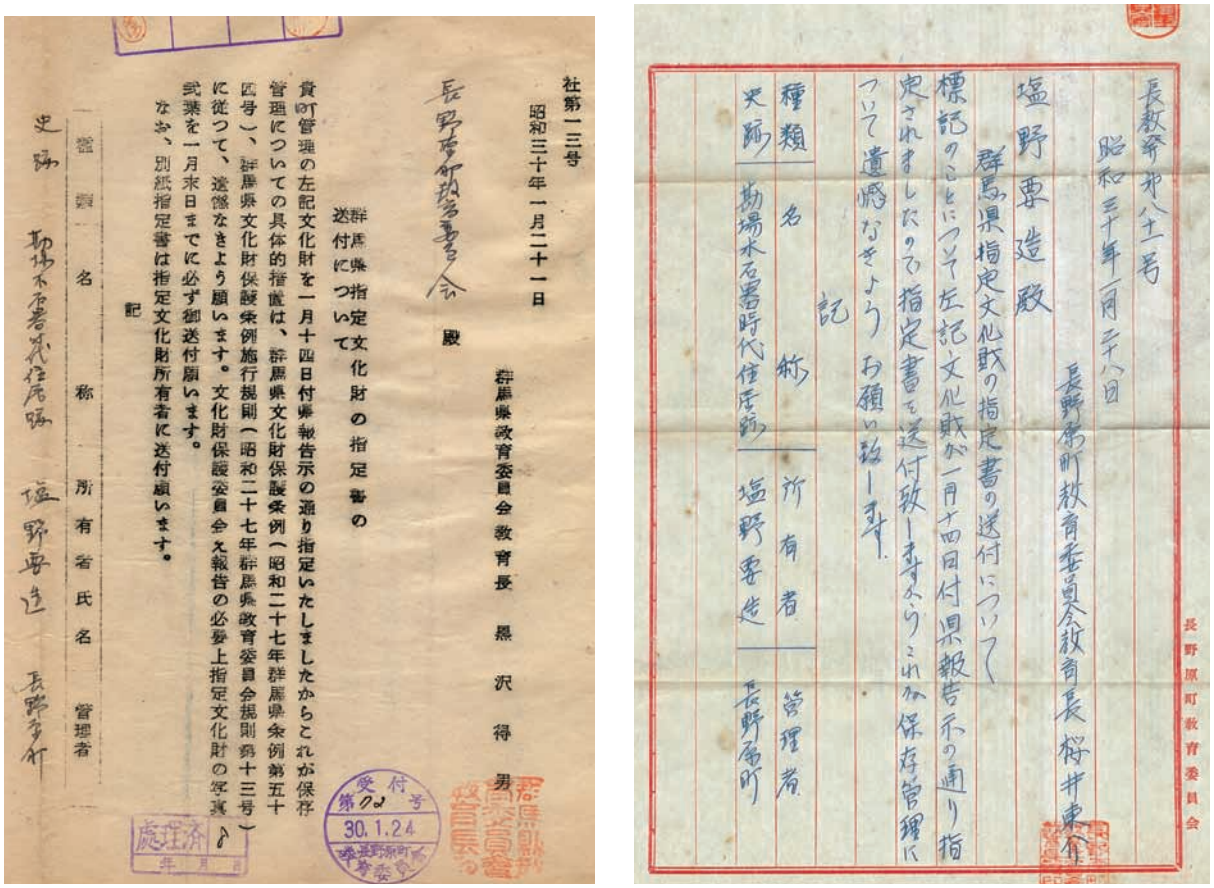
右埋蔵文化財の措置について報告致します

昭和三十九年十二月二十八日

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会
教育長 櫻井東介

長野原町教育委員会

第 11 図 「発掘後における埋蔵文化財の措置」



社第一三号
昭和三十年一月二十一日
群馬県教育委員会教育長 県沢得男

長野原町教育委員会 殿

群馬県指定文化財の指定書の送付について

貴町管理の左記文化財を一月十四日付県報告示の通り指定いたしましたからこれが保存管理についての具体的措置は、群馬県文化財保護条例（昭和二十七年群馬県条例第五十四号）、群馬県文化財保護条例施行規則（昭和二十七年群馬県教育委員会規則第十三号）に従つて、遺憾なきよう願います。文化財保護委員会へ報告の必要上指定文化財の写真弐葉を一月末日までに必ず御送付願います。

なお、別紙指定書は指定文化財所有者に送付願います。

記

種類	名称	所有者氏名	管理者
史跡	堪場木石器時代住居跡	塩野要造	長野原町

受付 第92号 30.1.24 長野原町教育委員会

処理済 年 月 日

長教第九八二号
昭和三十年一月二十八日
長野原町教育委員会教育長 櫻井東介

塩野要造殿

群馬県指定文化財の指定書の送付について

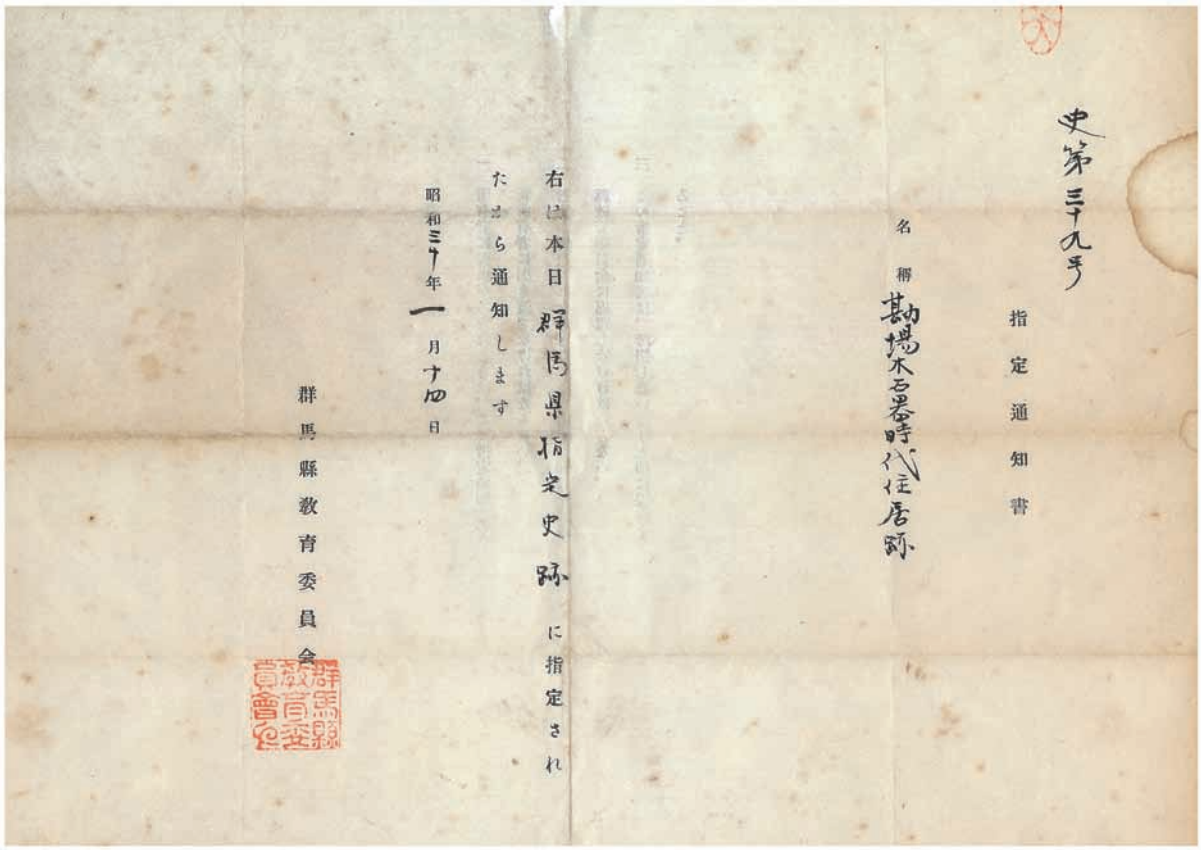
標記のことについて左記文化財が一月十四日付県報告示の通り指定されましたので指定書を送付致しますのでこれが保存管理について遺憾なきようお願い致します。

記

種類	名称	所有者	管理者
史跡	堪場木石器時代住居跡	塩野要造	長野原町

長野原町教育委員会

第 12 図 「群馬県指定文化財の指定書の送付について」（左：県→町　右：町→所有者）



史第三十九号

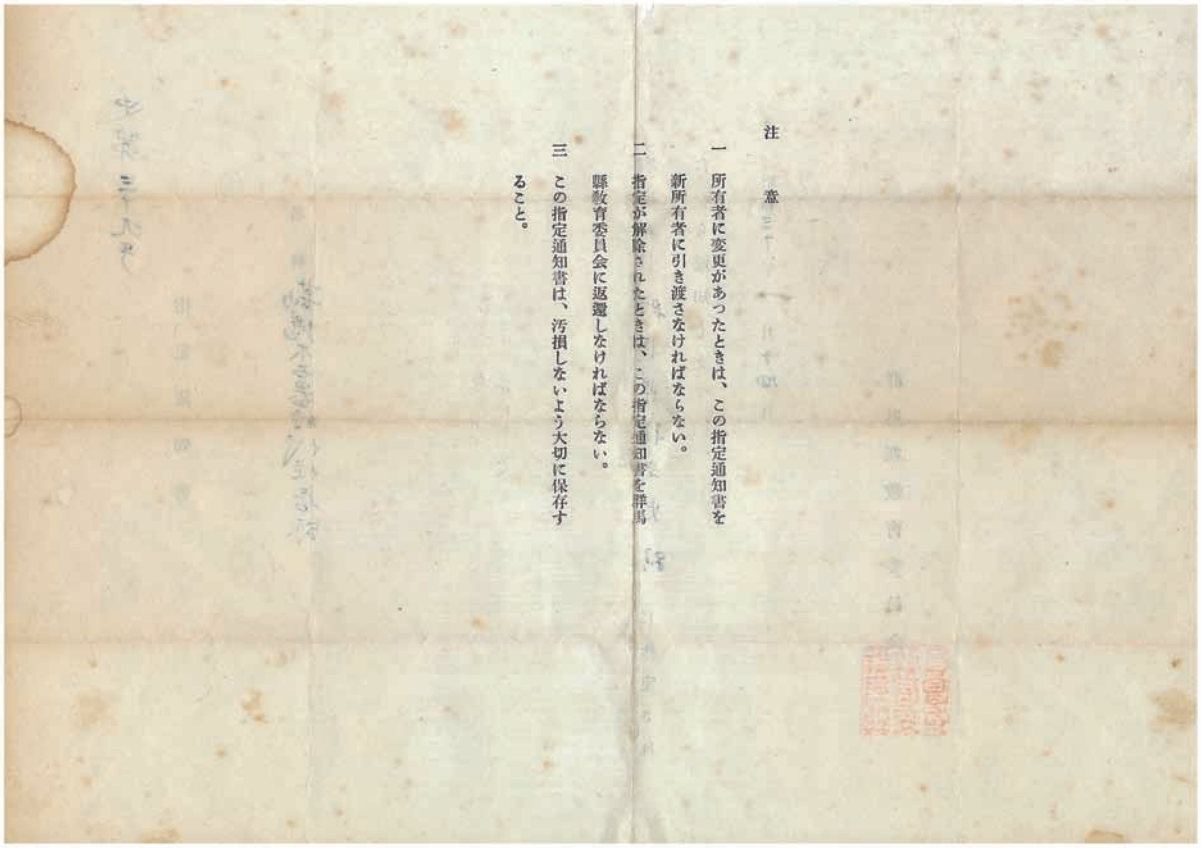
指定通知書

名称　勘場木石器時代住居跡

右に本日群馬県指定史跡に指定されたから通知します

昭和三十年一月十四日

群馬縣教育委員会



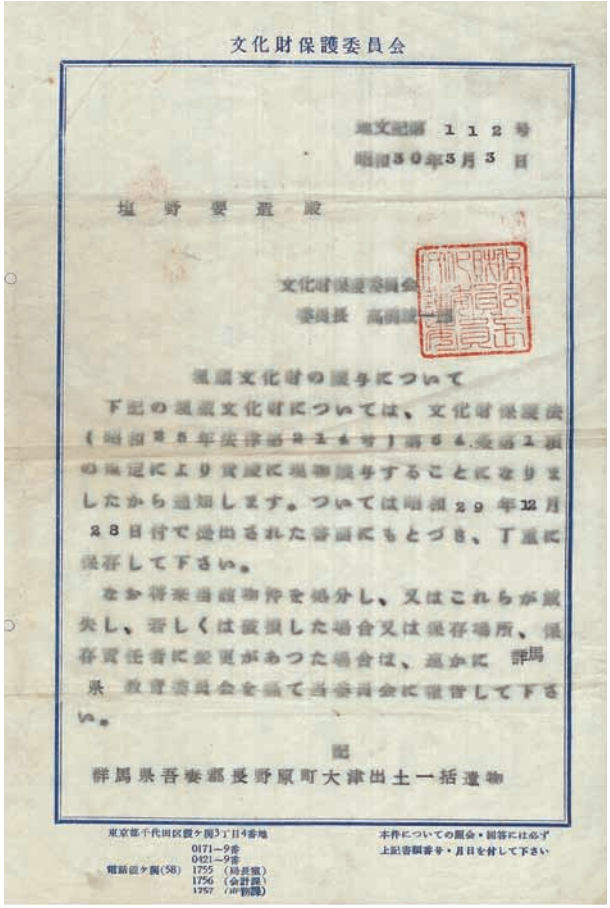
注意

一　所有者に変更があったときは、この指定通知書を新所有者に引き渡さなければならない。

二　指定が解除されたときは、この指定通知書を群馬縣教育委員会に返還しなければならない。

三　この指定通知書は、汚損しないよう大切に保存すること。

第 13 図　「指定通知書」（上：表書　下：裏書）



文化財保護委員会

地文記第 1 1 2 号
昭和30年3月 3 日

塩 野 要 造 殿

文化財保護委員会
委員長 高橋誠一郎

埋蔵文化財の譲与について

下記の埋蔵文化財については、文化財保護法（昭和25年法律第214号）第64条第2項の規定により貴殿に埋蔵譲与することになりましたから通知します。ついては昭和29年12月28日付で提出された書面にもとづき、丁重に保存して下さい。

なお将来当該物件を処分し、又はこれらが紛失し、若しくは破損した場合又は保存場所、保存責任者に変更があつた場合は、速かに 群馬県 教育委員会を通て当委員会に報告して下さい。

記

群馬県吾妻郡長野原町大津出土一括遺物

東京都千代田区霞ケ関3丁目4番地
0171−9番
0421−9番
電話霞ケ関(58) 1755（局長室）
1756（会計課）
1757（庶務課）

本件についての照会・回答には必ず
上記書類番号・月日を付して下さい

第 14 図 「埋蔵文化財の譲与について」

請書には前出の委任状の他に、地籍図（第７図）と見取図（第８図）が添付されている。その後同年11月12日付けで県教委岡田氏から町教育長宛に「11月25日までに群馬大学の尾崎教授（県文化財専門委員）に調査依頼をするように」との旨の手紙が来ている。これは先述した注意事項２ないし５に基づいてのものと考えられる。このことに関して尾崎教授へ依頼して実際に本住居跡へ足を運んだのか否かは文書が残されていない。同年12月28日付けで「発掘後における埋蔵文化財の措置」（第11図）が提出された。ここには「管理施設の名称　勘場木石器時代住居跡覆屋」、「藁葺黒木造り　八角平家建　十三坪」と記されており、この時点で保存施設は完成していることが理解される。この書類に対しては、昭和30（1955）年３月３日付け、地文記第113号にて文化財保護委員会委員長から塩野要造氏宛に「埋蔵文化財の譲与について」（第14図）が通知されている。

本住居跡は同年１月14日付けの県報告示で群馬県指定史跡に指定された。その「指定通知書」（第13図）は同年１月21日付け、社第13号「群馬県指定文化財の指定書の送付について」（第12図）で町教委を通して所有者である塩野要造氏へ出されている。

また指定からまもなくの同年３月５日に発行された『長野原分校新聞』創刊号（第15図）においても本住居跡が１面にわたって掲載されている。文章は山崎氏の報文を引用しているが、当時の保存施設の外観や出土遺物の貴重な写真が掲載されている。

郷土史跡めぐり

【一】勘場木石器時代住居跡

▼所在地　吾妻郡長野原町大字大津勘場木四三番地

▼住居跡

住居跡の西南部に図示の通り偶然発掘に際し、周壁は取崩され不明であるが　底面のロームの堅結状態からしてその境界は容易に判断出来るのである。住居跡の平面は平均約四米五〇糎の近似円形をなしている。表土は約五〇糎程度の黒色土であり、それにつゞいて黄色粘土層となり、その層に掘り込んで住居跡が出来ている。

注意されるのは、北から南に向つて図示A～A断面の如く約三度の勾配で底面が傾斜している点と北部周壁は床面から約四〇糎に近く深掘されているが、南部に向うに従つて、その深さを感じている点であり……これはロームの自然勾配上に底面を定めて北部のみ、深くロームの層を掘り下げ南部は勾配の変化に従い、殆んど無壁となした如く築造されたものの如く、所謂片掘り形の竪穴式住居跡であつて、こうした例は神奈川県浜市青ヶ台遺蹟、本県では多野郡藤岡市光徳寺裏遺蹟等で如実にその類似を知るのである。

周溝は東北部のみに発見されたが底面の高所から端を発し、南部の最低部でその巾と深さを増している。その事は排水の理に従つている如く、推思される。

炉跡としては確認出来るのは、図面中央記号14であるが、長径約七〇糎、短径約六〇糎の近似短形をなし、灰及木炭を発見した。

近接B号は長径約五〇糎、短径約四〇糎の楕円形をなし、これにも灰を伴つたのであるが、近接して二ヶ所の炉の必要も考えられないし、底面及周壁の状態からして重複した竪穴住居跡とも考えられないので此の場合炉跡として、断定出来難く、一応疑問としたい。

15号は長径一米三〇糎、短径一米一〇糎の楕円形をした凹部であるが　こうした凹部はこの種の竪穴住居跡には往々見受けられるものの如く強く、強いて推測するなら所謂貯蔵所とも考えられよう。

柱孔は十二ヶあり、その形状は図示表の如くである。その内、記号1 2 3 4 7 10 12の六孔は主柱と推定すると大体等間隔であり、その各孔の規模からしても妥当性が多い。尚出入口は底面の勾配からしても、小柱の存在からして特に、その部分の構造が複雑であつたろうと想像される点より、南面即ち柱孔3と7の間にあるまいか？

▼長野との関係

長野原町大字大津には、この遺蹟の他に同上文化圏に属する竪穴式住居跡は従来出土の例にみても群集して存在する可能性がある。

又土器により編年は四通りに分類され、厳密にいえば四文化期が重複している訳だが出土状態からいつて、一応混然として別に層位的相違は無いものの如く、従つて出土量の比較的多い加曾利E2式の文化圏にぞくする住居跡と認めて支障ないものと思う。

尚同町横壁ではかつて、厥黒曜石破片が三、四ヶ出土しているが、それによる完形品はなかつた。

▼遺物　土器

完形しているものは唯一ヶで高さ十六糎、口径十二糎の甕で、平底径七糎、頸と胴との境界部径八糎、器厚五糎、黒褐色を呈し、口頸は、無文、胴と頸との接合する部分に、二条の隆線が取巻き、肩部から以下は荒目の右撚左撚縄文が一面に付されている。

小形甕でその特徴を把握出来難いが、十ヶ所の土器片から推定して加曾利E2式類似と思考される。

▼長野原町大字大津勘場木石器時代住居跡

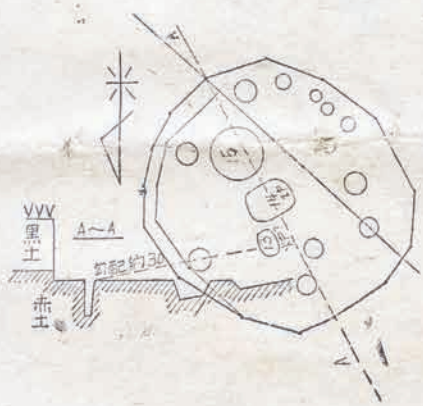
▼住居跡から安山岩製石棒断片長さ三〇糎、長径十一糎のものが出土している。

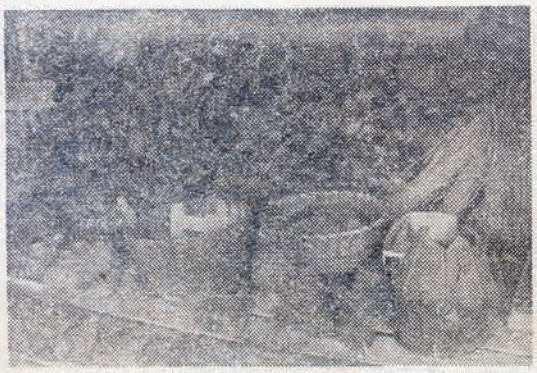
其の他は所謂短冊形に類する長さ一〇糎、巾三～四糎程度の打斧が数個出土しているが、右質は主として砂岩で又安山岩製のものと見受けられた。

今注目される点は隣接長野県文化との交流として最も重要な場所であり、この附近から県界方面は一層研究されるべきである。

▼遺物　石器

今回むしろ堀之内式に属するものと考えられ、いずれにせよ石器時代中期末から、後期初頭にかけて吾妻川沿岸長野原町を中心として相当集落が営まれた事は推測される。





寫眞説明

(上)　住居跡全景

(中)　断面図と平面図

(下)　発掘された土器

第 15 図　「郷土史跡めぐり（一）勘場木石器時代住居跡」『長野原分校新聞』創刊号

註

1．長野原町教育委員会　1990『長野原町の遺跡－町内遺跡詳細分布調査－』長野原町埋蔵文化財調査報告第１集

2．主に下位・中位段丘で発見された天明泥流に埋もれた遺跡を追加・範囲拡張した他、遺跡名の変更を実施した。その改訂版の詳細　については「マッピングぐんま　遺跡・文化財」（http://www2.wagmap.jp/pref-gunma/top/select.asp&npr=dtp=86/pl=3）で参照願いたい。本書では第１表および本章にできるだけ最新情報を記載した。

3．報告書では遺構外遺物が掲載漏れしており、今後再報告したいと考えている。
文献は１・２・５・48・49・51・54・58・63・73

4．（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2004『新田西沢遺跡 新田平林遺跡』

5．文献は文献２・52・55・59・69・89・189・206・234。

6．平成26年度から継続的な学術調査を計画して実施された。現在の地表では６箇所の岩陰が確認されており、西端の１号岩陰の岩陰部およびテラス部にトレンチを設定して掘り下げを行った。保存状態が極めて良い資料が多数出土し、考古学のみならず自然科学など他分野とも連携し多角的に分析調査が行われており、調査報告に期待したい。今後も継続して調査が行われる。
國學院大學文学部考古学研究室　2020『群馬県吾妻郡長野原町居家以岩陰遺跡Ⅱ　第２次・第３次発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告　第56集・その他文献は、179～184

7．旧横壁勝沼遺跡。『県遺跡地図』№3318旧勝沼遺跡（東平遺跡）。文献は１・２・89・94・113・185・186・197。

8．文献は2・10・89・128・135・191・192・195・196・217・219・222。

9．旧立馬遺跡。文献は1・2・81・89・92・103・122・192・193・196。

10．文献は89・92・134・198・224。

11．文献は2・20・27・32・89・94・106・113・124・173・189・195・196・201・202・235。

12．文献は2・89・92・106・124・195。

13．文献は2・81・89・94・113・189・191。

14．文献は2・22・89・127・187・193・195・196。

15．旧上野Ⅲ遺跡。文献は1・2・48・72・89・93～95・97・99・101～103・105～107・114・116・118・121・125・130・131・137～140・143・147・150・187～97・222・235。

16．文献は2・18・26・28・31・65・72・89・113・152・188・201。

17．旧中原Ⅰ遺跡。文献は１・2・12・14・18～22・29・31・39・43・45・93・65・101・149・176・193～195・199・200・207・224・234・235。

18．文献は71・72・83・84・89・90・94・98・113・117・172・188・194・195・20・207・221・233。

19．文献は2・12・18・20・28・31・89・101・127・145・193・194・200・202・203。

20．文献は100・119・193・222。

21．文献は89・94・113・171・185・188・191・206・207・234。

22．旧中原Ⅱ遺跡。林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡はひと続きの集落と考えられ、町教委でもこれまで小規模ながら林中原Ⅰ遺跡で18次、林中原Ⅱ遺跡で12次にわたる調査を実施している。林中原Ⅰ遺跡は中期後半の住居跡も数軒検出されているが、後期初頭～前葉が主体のようである。事業団調査では林中原Ⅱ遺跡の国道部分で中期後半～後期初頭を主体とした住居跡が122軒検出されており、２遺跡間での集落変遷が考えられる。
文献は２・14・16・17・18・22・23・29・31・36・45・48・03・153・166・194～200・206・226・242。

23．文献は2・88・89・94・132・155・161・197・198・205・218・233。

24. 文献は40。

25. 文献は35・47。

26. 文献は２・164・199・204～207・225・233～235・239・246・247・254。

27. 文献は101・71・72・89・95～99・113・142・144・157・159・186～189・197～199・203～207225・233～238・243・245・247・248・250・254・256。

28. 文献は26・29・44・72・89・113・154・162・178・185・186・190・197～206・223・227・234・235。

29. 文献は19・55・58・114・115・156・177・188～191・193・194・204・205213・233・241・257。

30. 古屋敷遺跡は厳密にいえば浅間高原地帯であるが、ここに列記しておく。文献は１・２・20。

31. 文献は 18・32・72・89・96・115・170・193・204・206・207・234。

32. 中沢道彦　1998「「氷１式」の細分と構造に関する試論」『長野県小諸市氷遺跡発掘調査資料図譜』第三冊　氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会

33. 文献は２・72・84・89・90・97・99・113・114・123・167・191・192・194・195・206・207・234。

34. 文献は２・65・72・94・113・186・188・189。

35. 文献は２。

36. 文献は94・113・187・189・205・206・233・234。

37.『県遺跡地図』№3127旧宮原遺跡（神社前遺跡）。
文献は１・２・14～16・18～20・24・28・34・36・45・152・176。

38. 文献は２・12・18・20・28・31・89・101・127・145・193・194・200・202・203。

39. 文献は２・17・18・28・32・141・199。

40. 文献は２・145・189・200。

41. 旧中棚遺跡。文献は２・18・26・31・34・109・168・206・207。

42. 文献は２・18・31・152・156・202・204。

43. 文献は36・39。

44. 文献は２・19・36・40・207。

45. 文献は２・36・89・40・207。

46. 文献は2・36・40・207。

47. 土塁や水場が遺存している。文献は１・２・48・49・51・54・63・73。

48. 文献は2・191。

49. 林中原Ⅰ遺跡の範囲内で発見された。文献は31・149。

50. 旧大乗院堂跡。文献は２・120・191。

51. 嬬恋村教育委員会　1981『鎌原遺跡発掘調査概報　浅間山噴火による埋没村落の研究』
嬬恋村教育委員会　1994『埋没村落　鎌原遺跡発掘調査概報（よみがえる延命寺）』
その他文献は57・58・64。

52. 文献は32・37・46。

53.『県遺跡地図』№3126旧下原（下田）遺跡。
文献は２・72・75・89・94・113・158・185・186・188・203・205～208・233～235。

54. 文献は２・58・64・67・68・71・72・84・89・90・114・115・176・190～92・194・205・206・233～235。

55. 文献は２・160・199・203～207・225・233～235・238・244・245・247・254。

56. 文献は17・32・94・145・191・200・202。

参考文献（第１表の文献番号に対応）

番号
１．　長野原町　1976 『長野原町誌』上巻
２．　長野原町教育委員会　1990 『長野原町の遺跡―町内遺跡詳細分布調査―』長野原町埋蔵文化財調査報告第１集
３．　長野原町教育委員会　1990 『櫛Ⅱ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第２集
４．　長野原町教育委員会　1992 『長畝Ⅱ遺跡・坪井遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第３集
５．　長野原町教育委員会　1995 『柳沢城跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第４集
６．　長野原町教育委員会　1996 『向原遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第５集
７．　長野原町教育委員会　1998 『滝原Ⅲ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第６集
８．　長野原町教育委員会　2000 『坪井遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第７集
９．　長野原町教育委員会　2001 『暮坪遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第８集
10.　長野原町教育委員会　2002 『町内遺跡Ⅰ』長野原町埋蔵文化財調査報告第９集
11.　長野原町教育委員会　2003 『町内遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 10 集
12.　長野原町教育委員会　2003 『町内遺跡Ⅲ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 11 集
13.　長野原町教育委員会　2005 『小林家屋敷跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第 12 集
14.　長野原町教育委員会　2004 『町内遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 13 集
15.　長野原町教育委員会　2004 『林宮原遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 14 集
16.　長野原町教育委員会　2005 『町内遺跡Ⅴ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 15 集
17.　長野原町教育委員会　2006 『町内遺跡Ⅵ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 16 集
18.　長野原町教育委員会　2008 『町内遺跡Ⅶ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 17 集
19.　長野原町教育委員会　2009 『町内遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 18 集
20.　長野原町教育委員会　2010 『町内遺跡Ⅸ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 19 集
21.　長野原町教育委員会　2010 『林中原Ⅰ遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 20 集
22.　長野原町教育委員会　2011 『町内遺跡Ⅹ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 21 集
23.　長野原町教育委員会　2012 『町内遺跡ⅩⅠ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 22 集
24.　長野原町教育委員会　2012 『林宮原遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 23 集
25.　㈱東京電力群馬支店・長野原町教育委員会　2013 『山岸Ⅱ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第 24 集
26.　長野原町教育委員会　2013 『町内遺跡ⅩⅡ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 25 集
27.　長野原町教育委員会　2013 『三平Ⅰ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第 26 集
28.　長野原町教育委員会　2013 『町内遺跡ⅩⅢ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 27 集
29.　長野原町教育委員会　2014 『町内遺跡ⅩⅣ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 28 集
30.　㈱東京電力群馬支店・長野原町教育委員会　2014 『滝原Ⅳ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第 29 集
31.　長野原町教育委員会　2015 『林地区遺跡群』長野原町埋蔵文化財調査報告第 30 集
32.　長野原町教育委員会　2016 『町内遺跡ⅩⅤ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 31 集
33.　長野原町教育委員会　2017 『町内遺跡ⅩⅥ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 32 集
34.　長野原町教育委員会　2018 『町内遺跡ⅩⅦ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 33 集
35.　長野原町教育委員会　2018 『観奈遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第 34 集
36.　長野原町教育委員会　2019 『町内遺跡ⅩⅧ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 35 集
37.　長野原町教育委員会　2019 『長野原地区遺跡群』長野原町埋蔵文化財調査報告第 36 集
38.　長野原町教育委員会　2019 『長野原地区遺跡群（２）』長野原町埋蔵文化財調査報告第 37 集
39.　長野原町教育委員会　2020 『町内遺跡ⅩⅨ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 38 集
40.　長野原町教育委員会　2020 『横壁地区遺跡群』長野原町埋蔵文化財調査報告第 39 集
41.　汐留発電合同会社・長野原町教育委員会　2020 『赤羽根遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第 40 集
42　長野原町教育委員会　2020 『山根Ⅲ遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 41 集
43　長野原町教育委員会　2020 『林中原Ⅰ遺跡ⅩⅧ』長野原町埋蔵文化財調査報告第 42 集
44　長野原町教育委員会　2020 『尾坂遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第 43 集
45　長野原町教育委員会　2020 『林地区遺跡群（２）』長野原町埋蔵文化財調査報告第 44 集
46　長野原町教育委員会　2020 『試掘確認調査集成』長野原町埋蔵文化財調査報告第 45 集
47　長野原町教育委員会　2021 『町内遺跡 20』長野原町埋蔵文化財調査報告第 46 集
48　小池富治郎編　1936 『吾妻郡誌』吾妻教育学会
49　山崎　一・山口武夫　1972 『吾妻郡城塁史』
50　塩野新一　1972 『群馬県吾妻郡長野原町（群馬県指定史跡）勘場木遺跡』
51　山崎　一　1978 『群馬県古城塁址の研究』下巻
52　巾　隆之　1979 『石畑遺跡略報』長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局
53　群馬県　1988 『群馬県史』資料編１
54　群馬県教育委員会　1988 『群馬県の中世城館跡』
55.　長野原町教育委員会　1989 『長野原町の文化財』
56.　長野原町　1993 『長野原町の自然』八ッ場ダムダム湖予定地及び関連地域文化財調査報告書
57.　群馬県立歴史博物館　1995　第 52 回企画展『天明の浅間焼け』
58.　上毛新聞社　1999 『群馬県遺跡大辞典』
59.　笠懸野岩宿文化資料館　2000　第 30 回企画展『利根川流域の縄文草創期』
60.　かみつけの里博物館　2000　第６回特別展『鍋について考える』
61.　群馬県教育委員会　2001 『群馬の史跡（原始古代編）』
62.　笠懸野岩宿文化資料館　2004　第 39 回企画展『底の尖った土器』
63.　群馬県立歴史博物館　2004　第 77 回企画展『新発見考古速報展　群馬発掘情報　石室の入り口を通り抜けると…』
64.　浅間縄文ミュージアム　2004 『浅間嶽大焼』
65.　群馬大学教育学部編　2004 『尾崎喜左雄博士　調査収集考古遺物・調査資料目録』雄山閣
66.　（財）群埋文編　2005 『群馬の遺跡２　縄文時代』
67.　（財）群埋文編　2005 『群馬の遺跡７　中世～近代』
68.　かみつけの里博物館　2007　第 16 回特別展『江戸時代、浅間山大噴火』
69.　原田昌幸　2007 『日本の美術№ 495　縄文土器　草創期　早期』至文堂
70.　小林達雄編　2008 『総覧縄文土器』
71.　関　俊明　2010 『浅間山大噴火の爪痕―天明三年浅間山災害遺跡―』新泉社
72.　（公財）群埋文編　2013 『自然災害と考古学』
73.　宮坂武男　2015 『信濃をめぐる境目の山城と館　上野編』戎光祥出版
74.　群馬県教育委員会　2017 『群馬県古墳総覧―本文・一覧表編―』
75.　関　俊明・諸田康成　1999 「天明三年浅間災害に関する地域史的研究」『研究紀要 16』（財）群埋文
76.　白石光男・山口逸弘　1999 「外輪原Ⅰ遺跡出土の縄文前期土器」『群馬考古学手帳９』群馬土器観会
77.　富田孝彦　2000 「外輪原Ⅰ遺跡出土の弥生土器」『群馬考古学手帳 10』群馬土器観会

78. 桜井秀雄　2000 「H 系統の土器について―仮称「郷土式土器」成立の可能性」『小諸市内 3 : 三子塚遺跡群、三田原遺跡群、岩下遺跡、石神遺跡群、郷土遺跡、東丸山遺跡、西丸山遺跡、深沢遺跡群　本文編』上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 19　長野県埋蔵文化財センター
79. 谷藤保彦・関根愼二・今井和久　2002 「群馬県内出土の縄文時代石製装身具集成」『研究紀要 20』（財）群埋文
80. 関根愼二　2003 「群馬県における加曽利 E 式土器の地域相」『第 16 回縄文セミナー　中期後半の再検討』縄文セミナーの会
81. 石田　真　2004 「群馬県北西部における古代の陥し穴の構築時期をめぐって―長野原町の事例を中心として―」『研究紀要 22』（財）群埋文
82. 関　俊明　2005 「天明三年浅間山噴火災害遺跡の調査と成果」『日本歴史』吉川弘文館
83. 関　俊明　2006 「天明泥流はどう流下したか」『ぐんま史料研究 24』群馬県立文書館
84. 中央防災会議　2006 『1783 年天明浅間山噴火報告書』内閣府
85. 藤巻幸男　2007 「縄文時代中期の住居内施設について―横壁中村遺跡覚書」『研究紀要 25』（財）群埋文
86. 谷藤保彦　2007 「加曽利 E 式の系統を引く土器群―北関東における後期初頭の様相―」『第 20 回縄文セミナー　中期終末から後期初頭の再検討』縄文セミナーの会
87. 関根愼二　2008 「浅間山を廻る縄文土器」『研究紀要 26』（財）群埋文
88. 山口逸弘　2009 「上ノ平遺跡 31 号住居跡出土土器の再検討」『研究紀要 27』（財）群埋文
89. 藤巻幸男　2009 「八ッ場ダム建設地域における調査遺跡一覧作成の試み―出土遺物総量把握の効用―」『研究紀要 27』（財）群埋文
90. 黒澤照弘・大西雅広　2009 「茨城県、栃木県、群馬県内の江戸後期における生産と流通」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通　関東・東北・北海道編』
91. 山口逸弘　2010 「「勝坂式」土器に関する再検討」『研究紀要 28』（財）群埋文
92. 橋本　淳　2010 「中部地方における縄紋早期沈線紋土器の編年―八ッ場ダム関連遺跡出土資料の位置付け―」『研究紀要 28』（財）群埋文
93. 鈴木徳雄　2012 「堀之内式土器研究の諸問題―堀之内式の概観と周辺諸型式」『第 25 回縄文セミナー　縄文後期土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会
94. 山口逸弘　2013 「吾妻川中流域における縄文時代中期後葉の土器様相―加曽利 E 式古段階を中心として―」『研究紀要 31』（公財）群埋文
95. 黒澤照弘　2012 「東宮遺跡―天明三年 8 月 5 日の様相―」『江戸遺跡研究会会報№ 133』江戸遺跡研究会
96. 黒澤照弘　2013 「天明三年浅間山噴火災害と東宮遺跡」『月間考古学ジャーナル（646）』ニュー・サイエンス社
97. 黒澤照弘　2013 「東宮遺跡における天明三年新暦八月五日の様相―調査成果から推測される天明泥流被害前の状況―」『研究紀要 31』（公財）群埋文
98. 伊藤美香・小原奈津子・黒澤照弘　2013 「東宮遺跡出土の繊維遺物について」『研究紀要 31』（公財）群埋文
99. 大塚昌彦　2014 「天明三年浅間泥流埋没遺跡の守随秤と高崎秤座」『群馬県立女子大学第 2 期群馬学センターリサーチフェロー研究報告集』群馬県立女子大学群馬学センター
100. 山口逸弘　2015 「吾妻川中流域における「郷土式」の一様相―報告書『長野原一本松遺跡（6）』を中心として」『研究紀要 33』（公財）群埋文
101. 小川卓也・宮田忠洋・向出博之　2015 「北関東地域における後期注口土器の様相」『第 28 回縄文セミナー　縄文後期土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会
102. 藤巻幸男・楢崎修一郎・能登健　2016 「群馬県長野原町横壁中村遺跡の中近世墓と同地区における両墓制の研究」『研究紀要 34』（公財）群埋文
103. 山口逸弘　2016 「鋸歯状口縁曲隆線文土器について―「横壁類型」の提唱―」『地域考古学』地域考古学研究会
104. 大塚昌彦　2016 「天明三年浅間泥流下出土の守随秤」『群馬文化 327』群馬県地域文化研究協議会
105. 藤巻幸男・能登健　2016 「両墓制の考古学的検討―群馬県八ッ場地域を例にして―」『群馬文化 327』群馬県地域文化研究協議会
106. 谷藤保彦・澁谷昌彦　2017 「群馬県内出土の石棒・石剣・石刀集成―縄文時代後期前葉以降―」『研究紀要 35』（公財）群埋文
107. 石坂　茂　2017 「「核家屋」集落の構造―群馬県横壁中村遺跡を中心とした分析―」『縄文時代 28』縄文時代文化研究会
108. 谷藤保彦・関根愼二・鈴木佑太郎　2018 「群馬県内の柄鏡形（敷石）住居集成」『研究紀要 36』（公財）群埋文
109. 鈴木徳雄　2018 「縄紋後期前半における土器型式の存立構造―関東信越地域の「型式と諸“類型”」―」『地域考古学 3 号』地域考古学研究会
110. 山口逸弘　2018 「八ッ場ダム地域の縄文時代遺跡」『ぐんま地域文化　第 51 号』（一財）群馬地域文化振興会
111. 大木紳一郎　2019 「群馬県北部吾妻川流域の後期弥生遺跡について」『研究紀要 37』（公財）群埋文
112. （財）群埋文・国交省　2002 『長野原一本松遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 1 集
113. （財）群埋文・国交省　2002 『八ッ場ダム発掘調査集成（1）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 2 集
114. （財）群埋文・国交省　2003 『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 3 集
115. （財）群埋文・国交省　2004 『久々戸遺跡（2）・中棚Ⅱ遺跡（2）・西ノ上遺跡・上郷 A 遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 4 集
116. （財）群埋文・国交省　2005 『横壁中村遺跡（2）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 5 集
117. （財）群埋文・国交省　2005 『川原湯勝沼遺跡（2）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 6 集
118. （財）群埋文・国交省　2006 『横壁中村遺跡（3）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 7 集
119. （財）群埋文・国交省　2006 『立馬Ⅱ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 8 集
120. （財）群埋文・国交省　2006 『上郷 B 遺跡・廣石 A 遺跡・二反沢遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 9 集
121. （財）群埋文・国交省　2006 『横壁中村遺跡（4）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 10 集
122. （財）群埋文・国交省　2006 『立馬Ⅰ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 11 集
123. （財）群埋文・国交省　2007 『下原遺跡Ⅱ』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 12 集
124. （財）群埋文・国交省　2007 『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 13 集
125. （財）群埋文・国交省　2007 『横壁中村遺跡（5）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 14 集
126. （財）群埋文・国交省　2007 『長野原一本松遺跡（2）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 15 集
127. （財）群埋文・国交省　2008 『幸神遺跡・上原Ⅳ遺跡・山根Ⅲ遺跡（2）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 17 集
128. （財）群埋文・国交省　2008 『楡木Ⅱ遺跡（1）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 18 集
129. （財）群埋文・国交省　2008 『長野原一本松遺跡（3）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 19 集
130. （財）群埋文・国交省　2008 『横壁中村遺跡（6）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 20 集
131. （財）群埋文・国交省　2008 『横壁中村遺跡（7）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 22 集
132. （財）群埋文・国交省　2008 『上ノ平Ⅰ遺跡（1）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 23 集
133. （財）群埋文・国交省　2008 『長野原一本松遺跡（4）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 24 集
134. （財）群埋文・国交省　2009 『立馬Ⅲ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 26 集
135. （財）群埋文・国交省　2009 『楡木Ⅱ遺跡（2）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 27 集
136. （財）群埋文・国交省　2009 『長野原一本松遺跡（5）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 28 集
137. （財）群埋文・国交省　2009 『横壁中村遺跡（8）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 29 集
138. （財）群埋文・国交省　2009 『横壁中村遺跡（9）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 30 集
139. （財）群埋文・国交省　2010 『横壁中村遺跡（10）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 33 集
140. （財）群埋文・国交省　2010 『横壁中村遺跡（11）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 34 集
141. （財）群埋文・国交省　2010 『東原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 35 集
142. （財）群埋文・国交省　2011 『東宮遺跡（1）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 36 集
143. （財）群埋文・国交省　2012 『横壁中村遺跡（12）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 37 集
144. （財）群埋文・国交省　2012 『東宮遺跡（2）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 38 集

145. （財）群埋文・国交省　2012 『楡木Ⅰ遺跡 / 上原Ⅳ遺跡（２）/ 西久保Ⅳ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第 39 集
146. （財）群埋文・国交省　2013 『長野原一本松遺跡（６）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 40 集
147. （公財）群埋文・国交省　2013 『横壁中村遺跡（13）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 41 集
148. （公財）群埋文・国交省　2014 『長野原一本松遺跡（７）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 42 集
149. （公財）群埋文・国交省　2014 『林中原Ⅰ遺跡・長野原城』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 43 集
150. （公財）群埋文・国交省　2014 『横壁中村遺跡（14）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 44 集
151. （公財）群埋文・国交省　2015 『町遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 45 集
152. （公財）群埋文・国交省　2015 『上原Ⅰ遺跡・上原Ⅲ遺跡・林宮原遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第 46 集
153. （公財）群埋文・国交省　2016 『林中原Ⅱ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 47 集
154. （公財）群埋文・国交省　2016 『尾坂遺跡（２）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 48 集
155. （公財）群埋文・国交省　2017 『上ノ平Ⅰ遺跡（２）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 49 集
156. （公財）群埋文・国交省　2017 『上原Ⅲ遺跡（２）・久々戸遺跡（３）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第 50 集
157. （公財）群埋文・国交省　2017 『東宮遺跡（３）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 51 集
158. （公財）群埋文・国交省　2017 『下田遺跡（２）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 52 集
159. （公財）群埋文・国交省　2018 『東宮遺跡（４）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 53 集
160. （公財）群埋文・国交省　2018 『西宮遺跡（１）・西宮岩陰』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 54 集
161. （公財）群埋文・国交省　2018 『上ノ平Ⅰ遺跡（３）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 55 集
162. （公財）群埋文・国交省　2018 『尾坂遺跡（３）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 56 集
163. （公財）群埋文・国交省　2018 『川原湯中原Ⅲ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 57 集
164. （公財）群埋文・国交省　2018 『石川原遺跡（１）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 58 集
165. （公財）群埋文・国交省　2018 『下湯原遺跡（１）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 59 集
166. （公財）群埋文・国交省　2018 『林中原Ⅱ遺跡（２）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 60 集
167. （公財）群埋文・国交省　2019 『下原遺跡Ⅲ』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 61 集
168. （公財）群埋文・国交省　2019 『中棚Ⅰ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 62 集
169. （公財）群埋文・国交省　2019 『林中原Ⅱ遺跡（３）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 63 集
170. （公財）群埋文・国交省　2019 『西ノ上遺跡（２）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 64 集
171. （公財）群埋文・国交省　2019 『西久保Ⅰ遺跡（２）・西久保Ⅴ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第 65 集
172. （公財）群埋文・国交省　2019 『川原湯勝沼遺跡（３）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 66 集
173. （公財）群埋文・国交省　2020 『三平Ⅰ遺跡（２）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 67 集
174. （公財）群埋文・国交省　2020 『下田遺跡（３）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 68 集
175. （公財）群埋文・国交省　2020 『下湯原遺跡（２）』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 69 集
176. （公財）群埋文・国交省　2020 『林宮原遺跡（２）・林中原Ⅰ遺跡（２）・中棚Ⅱ遺跡』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第 70 集
177. （財）群埋文　1998 『長野原久々戸遺跡　県道長野原草津口停車場線道路（橋梁）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）群埋文調査報告書　第 240 集
178. 群馬県・（公財）群埋文　2012 『尾坂遺跡　社会資本整備総合交付金事業（活力創出基盤整備）長野原草津口駅舎整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（公財）群埋文調査報告書　第 546 集
179. 國學院大學文学部考古学研究室　2017 『群馬県吾妻郡長野原町居家以岩陰遺跡　2014 年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告　第 53 集
180. 國學院大學文学部考古学研究室　2015-2019　現地説明会資料『居家以岩陰遺跡発掘調査（第２次～第６次調査）』
181. 谷口康浩　2019 「群馬県居家以岩陰遺跡における縄文早期人骨の発掘調査」『日本考古学協会第 85 回総会　研究発表要旨』
182. 近藤　修　2019 「居家以岩陰遺跡出土の縄文早期人骨（予報）」『日本考古学協会第 85 回総会　研究発表要旨』
183. 米田　穣　2019 「居家以岩陰遺跡の縄文早期人骨における同位体分析」『日本考古学協会第 85 回総会　研究発表要旨』
184. 植田信太郎・水野文月　2019 「ミトコンドリア DNA からみた居家以岩陰遺跡出土人骨の遺伝的系統」『日本考古学協会第 85 回総会 研究発表要旨』
185. （財）群埋文　1995 『年報 14』
186. （財）群埋文　1996 『年報 15』
187. （財）群埋文　1997 『年報 16』
188. （財）群埋文　1998 『年報 17』
189. （財）群埋文　1999 『年報 18』
190. （財）群埋文　2000 『年報 19』
191. （財）群埋文　2001 『年報 20』
192. （財）群埋文　2002 『年報 21』
193. （財）群埋文　2003 『年報 22』
194. （財）群埋文　2004 『年報 23』
195. （財）群埋文　2005 『年報 24』
196. （財）群埋文　2006 『年報 25』
197. （財）群埋文　2007 『年報 26』
198. （財）群埋文　2008 『年報 27』
199. （財）群埋文　2009 『年報 28』
200. （財）群埋文　2010 『年報 29』
201. （公財）群埋文　2013 『年報 32』
202. （公財）群埋文　2014 『年報 33』
203. （公財）群埋文　2015 『年報 34』
204. （公財）群埋文　2016 『年報 35』
205. （公財）群埋文　2017 『年報 36』
206. （公財）群埋文　2018 『年報 37』
207. （公財）群埋文　2019 『年報 38』
208. （公財）群埋文　2020 『年報 39』
209. （財）群埋文　1995 『遺跡は今　第１号』
210. （財）群埋文　1996 『遺跡は今　第２号』
211. （財）群埋文　1996 『遺跡は今　第３号』
212. （財）群埋文　1997 『遺跡は今　第４号』
213. （財）群埋文　1997 『遺跡は今　第５号』
214. （財）群埋文　1998 『遺跡は今　第６号』
215. （財）群埋文　1999 『遺跡は今　第７号』
216. （財）群埋文　2000 『遺跡は今　第８号』
217. （財）群埋文　2000 『遺跡は今　第９号』

218. （財）群埋文　2000 『遺跡は今　第 10 号』
219. （財）群埋文　2002 『遺跡は今　第 11 号』
220. （財）群埋文　2003 『遺跡は今　第 12 号』
221. （財）群埋文　2004 『遺跡は今　第 13 号』
222. （財）群埋文　2006 『遺跡は今　第 14 号』
223. （財）群埋文　2007 『遺跡は今　第 15 号』
224. （財）群埋文　2008 『遺跡は今　第 16 号』
225. （財）群埋文　2009 『遺跡は今　第 17 号』
226. （財）群埋文　2010 『遺跡は今　第 18 号』
227. （財）群埋文　2011 『遺跡は今　第 19 号』
228. （財）群埋文　2012 『遺跡は今　第 20 号』
229. （財）群埋文　2013 『遺跡は今　第 21 号』
230. （財）群埋文　2014 『遺跡は今　第 22 号』
231. （財）群埋文　2015 『遺跡は今　第 23 号』
232. （財）群埋文　2016 『遺跡は今　第 24 号』
233. （財）群埋文　2017 『遺跡は今　第 25 号』
234. （財）群埋文　2018 『遺跡は今　第 26 号』
235. （財）群埋文　2019 『遺跡は今　第 27 号』
236. 篠原正洋　2008 「天明泥流に呑まれた屋敷の謎―長野原町東宮遺跡―」『埋文群馬 47』（公財）群埋文
237. 飯田陽一　2012 「東宮遺跡―八ッ場で発掘された江戸時代―」『埋文群馬 56』（公財）群埋文
238. 岩崎泰一・中沢　悟　2015 「東宮遺跡・西宮遺跡―姿を現した江戸時代の川原畑村―」『埋文群馬 59』（公財）群埋文
239. 齋藤利昭・麻生敏隆　2015 「石川原遺跡―見えてきた上湯原の歴史―『埋文群馬 60』（公財）群埋文
240. 中沢　悟　2016 「下湯原遺跡―天明泥流下から発見された江戸時代の川原湯村―」『埋文群馬 61』（公財）群埋文
241. 関　俊明・小林茂夫　2016 「久々戸遺跡―天明泥流下の畑跡下に眠っていた縄文時代の敷石住居跡―」『埋文群馬 61』（公財）群埋文
242. 山口逸弘　2016 「林中原Ⅱ遺跡―縄文時代中期～後期の環状集落―」『埋文群馬 61』（公財）群埋文
243. 石坂　聡・飛田野正佳　2017 「東宮遺跡―姿を現した江戸時代以前の東宮集落―」『埋文群馬 62』（公財）群埋文
244. 宮下　寛・石田　真・関　明愛・飯田陽一　2018 「西宮遺跡―江戸時代の建物跡　建築部材の発見と機織り具―」『埋文群馬 63』（公財）群埋文
245. （公財）群埋文　2015　平成 27 年度調査遺跡発表会『東宮遺跡・西宮遺跡の調査』
246. （公財）群埋文　2016　平成 28 年度調査遺跡発表会『長野原町石川原遺跡の調査』
247. （公財）群埋文・長野原町教育委員会　2018　平成 30 年度調査遺跡発表会『発掘された八ッ場の軌跡』
248. （公財）群埋文　2012　平成 24 年度最新情報展　第 1 期『東宮遺跡～八ッ場で発掘された江戸時代』
249. （公財）群埋文　2016　平成 28 年度最新情報展　第 1 期『吾妻地域の縄文文化　古代人の心』
250. （公財）群埋文　2017　平成 29 年度最新情報展　第 1 期『よみがえった江戸時代の村―天明三年浅間泥流下の発掘調査から』
251. （公財）群埋文　2018　平成 29 年度最新情報展　第 3 期『一万年つづく粉食文化―縄文クッキーからおっきりこみまで―』
252. （公財）群埋文　2019　平成 30 年度最新情報展　第 3 期『古代の装身具』
253. （公財）群埋文　2019　令和元年度最新情報展　第 1 期『八ッ場の縄文時代』
254. （公財）群埋文　2019　令和元年度最新情報展　第 2 期『江戸時代の天明泥流に被災した村』
255. 松島榮治　2010　埋蔵文化財講座『天明三年の地域社会―鎌原の発掘から八ッ場ダムまで―』
256. 黒澤照弘　2014　埋蔵文化財講座『天明の浅間山噴火―その時、東宮遺跡の人々はどうしたか―』
257. 山口逸弘　2016　埋蔵文化財講座『久々戸遺跡検出の敷石住居』
258. 飯森康広　2016　埋蔵文化財講座『発掘された群馬の城』
259. 関　俊明　2016　埋蔵文化財講座『江戸民家―天明三年の浅間焼け前日の風景―』

第２章　保存修理事業

第１節　概　要

これまで実施した保存修理事業一覧を第３表に示す。前述したように発見からまもなくして保存の方針が決められており、農閑期を利用して地元の労働奉仕と寄付も加わり、町単費で初代保存施設が昭和 29（1954）年に設置されたことが明らかになった。茅葺屋根・板塀の八角形の覆屋で、長い間、町民に親しまれてきたが、老朽化と周辺の保存施設を参考にして年号が変わった平成２年度にコンクリート基礎・トタン葺の屋根へと生まれ変わった。平成 17 年度には内部環境の向上を目的に換気設備の増設をし、平成 30 年度～令和２年度には遺構面そのものの保存処理をするに至っている。

第３表　保存修理事業一覧

	平成２年度	平成 17 年度	平成 30 年度	平成 31（令和元）年度	令和２年度	総　　計
町負担金（補助）	1,670	250	2,819	926	540	6,205
県費補助金	1,670	250	2,819	926	540	6,205
補助事業費計	3,340	500	5,638	1852	1,080	12,410
町負担金（単費）	0	13	2	10	4	29
合　　計	3,340	513	5,640	1,862	1,084	12,439
概　　要	上屋設置工事	上屋改修工事	再調査、測量、遺構保存処理	再整理・上屋改修工事（屋根・下地・壁の修繕、低反射ガラス交換）	保存修理報告書作成　（数字は予定）	単位：千円

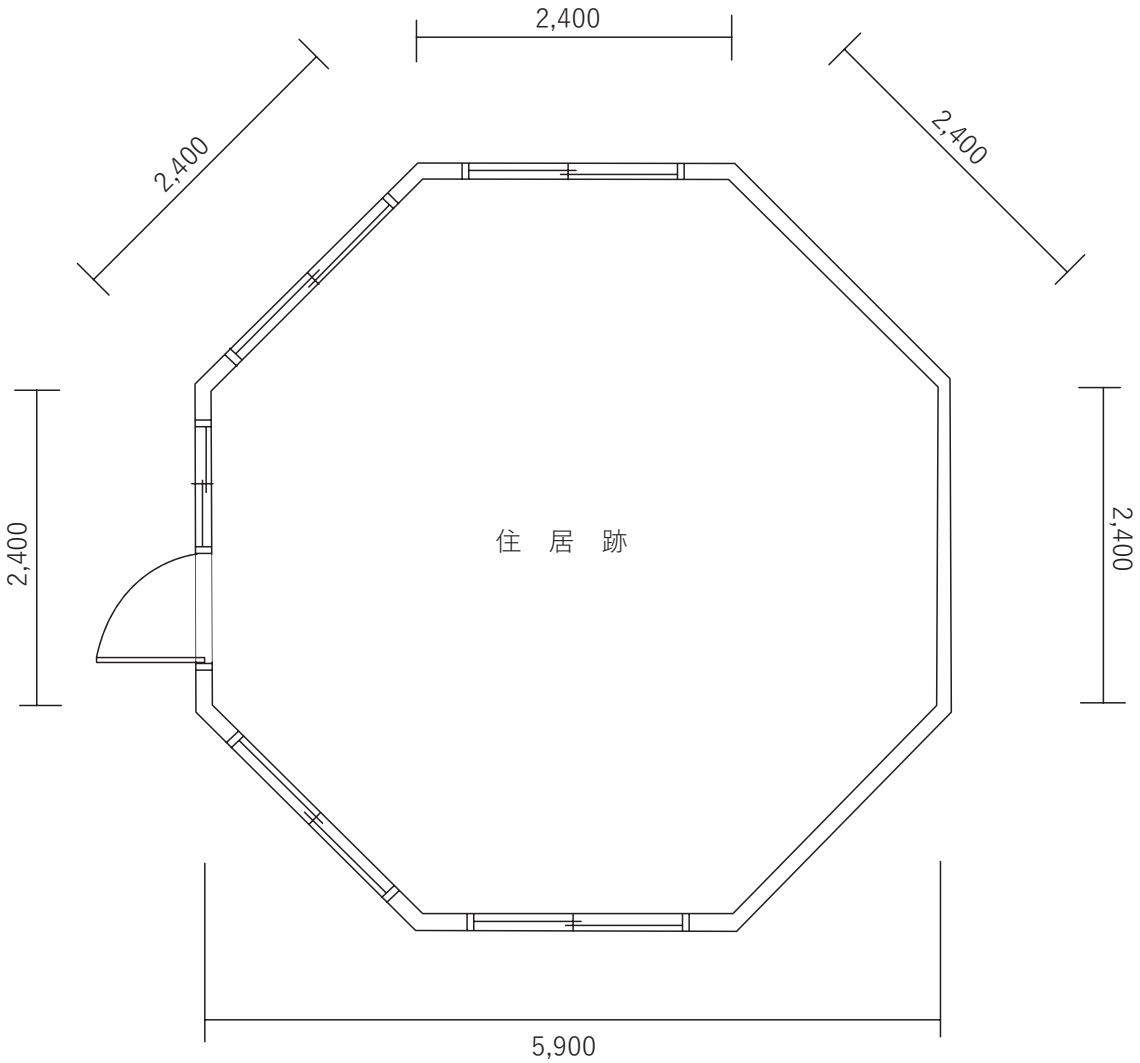
第２節　平成２年度事業（保存修理事業①）

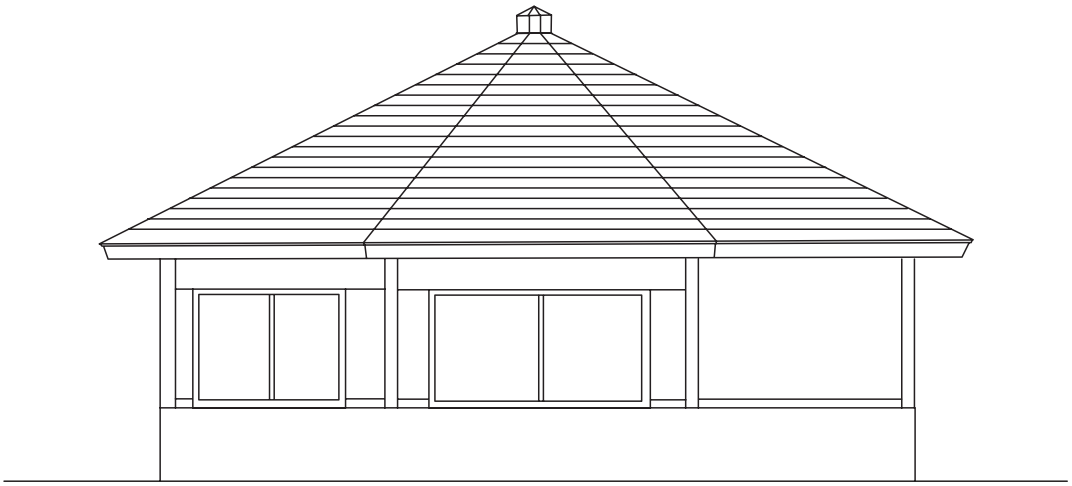
１　経緯と目的

昭和29（1954）年に設置した上屋は古くなり、茅葺の屋根は一部破損がひどくなって美観を損ねる上、雨漏りもあり、泥水が遺構の中に流入してきている。また標柱がなく、説明版も古くなっており、一括して整備を実施して遺跡の保存につなげていくことを目的とする。既設の上屋を取り壊して基礎工事・上屋の新築・外構工事・標柱等の設置を実施する。

２　実施期間

着手　平成２（1990）年10月26日　　完了　平成３（1991）年１月25日



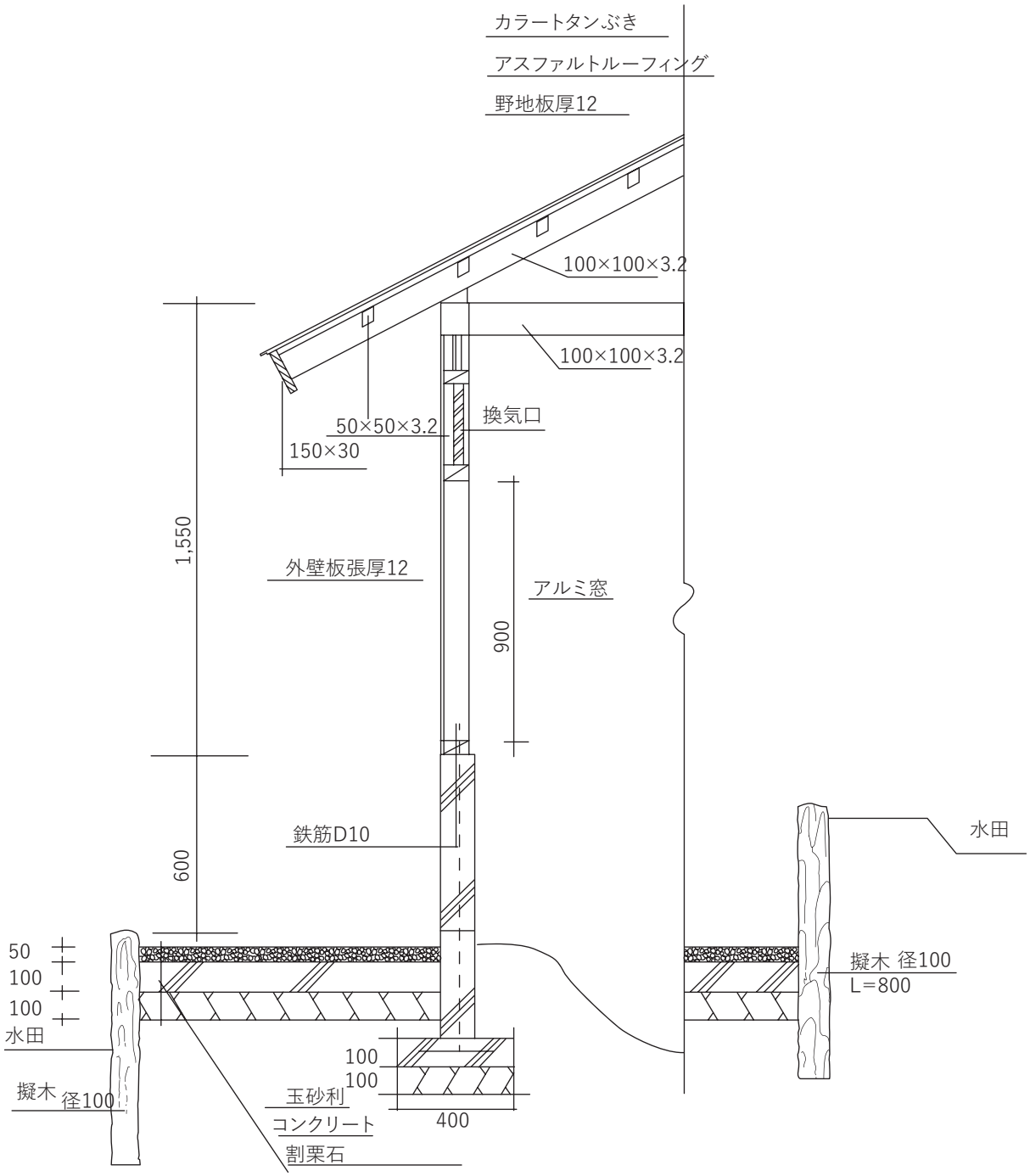


第 16 図　［平成 2 年度事業］上屋平面図・立面図

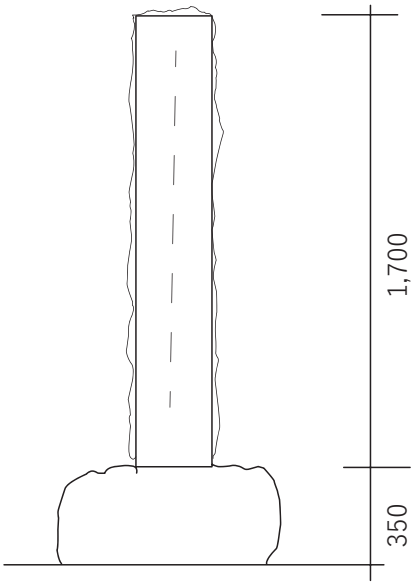
3　事業内容

（1）上屋改修工事（第16～18図／写真1－1～1-30）

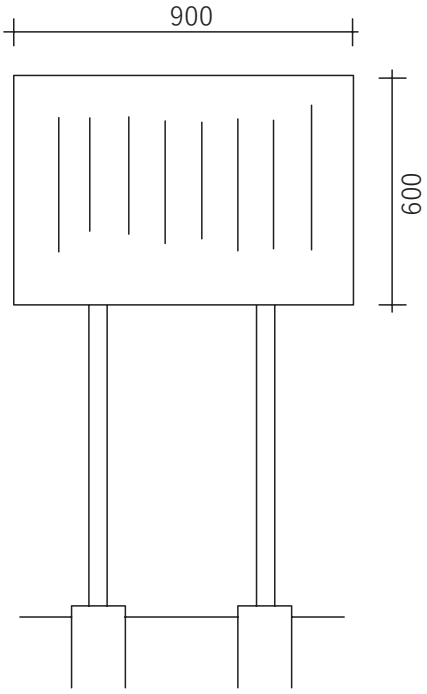
茅葺板塀の上屋を解体し、カラートタン葺鉄骨造の上屋を新築した。その際、建物規模については、古い上屋を踏襲し、工法は耐久性を考慮するとともに、内部の採光を考え、側壁は鉄筋コンクリート布基礎と軽　量鉄骨造、窓にはアルミサッシを取り入れ、屋根には覆屋根のカラートタン葺きとした。また見学者用に石の標柱及び説明板を設置し、建物の周りには砕石基礎の上に玉砂利を敷き、水田との境界部には擬木丸太を使用した。



第17図　［平成2年度事業］上屋断面図



石造標柱　白みかげ台自然石
200×200×1,800



案内板(説明)
形式　アルミ製文字焼付

第 18 図　［平成２年度事業］標柱・解説板立面図

写真１−１．着工前状況

写真１−２．土工　人力床掘

写真１−３．基礎工　ベースコンクリート　鉄筋

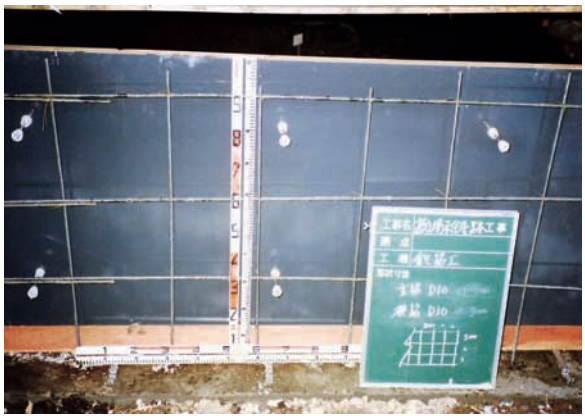


写真１−４．基礎工　鉄筋

写真 1－5．基礎工　内側型枠

写真 1－6．基礎工　型枠組込

写真 1－7．解体工　覆屋根解体片付

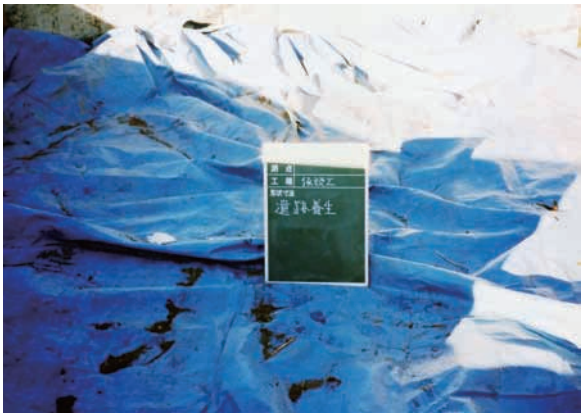


写真 1－8．仮設工　遺構養生

写真 1－9．基礎工　基礎出来形①

写真 1－10．基礎工　基礎出来形②

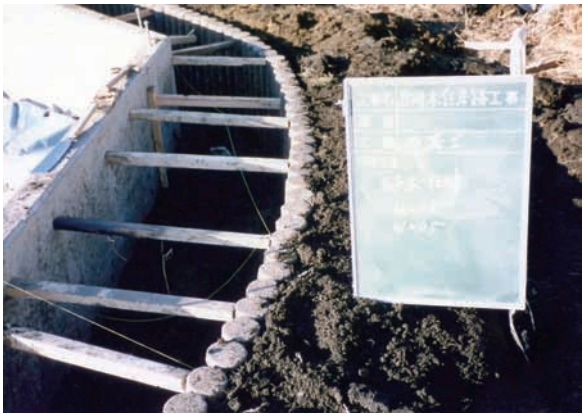


写真 1－11．外構工　擬木柵取付

写真 1－12．外構工　砕石厚出来形

写真１－13．外構工　コンクリート打設出来形

写真１－14．鉄骨工　建方①

写真１－15．鉄骨工　建方②

写真１－16．屋根工　フェルト張

写真１－17．屋根工　長尺平葺き

写真１－18．木工事　屋根下地

写真１－19．木工事　羽目枠取付

写真１－20．塗装工　内部天井出来形

写真１－21．塗装工　内部塗装出来形

写真１－22．塗装工　外部塗装出来形

写真１－23．外構工　玉砂利敷出来形①

写真１－24．外構工　玉砂利敷出来形②

写真１－25．完成　標柱

写真１－26．完成　説明板

写真１−27．完成　遺構復旧①

写真１−28．完成　遺跡復旧②

写真１−29．完成　全景①

写真１−30．完成　全景②

本事業実施により、コンクリート基礎・鉄骨造・トタン屋根の堅固な上屋となった。遺構内へ泥水が入り込むこともなくなり、見学者が外から見学し易くなったが、内部の湿気は依然高いままであった。

第３節　平成17年度事業（保存修理事業②）

1　経緯と目的

県文化財パトロールで「異常あり」の指摘を受けたことから、平成17（2005）年８月30日に県文化課と町教委の２者で現地視察と今後の措置に関して協議した。本住居跡に関しては、数年来、「保存方法について改善する必要がある」と県のアンケート等で回答してきたが、今回のパトロールで上屋内部のベニヤ材が剥落しそうになってきているのが見つかり、県側も現況把握に来ることになった。昭和30（1955）年の県指定、以来茅葺屋根と板塀の上屋から平成３（1991）年１月に基礎工事、上屋の新築、外構工事、標柱等の設置を実施して現在に至っている。視察での所見は以下の通りである。

①指定が古く、発見当時に保存処置等の技術がなかった。

②周辺環境が水田であり、常に湿度が高い状態である。夏は結露、冬は霜柱。

③竪穴式住居という性質上、関東ローム層の劣化が激しい。以前から清掃・草むしりを行ってきた結果、発見当時の状態（形態）とはややかけ離れている。特に柱穴。

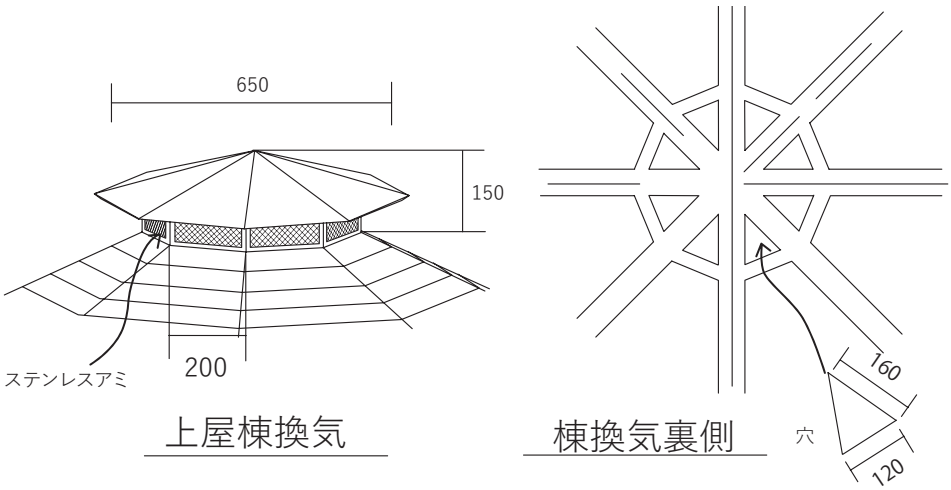
④上記の現況を踏まえた上で、まず第一に高湿度を解消する手だてが必要である。換気枠（手動）の設置と剥落しそうなベニヤ材の補修が急務。

⑤第二に本住居跡を後世につたえるべく、現状維持するにはどうするかという問題。展示方法や保存方法を総合的に捉えて、処置を検討する必要がある。

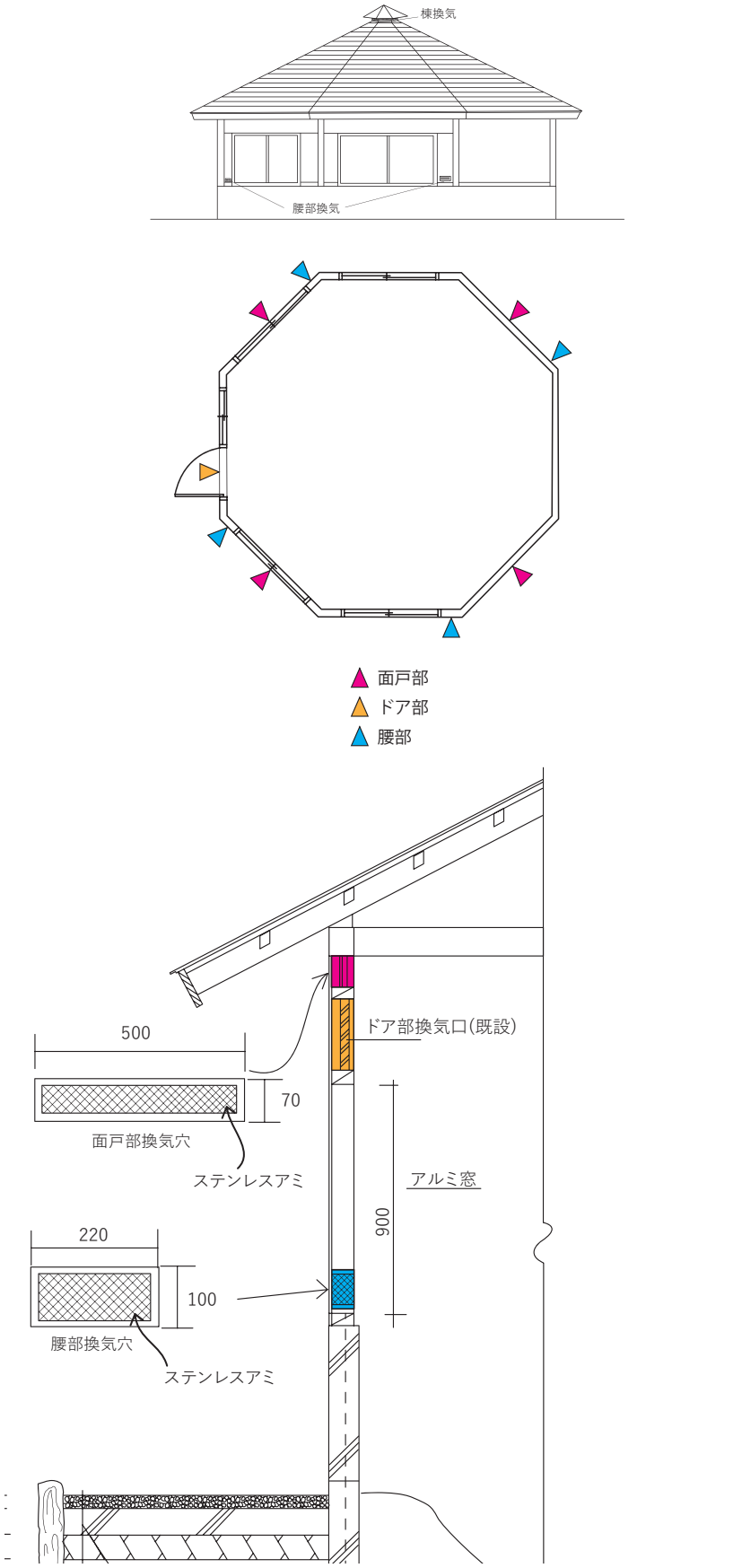
現状の遺構面保護と劣化の進行を防ぐことを目的として、上記④に関しては、町側で費用などを調べて、当該年度で県補助を使って処置することになった。

2　実施期間

着手　平成18（2006）年３月６日　　完了　平成18（2006）年３月20日



第19図　［平成17年度事業］軒換気概要図



第 20 図　［平成 17 年度事業］上屋立面図・平断面図（換気穴設置箇所）

3　事業内容

（1）上屋改修工事（第19・20図／写真２－１～２-11）

現状で換気設備はあるが、上屋内に籠もる湿気をさらに効率よく換気するために換気設備の増設（腰部分４箇所・面戸部分４箇所・ドア部分１箇所）と屋根の棟換気を設置した。また足場を組んで、剥がれかけている屋根下地のベニヤの補修をし、内部鉄骨に錆止め塗装を実施した。

写真２-１．着工前　棟部

写真２-２．完成　棟部換気穴

写真２-３．着工前　腰部

写真２-４．完成　腰部換気穴

写真２-５．完成　面戸部換気穴

写真２-６．面戸部・腰部・ドア換気穴

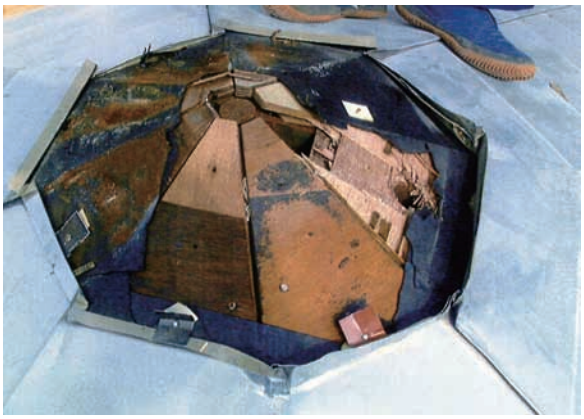


写真２－７．棟部切取①

写真２－８．棟部切取②

写真２－９．棟換気取付①

写真２－10．棟換気取付②

写真２－11．完成　全景

第４節　平成30年度事業（保存修理事業③－１）

１　経緯と目的

平成29（2017）年５月の県文化財パトロールで「異常あり」と指摘されたことを受け、同年５月30日に吾妻教育事務所・吾妻西部パトロール員・町教委の３者、その後同年６月９日に県文化財保護課・吾妻西部パトロール員・地権者・町教委の４者で現地視察を実施し、今後の措置に関して協議した。その結果、平成17年度の上屋改修により通気性が向上したが、半露出展示であることに変わりなく、遺構面の保護という観点からは抜本的な対策となっていない。冬期間の霜柱で遺構表面が劣化し、遺構表面にはコケや雑草が生い茂る状況が続いており、公開・活用に向けた保存整備が必要であるとの判断に至った。遺構面の保護には、①遺構面に保護盛土をしてオリジナル面を保護し、盛土上に実測図から柱穴等を復元する手法、②盛土はせずにオリジナル面を薬剤により固めて風化を防ぐ手法の２通りが考えられるが、後世まで保存していくことを考慮して前者の手法を採ることとした。再調査を実施中の同年９月10日に県教委・町教委で現地視察を実施した際に、上屋の屋根や壁が経年劣化していること、見学者は基本的に建物の外から窓ガラスを通して建物内の遺構を見学するが現状の窓では反射して内部が見えづらいため低反射ガラスに交換した方かよいとの指摘をうけ、これらに対処するため平成30年度から３ヶ年計画で保存修理事業を実施することになった。

２　実施期間

着手　平成30（2018）年５月１日　　完了　平成30（2018）年12月27日
調査準備　５月１日～８月20日、再調査・測量　８月21日～10月29日
遺構面保存処理　８月20日～10月25日、事務処理　11月６日～12月27日

３　事業内容

（１）再調査・測量（写真３－１～３－25）

遺構面の保存処理を実施する前提として、昭和29（1954）年に調査された時に近い状態に復元することが必要であった。平成30（2018）年４月23日付け、長教社発第50号にて群馬県文化財保護条例第11条の規定による「現状変更等許可申請書」を町から群馬県教育長宛てに提出し、同年６月25日付け、文財第604－21号にて「群馬県指定史跡勘場木石器時代住居跡の現状変更等（保存に影響を及ぼす行為）の許可について」が群馬県教育長から町へ通知され、同年８月21日から再調査を実施した。住居内に雑草が生い茂っていたため、まずはなるべく雑草除去を人力により実施した。その後住居跡の精査を行い、周溝や柱穴の掘削、床面・炉跡・壁の確定作業した後に、現状で光波測距儀を用いて平断面測量、写真撮影を行なった。その上で発見当時の写真・図面（計測値）を参考に、主に柱穴を成形して住居跡を復元した。これら再調査・測量の成果については次章で述べることとする。

写真３－１．着手前状況①

写真３－２．着手前状況②

写真３－３．着手前状況③

写真３－４．作業状況①（雑草除去）

写真３－５．雑草除去後状況①

写真３－６．雑草除去後状況②

写真３－７．雑草除去後状況③

写真３－８．作業状況②（遺構精査）

写真３−９．遺構精査後全景（真上から）

写真３−10．炉１・炉２（南西から）

写真３−11．P1（南から）

写真３−12．P2（南から）

写真３−13．P3（北から）

写真３−14．P4（北から）

写真３−15．P5・P6（北から）

写真３−16．P7（北から）

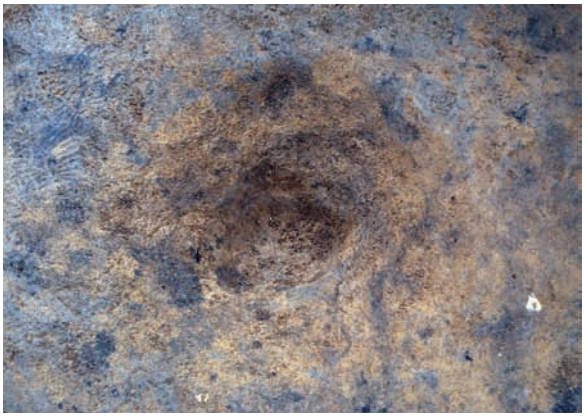


写真３−17．P8（北から）

写真３−18．P9（南から）

写真３−19．P10（南から）

写真３−20．P11（南から）

写真３−21．P12（南から）

写真３−22．P15（南から）

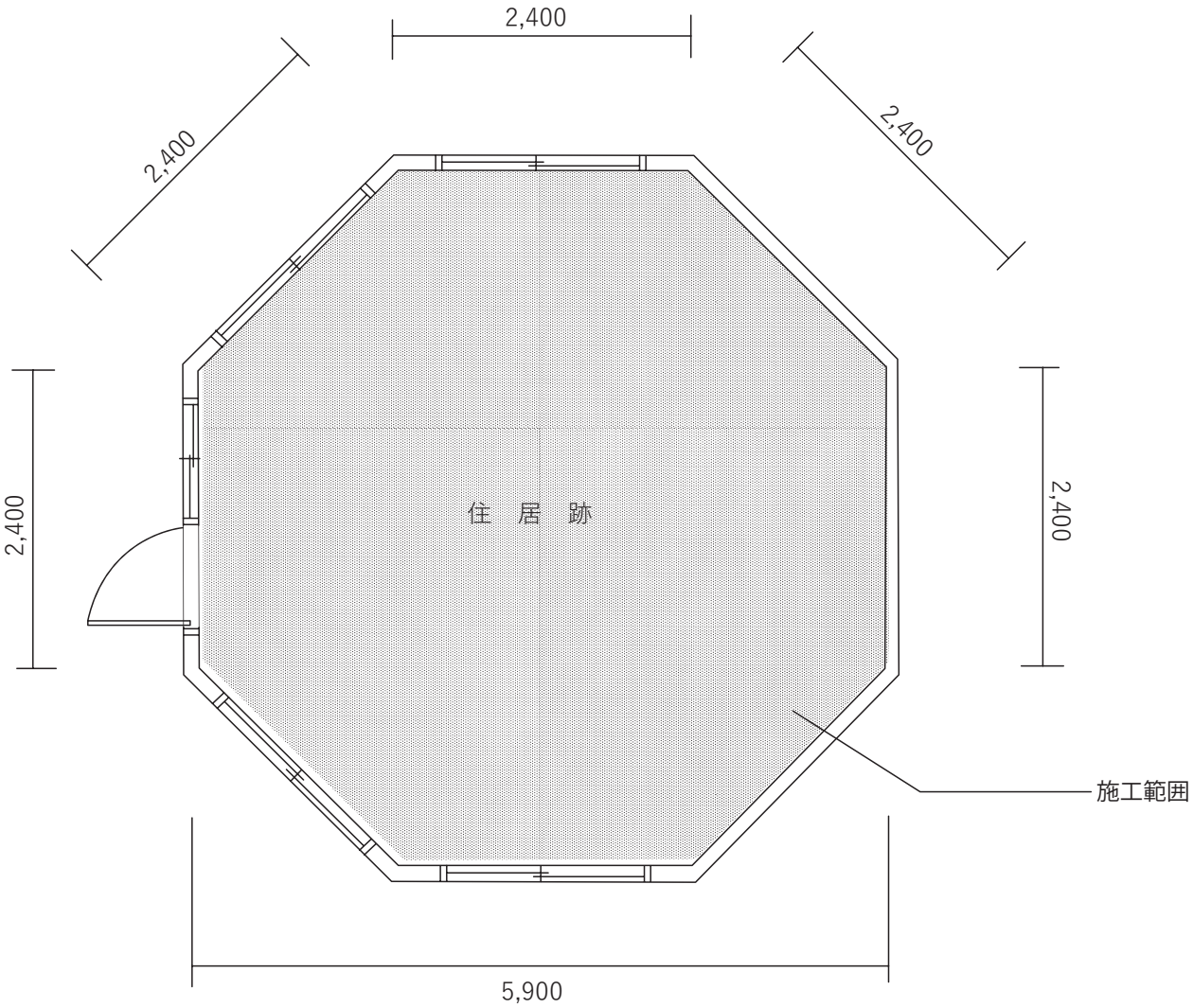
写真３−23．ドローン撮影

写真３−24．測量作業①

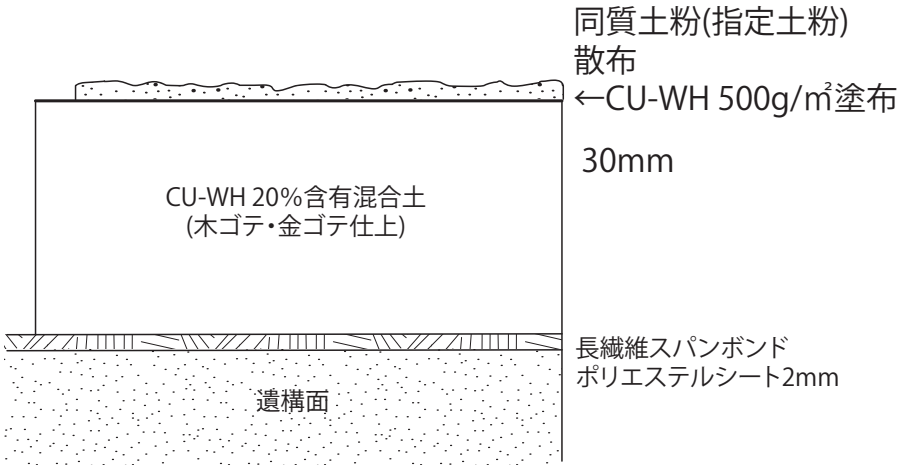
写真３−25．測量作業②

（２）遺構面保存処理（第21・22図／写真４−１〜４−19）

作業は再調査と併行して実施された。復元したオリジナルの遺構面にポリエステルシートを敷き込み、その上に平面で30㎜厚、柱等の垂直方向で10㎜厚の擬土（硬化剤混合）を均一に塗りつけた。表層は硬化剤を塗布後にロームに近い土を散布して仕上げた。擬土は再調査によって発生した土を保管したものから選別して、乾燥後に防カビ剤・硬化剤を攪拌させたものを使用した。擬土の厚さに関しては、垂直方向を30㎜厚にしてしまうと実際の遺構の寸法とかけ離れてしまい、復元の意味をなさないので、壁面については10㎜厚とした。施工範囲は遺構だけでなく、上屋建物内全



第 21 図　［平成 30 年度事業］遺構面保存処理範囲図



第 22 図　［平成 30 年度事業］遺構面保存処理概念断面図

写真４−１．ポリエステルシート敷き込み作業

写真４−２．ポリエステルシート敷き込み作業完了①

写真４−３．ポリエステルシート敷き込み作業完了②

写真４−４．ポリエステルシート敷き込み作業完了③

写真４−５．ポリエステルシート敷き込み作業完了④

写真４−６．擬土塗り作業①

写真４−７．擬土塗り作業②

写真４−８．擬土塗り作業③

写真４−9．擬土塗り作業完了①

写真４−10．擬土塗り作業完了②

写真４−11．擬土塗り作業完了③

写真４−12．表層仕上げ作業①

写真４−13．表層仕上げ作業②

写真４−14．表層仕上げ作業完了①

写真４−15．表層仕上げ作業完了②

写真４−16．表層仕上げ作業完了③

写真４−17．表層仕上げ焼土塗布作業

写真４−18．表層仕上げ焼土塗布作業完了

写真４−19．遺構面保存処理完成　全景

体にわたって実施した。作業は同年10月25日まで実施され、事務処理が終了した後の平成31（2019）年１月８日付けで「現状変更終了届について」を提出してすべての作業が終了した。

第５節　平成 31（令和元）年度事業（保存修理事業③－２）

１　経緯と目的

３ヵ年計画の２年目である。前年度はこれまでの遺構を覆う上屋とその内部環境の改善だけでは、遺構そのものの保護にならないことから、遺構表面の保存処理を実施した。それに伴って発見当時の実測図には周溝の下場が測量されていないなど情報が不足しているため、再調査により現状での平断面測量を実施した上で、当時の写真・図面を参考に遺構表面を復元をした。

平成31（令和元）年度は、出土遺物の再整理を実施する。併せて上屋修繕工事（外壁その他塗装、屋根漏水修繕、屋根塗装、窓ガラス交換）を実施した。

２　実施期間

着手　平成31（2019）年４月26日　　完了　令和２（2020）年３月６日
上屋修繕工事　８月20日～11月29日　　再整理　9月9日～２月28日
事務処理　11月６日～３月６日

３　事業内容

（１）上屋修繕工事（写真５－１～５－20）

平成２・17年度に上屋設置・改修を実施してきたが、13年経過し、屋根・下地・壁の経年劣化とともに雨漏りが確認されたため、上屋修繕工事を実施した。平成17年度の換気穴増設により、内部の湿気も以前より改善した。雨漏りは平成17年度に設置した軒換気及びその周辺の組み方を精査したが、根本的な原因を追究することはできなかった。併せて見学者側から写り込みが少ない低反射ガラスを使用した窓ガラスに交換した。

（２）出土遺物の再整理（写真６－１～６－17）

出土遺物を所有者から借用し、既存実測済み遺物の確認作業を実施した。その後洗

写真５－１．着工前　外観①

写真５－２．完成　外観①

写真５−３．着工前　外観②

写真５−４．完成　外観②

写真５−５．着工前　外観③

写真５−６．完成　外観③

写真５−７．着工前　壁・ガラス①

写真５−８．着工前　壁・ガラス②

写真５−９．着工前　軒天・鉄部

写真５−10．塗装工事　下地処理①

写真５−11．塗装工事　下地処理②

写真５−12．塗装工事　錆止め塗装状況

写真５−13．塗装工事　錆止め塗装完了

写真５−14．塗装工事　上塗り塗装状況

写真５−15．塗装工事　上塗り塗装完了

写真５−16．塗装工事　軒天　錆止め塗装完了

写真５−17．塗装工事　柱鉄部分塗装状況

写真５−18．塗装工事　外壁塗装状況

写真５−19．ガラス入替え状況①

写真５−20．ガラス入替え状況②

浄・分類・接合作業を実施した後に、実測図作成・写真撮影を行った。分類・接合作業では、既存実測済み個体にさらに破片の接合が認められ復元範囲が拡充したり、破片実測だったものが復元個体となるなど一定の成果があった。また石器は実測済みのもの以外に打製石斧類が予想外に多かったため、実測業務を委託した。申請時に出土石器実測・トレース業務としていたが、当初より点数が増えたため、実測業務を優先した。写真撮影が完了した後には、所有者へ返却して、ケース内へ再展示した。再整理の詳細についても次章で述べることとする。

写真６−１．出土遺物展示状況①

写真６−２．出土遺物展示状況②

写真６−３．出土遺物展示状況③

写真６－４．出土遺物展示状況④

写真６－５．出土遺物展示状況⑤

写真６－６．出土遺物展示状況⑥

写真６－７．出土遺物展示状況⑦

写真６－８．資料借用状況

写真６－９．再整理作業①（水洗い）

写真６－10．再整理作業②（分類・接合）

写真６－11．再整理作業③（接合・復元）

写真６－12．再整理作業④（復元・着色）

写真６－13．再整理作業⑤（実測）

写真６－14．再整理作業⑥（写真撮影）

写真６－15．資料返却状況

写真６－16．出土遺物再展示状況①

写真６－17．出土遺物再展示状況②

第６節　令和２年度事業（保存修理事業③-３）

１　経緯と目的

３ヵ年計画の３年目である。本遺跡の調査に関しては概報はなされているものの、本報告書は未刊で、『群馬県史』で遺構・遺物について触れているのみである。 平成２・17年度、平成30～令和２年度の３度にわたる保存修理事業が実施されてきたが、それに対する報告もなされてきていない。このことから令和２年度は、これまでの経過も含めた報告書の作成を実施した。

２　実施期間

着手　令和２（2020）年４月20日　　完了　令和３（2021）年３月19日
報告書作成　４月20日～２月26日　　事務処理　３月１日～３月19日

３　事業内容

（１）報告書作成（写真７-１・７-２）

まず、平成31（令和元）年度に出土遺物の再整理で実測図の作成、写真撮影までが完了していたので、それらをトレースし、図版・遺物観察表を作成した。併せて平成30年度に実施した遺構精査・測量図作成のデータを編集し、図版を作成した。その際に比較用に『群馬県史』掲載の遺構実測図も再トレースした。

次に発見当時の資（史）料の収集と整理、各保存修理事業ごとに資（史）料の整理と図版の作成・編集をした。

12月下旬から２月中旬には編集・執筆・校正を経て、２月下旬に報告書を刊行するに至った。

写真７-１．トレース作業

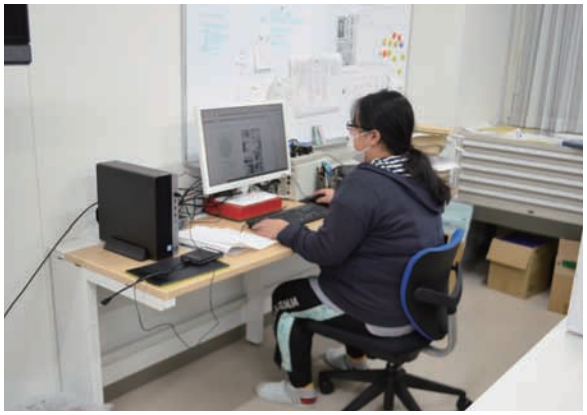


写真７-２．図版編集作業

第３章　再調査の成果

第１節　概　要

昭和28（1953）年暮れに土地所有者が畑地を田圃に造成中に完形土器を偶然発見したことに端を発し、翌29（1954）年１月までには竪穴式住居跡を１軒を発掘するに至った。これを聞き、同年１月23・24日にわたって群馬県文化財専門委員であった山崎義男氏による遺構・遺物の調査が実施された。その概要をまとめたのが、山崎報告（第４章第２節）である。この時住居跡の実測図（第23図）が作成された。

その後昭和47（1972）年に調査者の一人である塩野新一氏が、「故山崎義男・塩野要造両氏の霊に捧げる」として自費でまとめたのが塩野概報（第４章第３節）である。山崎報告の全文を再録し、山崎報告に欠けていた出土遺物実測図（第48～50図）や上信国境の縄文遺跡の概要が加えられた構成となっている。付加部分は当時長野県佐久地域で先進的に郷土史研究をされていた土屋長久氏にお願いしており、これが実際最初の遺物整理となる。実測原図などは塩野家には残されていない。

昭和63（1988）年に発行された『群馬県史』資料編１原始古代（旧石器・縄文）に本遺跡も収録されている（第４章第４節）。その前年の昭和62（1987）年に能登健（県史編纂室）・桜岡正信（調査協力者）両氏が来跡して、山崎氏作成の住居跡実測図に下場を付け加えた（第24・52図）。遺物は塩野概報の図面をベースにして、接合・石膏充填・再実測を実施した（第53～56図）。遺物に関しては桜岡氏による分類と詳細な記述がなされ、住居跡の所見として提示されている。これが２度目の整理調査である。

そして今回が３度目の整理調査となる。

第２節　遺　構

１　竪穴住居跡（第 25・26 図／第４表）

位　　置　北緯 36 度 33 分 36 秒、東経 138 度 36 分 38 秒

検出状況　畑地を田圃に造成中に検出された。

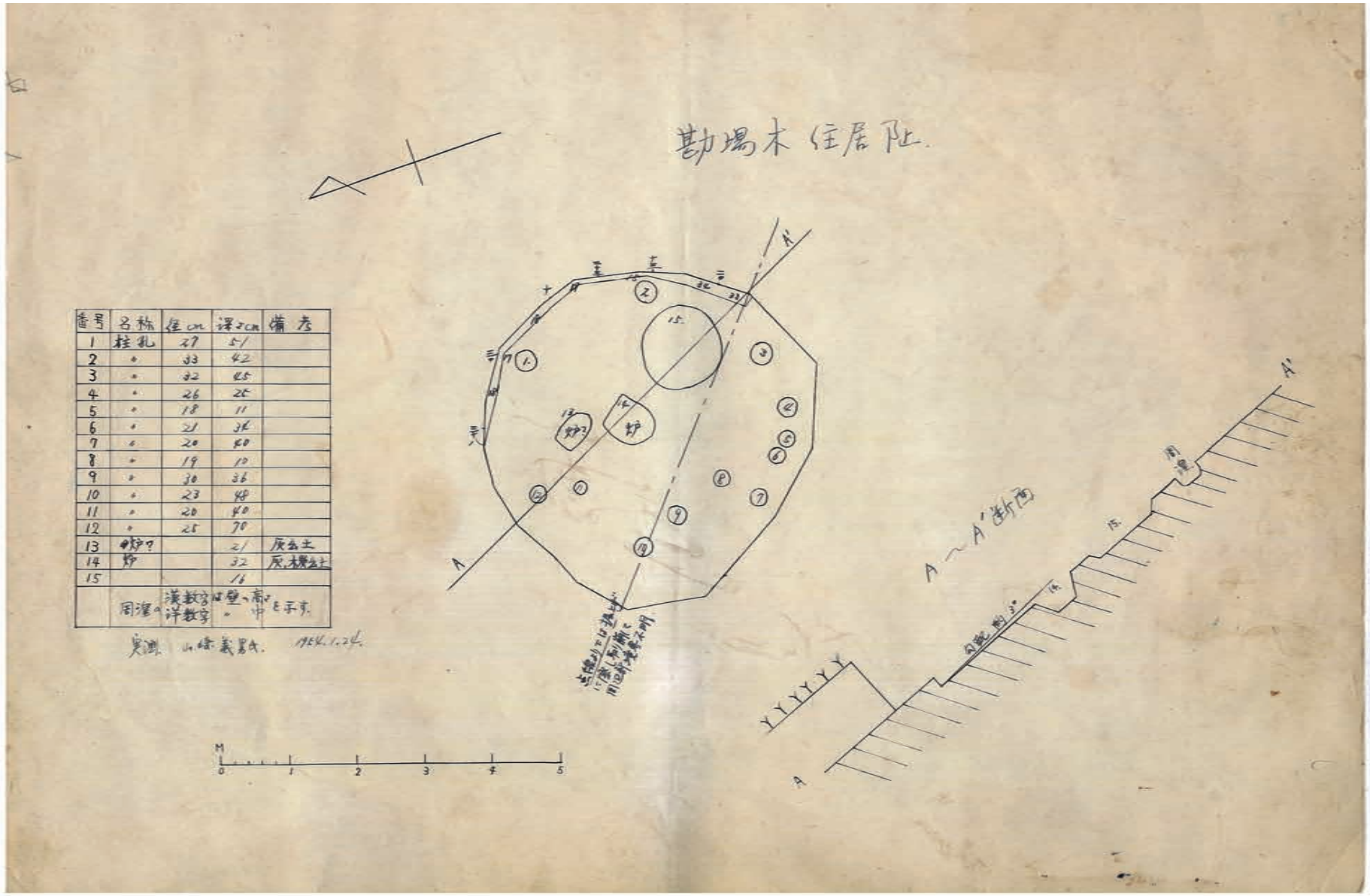
重複関係　基本的になしとされているが、前期～中期前半までの遺物が含まれていることからP13 とした土坑が当該時期に帰属していた可能性が高い。

遺存状態　南～西壁を攪乱により欠いているが全体的に良好である。

覆　　土　不明。

平面形と規模　平面形は円形を基調とし、規模は復元で主軸方向で 5.3 m、副軸方向で 5.17 mを測り、確認面からの深さは北東壁付近で最深約 20㎝を測る。

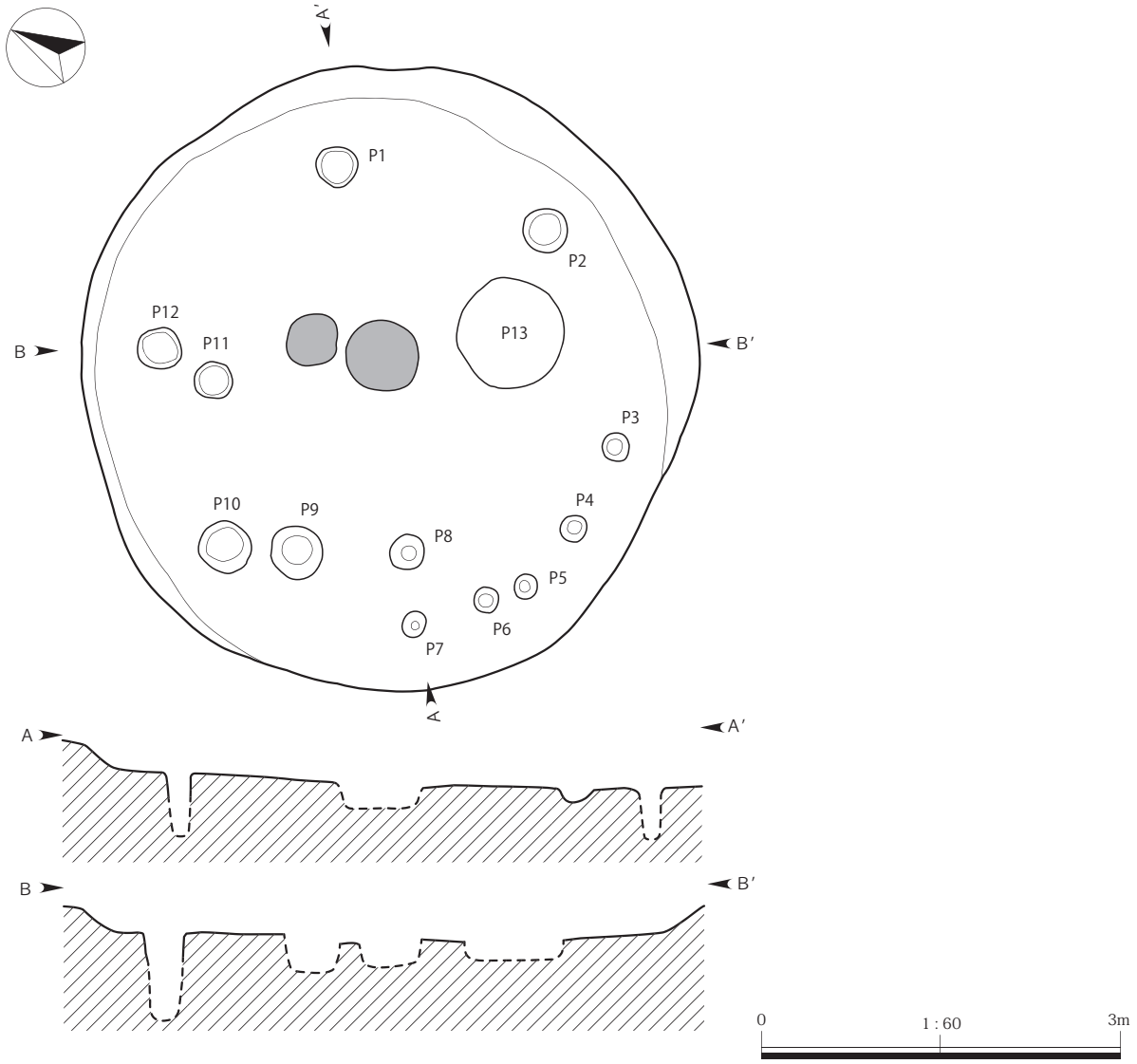
主軸方位　N － 10°－ E　入口の方向を重視し、Ｐ１とＰ 12、Ｐ３とＰ７の中間、１号炉・Ｐ５を結んだラインを主軸と考えた。



番号	名称	径cm	深cm	備考
1	柱孔	27	51	
2	〃	33	42	
3	〃	32	45	
4	〃	26	25	
5	〃	18	11	
6	〃	21	34	
7	〃	20	40	
8	〃	19	10	
9	〃	30	36	
10	〃	23	48	
11	〃	20	40	
12	〃	25	70	
13	炉?		21	灰&土
14	炉		32	灰,木炭&土
15			16	
	周溝の 漢数字は壁、高さ 洋数字 〃 中を示す			

実測 山崎義男氏 1956.1.24.

第 23 図　山崎氏作成実測図原図（1/50 を 60%縮小）



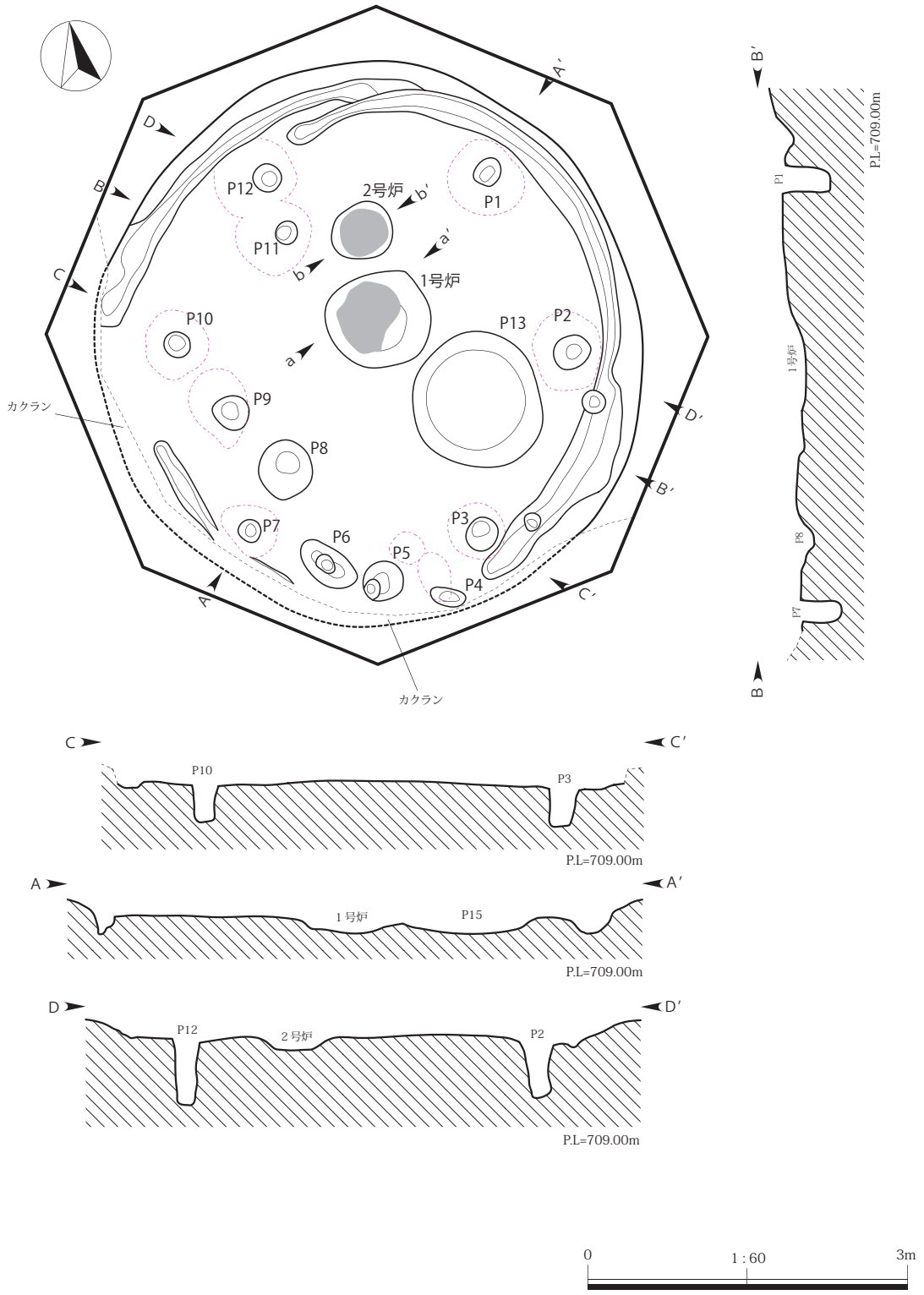
第 24 図　県史掲載実測図（1/60）　県史から再トレース

壁・周溝　壁は南～西壁にかけて全体の５分の２ほどが消失している。壁高は北東壁で15㎝を測り、外傾しながら立ち上がっている。周溝は発見時の調査で「東北部のみに発見された」とされているが、南～西部で一部途切れるがほぼ全周しており、壁が遺存している部分では壁に沿って検出されている。北側では一部掘り直したような痕跡が認められているが、当初からなのか、精査によるものなのかは判断しかねる。溝幅は 13 ～ 48㎝、床面からの深さは４～ 15㎝を測る。

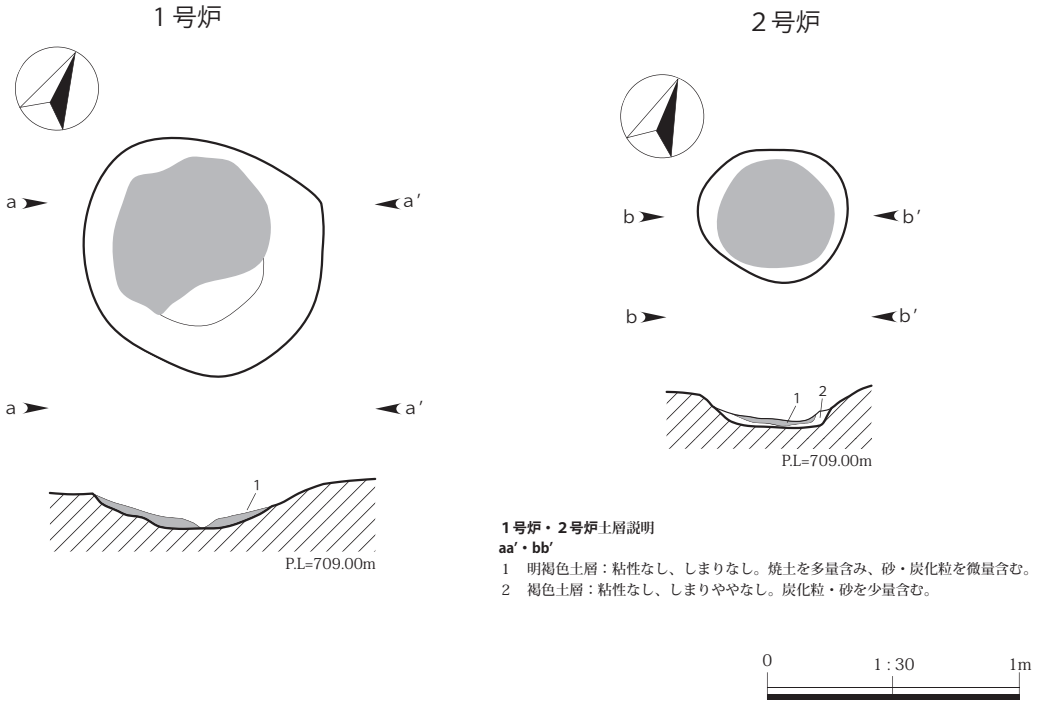
底　　面　北東から南西へ約３°の勾配で傾斜している。床面積は現状で（20.2 ）㎡、復

第４表　柱穴等計測表

山崎	概報	県史	本報告	直径(㎝)	深さ(㎝)
P1	P1	P1	P1	27	51
P2	P2	P2	P2	33	42
P3	P3	P3	P3	32	45
―	―	―	P4	34 × 15	7
P4	P4	P4	P5	26	25
P5	P5	P5	P6	18	11
P6	P6	P6		21	34
P7	P7	P7	P7	20	40
P8	P8	P8	P8	19	10
P9	P9	P9	P9	30	36
P10	P10	P10	P10	23	48
P11	P11	P11	P11	20	40
P12	P12	P12	P12	25	70
P13	F2	―	炉２	50 × 40	21
P14	F1	―	炉１	70 × 60	32
P15	―	P13	P13	130 × 110	15



第 25 図　住居跡実測図（1/60）



第26図　1・2号炉実測図（1/30）

元で＜21.0＞㎡。

柱　　穴　P1～P13まで確認されている。今回の精査でP4と周溝内ピットが新たに発見され、またこれまでP5・P6とされていたものが一つの柱穴であることが判明した。主柱穴となるのはこれまでの指摘どおりP1～P3・P7・P10・P12の6本であり、P5・P6は入口に関係するピットと考えられる。

炉　　跡　2基検出されており、主炉を1号炉、副炉を2号炉とした。1号炉は住居の中央やや北寄り、2号炉は1号炉の北側に位置する。山崎氏が「近接して二ヶの炉の必要も考えられないし、底面及周壁の状態からして重複した竪穴住居址ともかんがえられないので、此の場合炉趾として断定出来難く一応疑問としたい」としたものであるが、複数炉をもつ事例がないわけでもないので当該期の炉跡とする。

その他の施設　なし。

遺　　物　遺物の出土状況は残念ながら不明であるが、復元土器28点、土器片26点、石器46点を図示し得た。他時期の混入遺物もあるが、縄文時代中期後半の遺物が主体である。遺物については次節で詳述する。

備　　考　本住居跡は平面形が一部直線的な箇所も認められるが、円形を基調とする。規模は復元すると5m代の中形に属し、当該期住居としては一般的な大きさである。柱穴は壁に沿って配置され、床面は直床式で貼床は認められない。炉は2基検出されているが、いずれも地床炉である。埋甕等の施設は認められない。これらの特徴は当該期の古い段階の様相を示している。

第３節　遺　物

１　既往の整理調査との比較

整理調査別の出土遺物実測数一覧と実測図互換表を第５・６表に示す。前述した通り、これまで２回にわたって整理調査が実施されており、実測図が作成されている。第５表を見ると、例えば土器の復元実測が『塩野概報』で２点だったが、『県史』では 13 点に増え、今回さらに 28 点に増えたということが分かる。土器合計では 26 点→ 30 点→ 54 点、石器合計で 16 点→ 13 点→ 46 点、遺物総計で 42 点→ 43 点→ 100 点と今回報告の成果が一目瞭然である。今回取り直しを除いて新たに実測図を作成したのが、土器で 20 点、石器で 24 点を数える。

さらに第６表は、それぞれの個体遺物の互換表となっており、整理調査ごとの個体遺物がそれぞれの図の番号に対応するかを確認することができるようになっている。例えば、『塩野概報』で破片実測（第 50 図５）、『県史』でそれぞれ破片実測（第 53 図３・第 54 図 19）が接合し、今回は復元実測（第 29 図 13）されたり、同じく『県史』で破片実測（第 53 図５）だったが、今回は口縁部まで接合され、復元実測（第 27 図５）されたなどが検証できる。

第５表　整理調査別出土遺物実測数一覧

		土器復元	土器破片	土器合計	磨製石斧	打製石斧類	剥片石器類	礫石器類	その他	石器合計	遺物総計
概報	S47 土屋	2	24	**26**	1	12	0	3	0	**16**	**42**
県史	S63 桜岡	13	17	**30**	0	7	0	5	1	**13**	**43**
本報告	R2 町教委	28	26	**54**	2	29	6	8	1	**46**	**100**

２　分類

（１）土　器

以下、出土土器を４群に大別する。

第Ⅰ群　縄文時代前期の土器を一括する（第 31 図 37 ～ 47）。

第１類　前期前半土器

胎土に繊維を含む類で、37 ～ 44 は黒浜・有尾式に比定される。

第２類　前期後半土器

胎土に繊維を含まない類で 45 ～ 47 は諸磯式に比定される。

第Ⅱ群　縄文時代中期の土器を一括する（第 27 図１～第 30 図 36・第 31 図 48・49）。

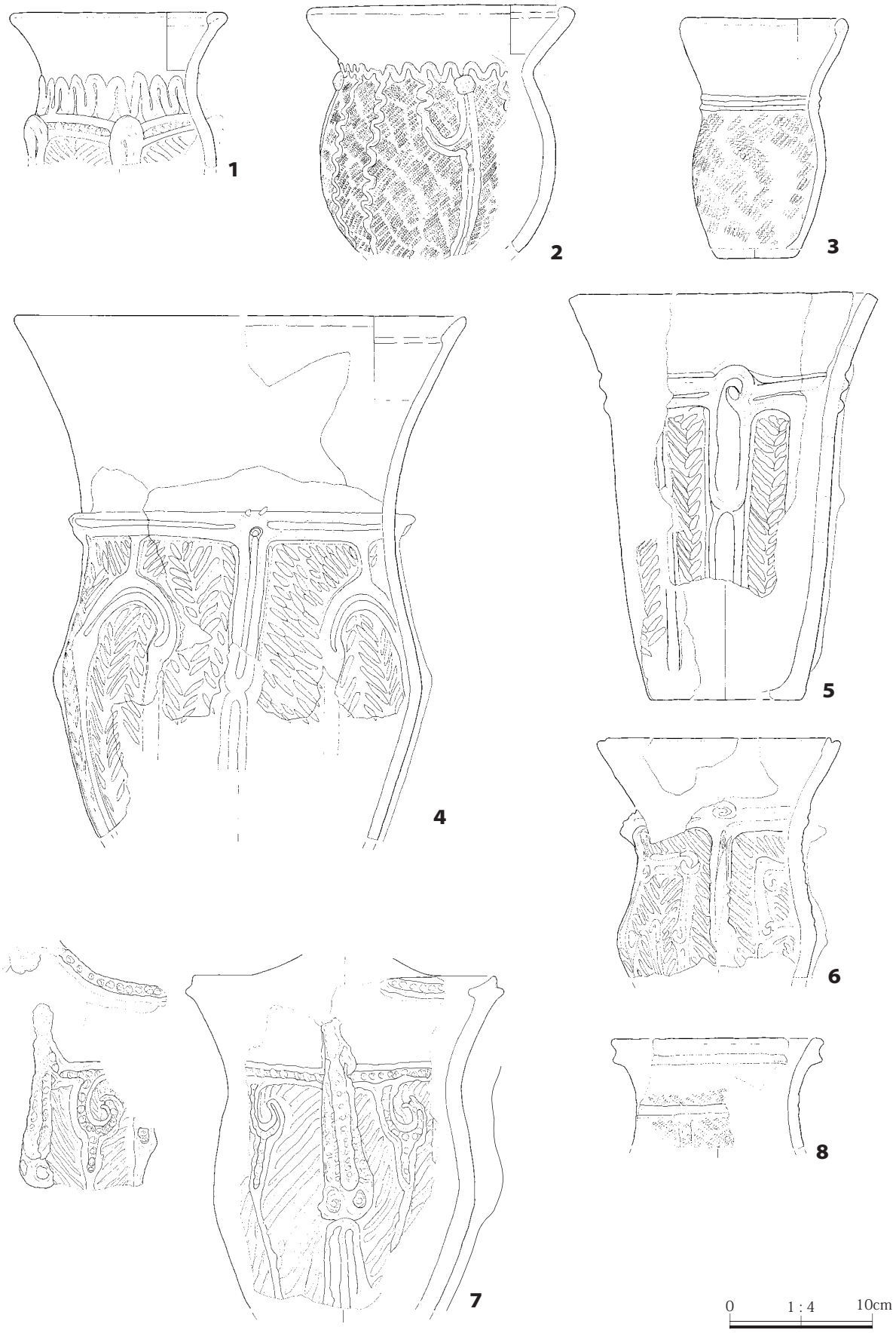
第１類　中期前半土器（第 31 図 48・49）

48 が阿玉台式、49 が勝坂式に比定される。

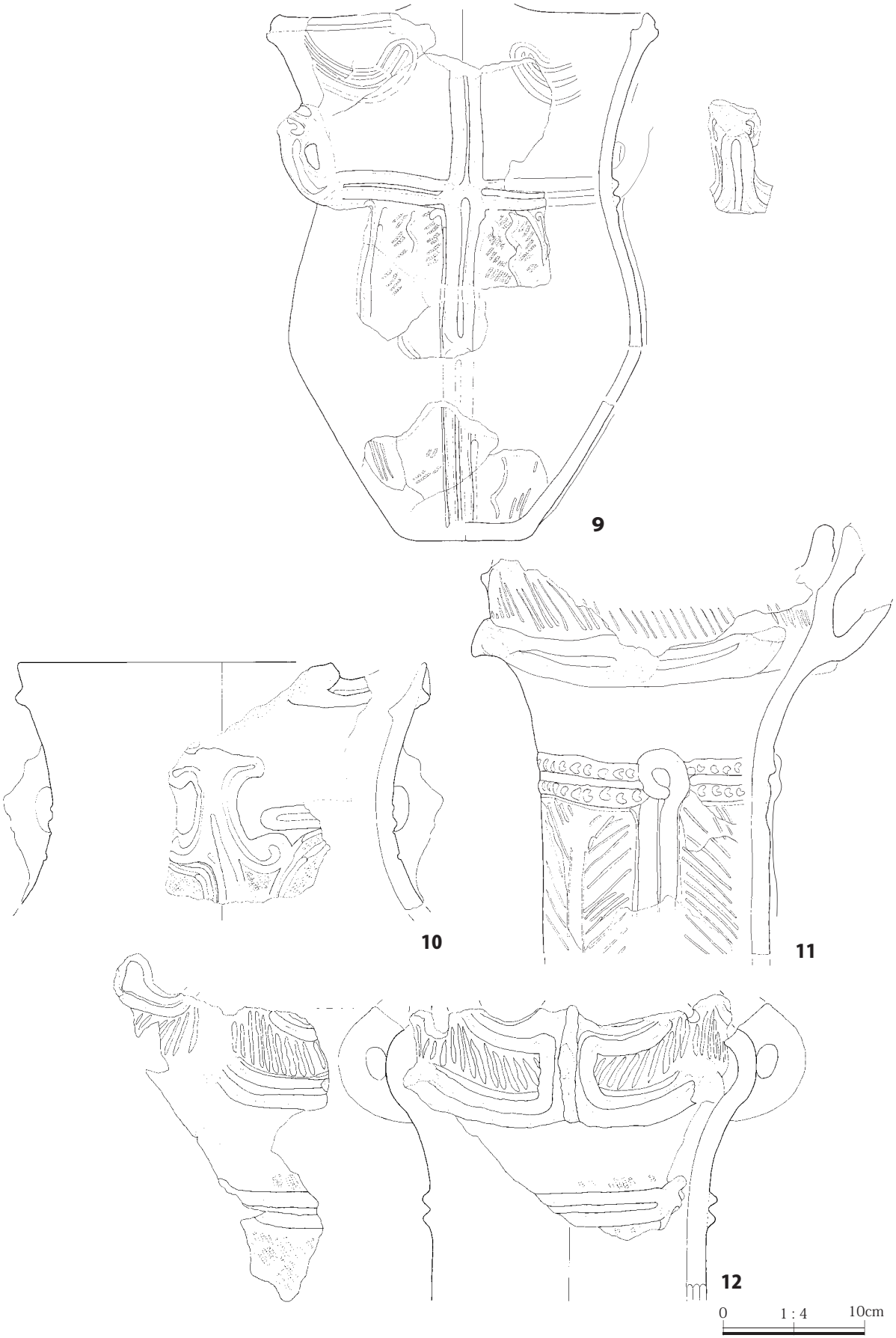
第６表　整理調査別出土遺物実測図互換表

S47 概報		S63 県史		本報告	
49-1	復元実測	53-10	復元実測	29-16	復元実測 接合
49-2	復元実測	53-4	復元実測	27-3	復元実測
50-1	破片実測	53-1	復元実測	31-37	復元実測
50-2	破片実測	54-14	破片実測 上下変更	31-38	破片実測
50-3	破片実測	—	—	—	—
50-4	破片実測	54-15	破片実測	31-47	破片実測
50-5	破片実測	53-3	復元実測 接合	29-13	復元実測 大規模接合
—	—	54-19	破片実測		
50-6	破片実測	—	—	30-33	破片実測
50-7	破片実測	53-2	復元実測 接合	29-14	復元実測
50-8	破片実測	—	—	31-45	復元実測
50-9	破片実測	—	—	—	—
50-10	破片実測	—	—	—	—
50-11	破片実測	—	—	—	—
50-12	破片実測	54-17	破片実測	29-20	復元実測
50-13	破片実測	54-18	破片実測	29-19	復元実測
50-14	破片実測	—	—	—	—
50-15	破片実測	—	—	27-4	復元実測 大規模接合 口縁追加
50-16	破片実測	—	—		
50-17	破片実測	—	—	—	—
—	—	54-20	破片実測	29-21	復元実測 接合
50-18	破片実測	—	—	27-8	復元実測 接合
50-19	破片実測	—	—	—	—
50-20	破片実測	54-21	破片実測 一部欠損	30-28	破片実測 新規接合
50-21	破片実測			31-53	破片実測
50-22	破片実測	55-28	破片実測 接合	31-51	破片実測
50-23	破片実測				
50-24	破片実測	55-30	復元実測	31-50	復元実測
—	—	53-5	復元実測	27-5	復元実測 同一個体により 底部付近まで拡張
—	—	53-6	復元実測	28-11	復元実測 接合
—	—	53-7	復元実測	27-2	復元実測
—	—	53-8	復元実測	27-1	復元実測
—	—	53-9	復元実測	29-17	復元実測 実測位置変更
—	—	53-11	復元実測	27-6	復元実測 口縁追加
—	—	53-12	復元実測	30-22	復元実測 接合復元やり直し
—	—	54-13	破片実測	31-39	破片実測
—	—	54-16	破片実測	31-48	破片実測
—	—	54-22	破片実測	31-34	破片実測
—	—	54-23	破片実測	29-18	復元実測
—	—	54-24	破片実測	27-7	復元実測 口縁追加 同一個体実測
—	—	54-25	破片実測	28-12	復元実測 同一個体追加
—	—	54-26	破片実測	30-35	破片実測 接合
—	—	54-27	破片実測	30-36	破片実測
—	—	55-29	破片実測	31-52	破片実測
—	—	—	—	28-9	新規接合 復元実測
—	—	—	—	28-10	新規接合 復元実測
—	—	—	—	29-15	新規接合 復元実測

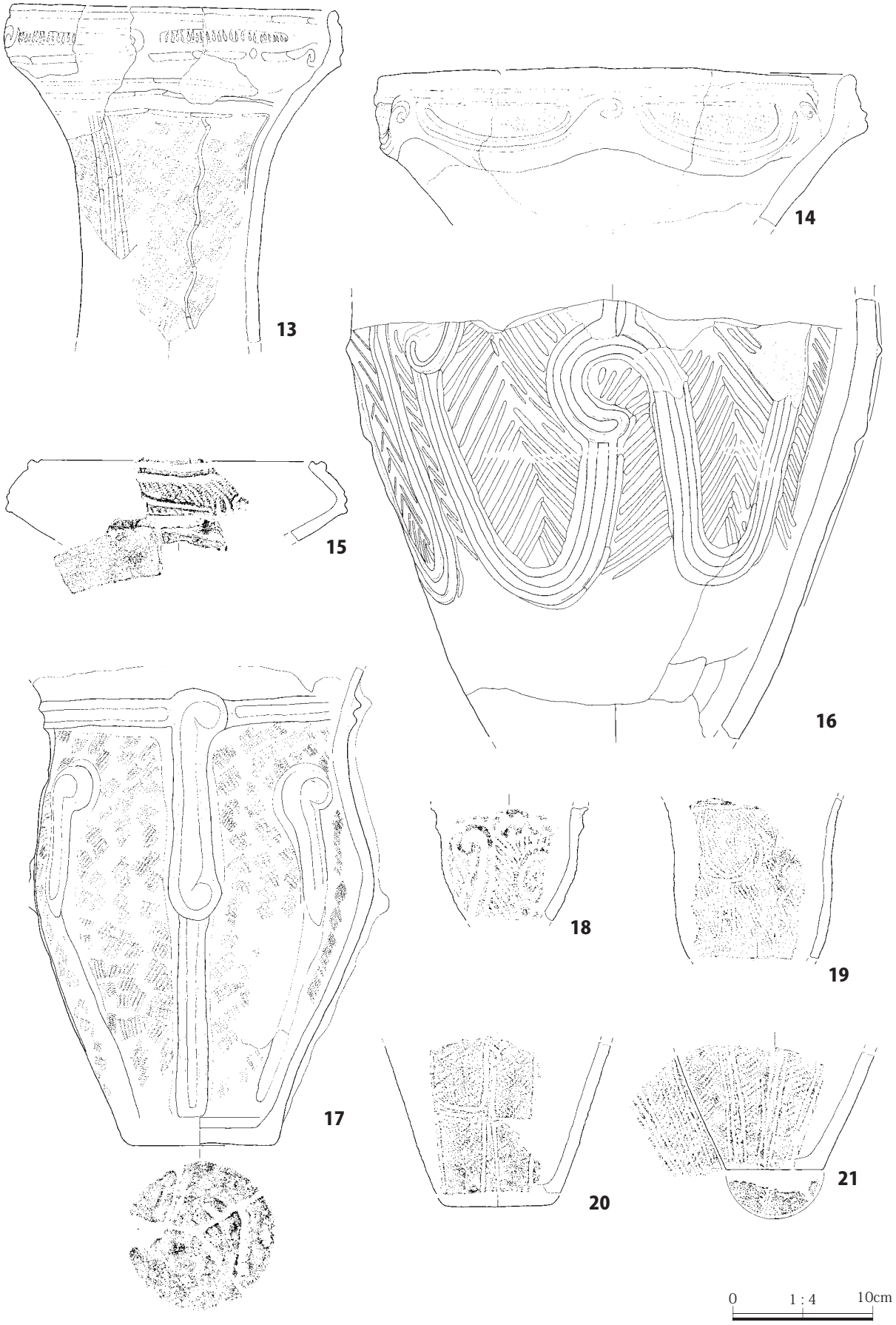
S47 概報		S63 県史		本報告	
—	—	—	—	30-23	復元実測
—	—	—	—	30-24	破片実測
—	—	—	—	30-25	破片実測
—	—	—	—	30-26	破片実測
—	—	—	—	30-27	破片実測
—	—	—	—	30-29	破片実測
—	—	—	—	30-30	破片実測
—	—	—	—	30-31	破片実測
—	—	—	—	30-32	破片実測
—	—	—	—	31-40	破片実測
—	—	—	—	31-41	破片実測
—	—	—	—	31-42	破片実測
—	—	—	—	31-43	破片実測
—	—	—	—	31-44	破片実測
—	—	—	—	31-46	復元実測
—	—	—	—	31-49	破片実測
—	—	—	—	31-54	復元実測
48-1	2 面	—	—	33-79	4 面
48-2	2 面	—	—	32-61	4 面
48-3	2 面	—	—	32-57	4 面
48-4	2 面	—	—	32-60	4 面
48-5	2 面	55-33	3 面	33-73	—
48-6	2 面	—	—	32-64	4 面
48-7	2 面	—	—	32-63	4 面 接合
48-8	2 面	—	—	32-56	4 面
48-9	3 面	—	—	33-78	4 面
48-10	2 面	55-37	3 面	33-76	3 面
48-11	2 面	—	—	33-72	4 面
48-12	2 面	—	—	32-69	4 面
48-13	2 面	55-32	3 面	33-74	3 面
48-14	3 面	55-40	3 面	35-96	4 面
48-15	3 面	56-41	3 面	35-93	3 面
48-16	3 面	55-39	3 面	35-92	3 面
—	—	55-31	3 面	32-62	3 面
—	—	55-34	3 面	32-67	3 面
—	—	55-35	3 面	34-80	4 面
—	—	55-36	3 面	34-86	3 面
—	—	55-38	3 面	35-97	2 面
—	—	56-42	3 面	35-94	4 面
—	—	56-43	3 面	35-100	2 面
—	—	—	—	32-55	4 面
—	—	—	—	32-57	4 面
—	—	—	—	32-58	4 面
—	—	—	—	32-59	4 面
—	—	—	—	32-65	4 面
—	—	—	—	32-66	4 面
—	—	—	—	32-68	4 面
—	—	—	—	33-70	4 面
—	—	—	—	33-71	4 面
—	—	—	—	33-77	4 面
—	—	—	—	33-75	4 面
—	—	—	—	33-79	5 面
—	—	—	—	34-81	3 面
—	—	—	—	34-82	5 面
—	—	—	—	34-83	4 面
—	—	—	—	34-84	4 面
—	—	—	—	34-87	5 面
—	—	—	—	34-88	5 面
—	—	—	—	34-89	5 面
—	—	—	—	34-90	4 面
—	—	—	—	34-91	5 面
—	—	—	—	35-93	3 面
—	—	—	—	35-98	3 面
—	—	—	—	35-99	2 面



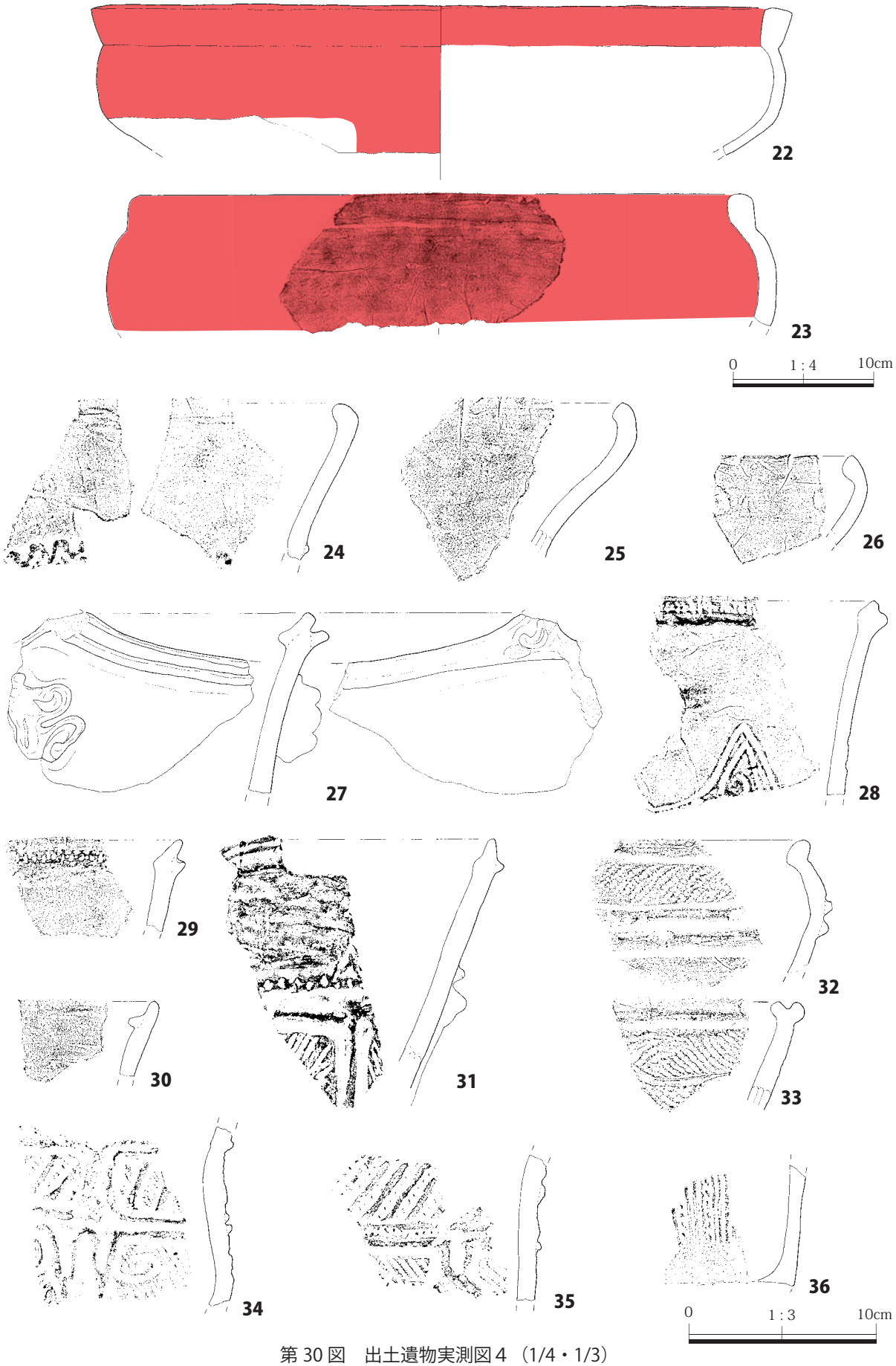
第 27 図　出土遺物実測図 1 （1/4）



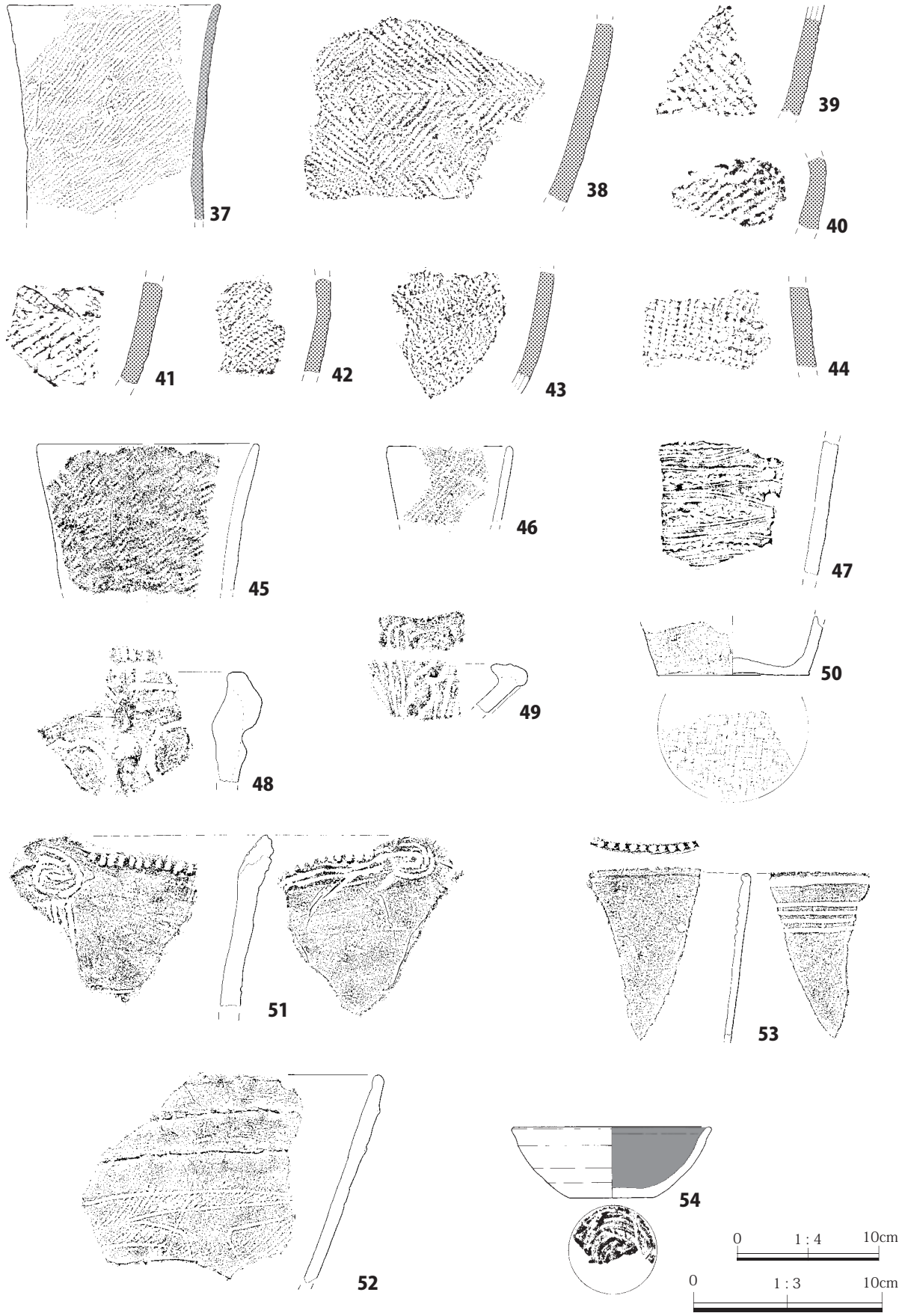
第 28 図　出土遺物実測図２（1/4）



第 29 図　出土遺物実測図 3（1/4）



第 30 図　出土遺物実測図４（1/4・1/3）



第 31 図　出土遺物実測図 5（1/4・1/3）

第２類　中期後半（第 27 図１～第 30 図 36）

本類が 36 点と最も多く、住居跡に帰属する土器群である。口縁部形態と文様構成により以下の７種に細別する。

ａ種　口縁が無文の類（第 27 図１～６・第 30 図 24 ～ 26・30）

ｂ種　口唇部に沈線が巡り、突起や橋状把手がついてその周囲に単位文様を有したりするが、基本的に頸部まで無文の類（第 27 図７～第 28 図 10・第 29 図 17・第 30 図 27 ～ 31）

ｃ種　加曽利Ｅ的な口縁の類（第 28 図 11 ～第 29 図 14・第 30 図 32・33）

ｄ種　体部のみ残存で曽利式ないし「唐草文系土器」と考えられる類（第 29 図 16・18・第 30 図 34 ～ 36）

ｅ種　体部のみ残存で縄文地文上に沈線による区画文・意匠文を施す類（第 29 図 19 ～ 21）

ｆ種　浅鉢（第 30 図 22・23）

ｇ種　その他（第 29 図 15）

第Ⅲ群　縄文時代後期の土器を一括する（第 31 図 50 ～ 53）。

４点のみで、50 は底面に網代痕を残しているため本群に分類した。51 は後期前葉堀之内１式新段階、52 は堀之内２式、53 は後期中葉加曽利Ｂ式にそれぞれ比定される。

第Ⅳ群　平安時代の土師器を一括する（第 31 図 54）。

１点のみで内黒土器である。この他に皿が１点あったが、別の遺跡からの搬入有る可能性が高いため作図するには至らなかった。

（２）石　器

石器は全体で 45 点を図示し得たが、組成に大きな特徴がある。45 点中打製石斧が未成品も含めると 27 点で全体の 60％を占める。実測しなかった整形剥片を含めればその割合の高さが際立っている。以下同じ打製石斧類の削器Ａが３点（6.7％）、剥片石器類６点（13.3％）、うち石匙１点（2.2％）、二次加工ある剥片５点（11.1％）、礫石器類８点（17.8％）、その他の石器３点（6.7％）であった。石鏃が１点も出土していないことや礫石器類の割合が低いことなどが指摘できる。

Ａ．打製石斧類

（ａ）打製石斧（第 32 図 55 ～第 33 図 77）

・平形…長方形に近い平面形状で、厚みの小さい横断面形が比較的平坦なもの（55 ～ 58）。

・平バチ形…基部側の幅が狭く、刃部側が開く形状のもの（59 ～ 74）。

・平大バチ形…最大長 15㎝、または最大幅５㎝以上のもの（75）。

・平細形…長さに対して幅の比率が２：１より小さなもの（76）。

・平分銅形…器体中央部付近の幅が狭く、両端が開く形状のもの（77・78）。

（ｂ）打製石斧未成品（第 33 図 79・第 34 図 80）

（c）削器A（第34図81～83）

B．剥片石器類

（a）石匙（第34図86）

1点のみでチャート製である。

（b）二次加工のある剥片（第34図87～91）

5点いずれも黒曜石製であるが、製品は出土していない。

C．礫石器類

礫石器類は磨石・凹石・敲石・石皿に分類できるが、単独での使用は少なく、組み合わさって複合石器として把握されることが多い。

（a）磨石＋凹石＋敲石（第35図92～94）

（b）凹石＋敲石（第35図95・96）

（c）敲石（第35図97）

（d）敲石＋磨石（第35図98）

（e）石皿（第35図99）

D．その他の石器

（a）磨製石斧（第34図84・85）

2点のうち84は未成品。85は蛇紋岩製である。

（b）石棒（第35図100）

100は先端部を欠くが残存長29.8㎝、直径11.9㎝の安山岩製の石棒である。茎部は面取りして研磨調整、基部は敲打調整が施されている。

（3）所　見

本遺跡出土遺物に関しては、これまでも何度か検討されている。発見時に最初に調査した山崎義男氏は報告のあとがきにて「今度注目される点として、隣接長野県文化との交流地として最も重要な場所であり、この附近から県界方面は一層研究されるべきである」とし（第4節第2節）、塩野新一氏も土屋長久氏に出土遺物の図化と長野県佐久地域を中心とした遺跡の概要執筆をお願いして、本遺跡との共通性を指摘している（第4節第3節）。両氏とも、出土遺物について直接的な記述はないものの、信州との関係を念頭に置いていることが理解できる。出土遺物の具体的な様相を最初に示したのは桜岡正信氏である。『群馬県史』資料編に本遺跡を紹介する中で、「出土遺物の大半は曽利式系の土器であり、加曽利式系の土器は客体として入っているにすぎず、互いにほぼ純粋なかたちで存在している。これは本遺跡が長野県にごく近く位置しているため、群馬県の中央部のあり方とは逆転した様相を呈しているものと考えられる。時期は、中期後半・加曽利E2式期後半段階に位置付けられる」とし、関東系土器と信州系土器が混在していることを指摘した（第4章第4節）。その後筆者も、本遺跡を紹介する中で桜岡氏の指摘を追認した（第4章第5節）。これまで指摘された本遺跡の出土遺物の評価は基本的に変わらないが、今回の整理調査で既存資料を含

む新出資料を掲載したこと、また信州系土器の研究が進み、「郷土式」[1]の変遷や分布などが整理され、従来「唐草文系土器」[2]と一括りに捉えられていたものが「栃倉式」[3]や「郷土式」の一部などを含んでいることなどを踏まえ、出土遺物を見ていきたい。紙幅と時間に限りがあるので概要を述べるに留めたい。

まず出土遺物は4群に大別され、縄文時代前期・中期前半の第Ⅰ群・第Ⅱ群第1類は流れ込み遺物である。また僅かであるが、後期土器・平安時代土師器も混入しており、周辺に当該期集落の存在が想定される。住居跡に伴うのは第Ⅱ群第2類の中期後半の遺物である。全点確認したが、時期もまとまっており、1軒の住居跡から出土したものと認めてよいであろう。

口縁の形状や体部文様などで7種に細別した。a種とした第27図1～6・第30図24～26・30は口縁が無文の類である。ここには曽利式[4]、「栃倉式」、「郷土式」が含まれる。1～3・24～26の内湾するタイプは、波状体部文様からも曽利式の影響が強いことが窺える。3は塩野親子が住居全体を発掘する端緒となったほぼ完形の小形深鉢である。4・6・31は腕骨文・綾杉状沈線を特徴とし、「栃倉式」あるいは「唐草文系土器」の影響が強いもの。特に6は大木8b的な文様(蕨手文を方形に配する点)を持つ個体である。5は体部文様に太い綾杉状沈線が充填されており、口縁部文様帯をもたない「郷土式」の初源段階とも考えられる[5]。

b種とした第27図7～第28図10・第29図17・第30図27～31は口唇部に沈線が巡り、突起や橋状把手がついてその周囲に単位文様を有したりするが、基本的に頸部まで無文の類である。体部上半が括れ、口縁部が外反する器形を呈するものが多い。曽利式・「唐草文様土器」・「栃倉式」が該当する。7は口唇部沈線、主文様の渦巻状垂下文にも2条単位隆線の凹部に刺突文を加えるという独特な施文手法を有する。波状口縁の波頂部が一対で、その直下の体部には同隆線を3本縦位に重ねて下端に鼻穴状の刺突文を加える把手基部を配置している。破損部が摩耗していて不明瞭であるが、連結橋状把手が付設されるものと考えられる。垂下文間には斜位条線を充填している。大振りな連結橋状把手が付設される非縄文系であることから曽利式の影響が強い個体と考えたが、隆線間刺突文から北陸に広く分布する串田新式[6]の影響も考慮する必要があろう。9・10は橋状把手を有し、区画文に2条単位の隆線を用いている。頸部は同隆線で区切られ、体部は縄文と沈線文で構成される。9の隆線による十字状の区画文の構図は前述の串田新式の工字文との共通性が看取され、長野県小諸市郷土遺跡44号住（桜井2000）や東御市久保在家遺跡SB02出土土器（東部町教育委員会1992)にも認められる。これらは従来「唐草文系土器」とされていたが9は「串田新式」、10は「栃倉式」が在地化したものと考えておきたい。

c種とした第28図11～第29図14・第30図32・33は加曽利E式的な口縁の特徴が強く出ている類である。11～14・32は口縁部の楕円区画と渦巻文が確立しており、頸部に無文帯を有する類で、13は頸部に2条の横位沈線を巡らせている。32は口縁部破片であるが、口縁部文様帯下に無文帯を有している。縄文施文の13・14は磨消技法を伴っていないことから加曽利E2式新段階と考えられる。11・12は口縁端部を欠いているが、いずれも橋状把手を1対有する。11は口縁部文様帯の下端を2条

隆線による渦巻きつなぎ弧文で区画し、斜位条線を充填、体部も同隆線により区画し、２条の縦位沈線を挟んで綾杉状沈線を充填しており、この文様は後出する「郷土式」にも多用されている。12 も口縁部文様帯は２条単位の隆線を用いて区画し、斜位条線を充填、体部も同隆線で区画し、縄文を施文している。この 12 と酷似した土器が前述した郷土遺跡 44 号住居で９と同じ構成の土器と共伴しており、これらの同時性と一括遺物であることが追認できるといえよう。これまで「唐草文系土器」としてまとめられていたが、加曽利Ｅ２式併行の「郷土式」と考えておきたい。

ｄ種とした第 29 図 16・18・第 30 図 34 ～ 36 は体部のみ残存で曽利式ないし「唐草文系土器」と考えられる類である。16 は底部を除く体中部以下がほぼ残されており、その上端部に２次焼成によると思われる変色が認められる。炉体土器として使用されていた可能性が高い。体部文様は２条単位の隆線をＵ字状に連結して下端部を区画し、縦位の綾杉状沈線で充填し、区画間にも斜位条線を施文している。樽形あるいはバケツ形の「唐草文系土器」・「郷土式」によく採用される構図である。18 は小形の深鉢で頸部に２条以上の波状隆線、体部には２条単位隆線による渦巻文・蕨手文を貼付し、間に綾杉状沈線を充填している。34・35 は体上部破片で細隆線と条線による籠目文を施している。36 は底部破片で半截竹管による垂下沈線・刺突文を施しており、「栃倉式」の可能性がある。

ｅ種とした第 29 図 19 ～ 21 は体部のみ残存で縄文地文上に沈線による区画文・意匠文を施す類で、19 は縄文地文上に蕨手文によるＪ字文・垂下文・縦位蛇行文、20 は同沈線によるＨ字文、21 は３条単位の垂下文を施している。19・20 は大木８ｂ的な文様で「栃倉式」、21 は加曽利Ｅ式か「栃倉式」と考えられる。

ｆ種とした第 30 図 22・23 は浅鉢である。22・23 とも四角い口縁で、22 はやや開いて、23 は内傾している。山崎報告によると 22 の口縁部内面は「丹塗り」とされているが、現時点では窪みによく見れば残っているかという程度である。この視点で大胆に赤彩範囲を復元してみた。

ｇ種とした第 29 図 15 はその他に分類した。15 は通常の加曽利Ｅ式土器の口縁より、器壁が薄くかなり屈曲していることから最初は他時期の混入か浅鉢ではないかと考えた。口縁部文様帯は１条隆線で区画され隆線に沿って沈線、区画内には縄文・沈線が施され、２条の沈線が縦位に配されている。深鉢の口縁としては大木８ｂ式がまず考えられるが判断しかねる。東海地方の当該期の土器である中富・神明式（纐纈・髙橋 2008）に、非常によく似た屈曲の角度を持つ土器があり、中信、下伊那の唐草文系土器として紹介されているものの中にも存在するので、ここに分類しておく。

筆者は 20 年ほど前に、本遺跡にほど近い坪井遺跡を発掘調査し、その報告書の中で加曽利Ｅ２式～Ｅ４式[7]の住居跡とその出土遺物を５段階に分類した（富田 2000）。第１段階は「加曽利Ｅ式系土器はほとんど含まず、唐草文（曽利）系土器と栃倉類型で構成される段階」で、時期は加曽利Ｅ２式新段階（唐草文Ⅱ段階、大木８ｂ式古段階～新段階併行）とした。また坪井遺跡の「該期の土器群は全体として浅間山を中心とした環浅間山地域で同様の土器様相を呈すること」を指摘した上で、当時はまだ「郷土式」という用語が使われていなかったが、「特に第１段階とした様相は

御代田町宮平遺跡の資料に酷似している」とし、佐久系土器の典型例とされた鱗状短沈線を充填した土器との共通性を強調した。本遺跡の出土遺物の様相は、坪井遺跡の第1段階としたそれと合致し、その中でも曽利式の影響を色濃く残すことから古相を示す一括資料であると考えられる。今回、「栃倉式」や「串田新式」など越後系土器の影響が窺われる個体、「郷土式」の1期に含まれる可能性の高い個体を再確認できたこと収穫であった。本遺跡出土土器群は信州系・越後系の影響する型式の中の主文様や施文技法など、それぞれ個性的な要素が選択的に混じった様相を呈しており、いわゆる「唐草文系土器」や「栃倉式」と「郷土式」との分離が現段階では曖昧で、不十分な内容となってしまったことは否めない。

末筆ながら本遺跡と出土遺物の日常管理をしていただいており、保存修理事業や再整理調査に快く協力していただいた塩野英介・通子両氏に感謝申し上げたい。

註

（1）本稿では土器型式として定義付けが確立しておらず、曖昧な部分を含む暫定的な呼称として「」を付して記述した。「唐草文系土器」・「栃倉式」も同様である。長野県北佐久郡御代田町宮平遺跡出土土器（大井 1994）の鱗状短沈線を特徴としたものを典型例として「（仮称）佐久系土器」（百瀬 1991・2004）と呼んでいたが、長野県小諸市郷土遺跡出土土器（桜井 2000）をもとに「佐久系土器」を包括して「（仮称）郷土式土器」が提唱された（桜井 2001）。「郷土式」に関しては曽利式・「唐草文系土器」と対比して、「唐草文土器」との分別が課題とされたが（川崎　2001）、綿田弘美氏を中心に型式設定に向けて積極的に取り扱い、研究を深化させている（川崎 2011 ／桜井 2011 ／綿田 2003・2009・2011・2013）。

（2）「唐草文系土器」は中部高地縄文土器集成の際にはじめてその用語を使用している（長崎他 1979）。以来多くの研究者により論考が書かれている（三上 1988 ／櫛原 1999 ／百瀬 2003 ／吉川 2008 など）が定義された土器様相の範囲が広く、千曲川流域に分布する「栃倉式」・「郷土式」の一部も含んでいたようである。長野県中野市千田遺跡で出土した該期土器の中では「樽形深鉢」で「大ぶりの羽状沈線を地文とし、横位羽状に施文される」ものが選択的に認められている（綿田他 2013）。本稿では三上氏の3分類に準拠している。

（3）「栃倉式」は以前は「栃倉類型」と呼称し、いわゆる馬高式の後続段階としての「栃倉Ⅱ式」（藤田他 1961）を指すが、長野県中野市千田遺跡（綿田他 2013）で出土した栃倉Ⅱ式の変化形の一群も含んでいる。また筆者が以前「越後系大木式」としていたものは体部破片での「栃倉式」との峻別は困難と思われる。

（4）曽利式は甲府盆地を中心に分布する土器であるが、加曽利E式と対比するように古くから研究されてきた（武藤 1962 ／藤森・武藤 1964 ／末木 1984・1988 ／山形 1996・1997 ／櫛原 2008 など）。中心分布地は本遺跡とは距離的に遠く離れ、本地域は外縁地域であるがその影響が観察される点は注目される。

（5）「郷土式」の変遷については綿田氏の6期区分（綿田 2008）がこれまでの到達点といえる。この中で1期は埋甕などの単独出土の大形土器が多く、その様相を把握するためには住居出土土器など共伴関係による追認作業が必要になるであろう。「郷土式」については浅間山南麓での検討が進んでいるが、北麓の本地域でも群馬県西域の該期土器様相に触れる中で「唐草文系土器から郷土式土器へ移行する地域は群馬県西部にあり、横壁中村遺跡や坪井遺跡のように、唐草文系土器が主体の地域で行われたと考える」とした（関根 2008）。また「整理段階」とした上で、吾妻川中地域の中期中葉～後葉土器群の様相が検討されている（山口 2013a b・2015）。綿田氏の1～4期と対応した第1段階～第4段階を設定し、第1段階では「「郷土式」の典型例を見なかったが、「栃倉式」の変化形との共伴を背景に、体部に太い短沈線を施す例や曽利Ⅱ式の器形と主幹文様との近似性を基礎にした、体部短沈線施文をする個体を「郷土式」の前駆形態に位置付け」、長野県域との時

期差を考えるべきかを課題とした。こういった姿勢は重要でいつも見習わなければならないと痛感している。八ッ場ダム事業に伴う発掘調査報告書が完了した段階で再考しなければならない課題の一つと認識している。

（６）串田新式は富山県射水郡大門町串田新遺跡出土土器をもとに設定された型式で（湊 1951）、北陸地方に広く分布する当該期土器群である（寺崎 2003・狩野 2008）。口縁部文様に隆帯間刺突文が多様され、本個体との関係が注目される。串田新式に後出する沖ノ原式（江坂・渡辺・薮下 1977）では口縁部の加飾隆帯を特徴とし、その一つに隆線間刺突や「溝底刺突沈線」（佐藤 1999）があり、越後地域で継続的に選択されていた施文技法といえよう。沖ノ原遺跡の立地する新潟県中魚沼郡津南町は本遺跡とは三国山脈を隔てた位置関係にある。

（７）山内清男の３分類（山内 1940）をはじめとして、一連の研究の到達点としての神奈川考古同人会によるシンポジウム、いわゆる神奈川編年（山本・戸田 1980 ／戸田 1981）と埼玉県の中期土器全般を再検討した、いわゆる埼玉編年(谷井 1982)がある。前者は算用数字、後者はローマ数字を用いて表記することで区分しており、口縁部文様帯の有無による時期差の問題で両者にズレが生じている。本稿では前者に準拠した。

参考文献

大井源寿　1994「宮平遺跡の中期縄文土器」『佐久考古学通信』№ 63

江坂輝弥・渡辺　誠・薮下　浩　1977『沖ノ原遺跡発掘調査報告書』津南町教育委員会

川崎　保　2001「第３節　鱗状短沈線文土器の編年上の位置」『駒込遺跡』長野県埋蔵文化財センター

2011「型式論からみた「郷土式」土器」『佐久考古学通信』№ 107

狩野　睦　2008「串田新式・大杉谷式土器」『総覧縄文土器』

櫛原功一　1999「中部地方　中期（唐草文系土器）」『縄文時代』10

2008「曽利式土器」『総覧縄文土器』

纐纈　茂・髙橋健太郎　2008「中富式・神明式土器」『総覧縄文土器』

桜井秀雄　2000「第７節　郷土遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 19』長野県埋蔵文化財センター

2011「「郷土式土器」－その提唱までの経緯－」『佐久考古学通信』№ 107

佐藤雅一　1999「原遺跡の研究（２）　１．魚沼地方の縄文時代中期後半土器群の検討」『新潟考古』第 10 号

末木　健　1984「曽利式土器圏縁辺部の様相」『山梨考古』14 号

1988「曽利式土器様式」『縄文土器大観３中期Ⅱ』小学館

関根慎二　2003「群馬県における加曽利Ｅ式の地域相」『第 16 回縄文セミナー「中期後半の再検討」』

2008「浅間山を廻る縄文土器」『研究紀要 20』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

谷井　彪　1982「縄文中期土器群の再編」『埼玉県埋蔵文化財事業団紀要』埼玉県埋蔵文化財事業団

寺崎祐助　2003「新潟県における串田新式土器」『第 16 回縄文セミナー　中期後半の再検討』

2013「新潟県における中期中葉後半の様相－栃倉式を中心に－」『第 26 回縄文セミナー　縄文中期中葉土器研究の現状と課題』

東部町教育委員会　1992『久保在家遺跡』

戸田哲也　1981「シンポジウム　縄文時代中期後半の諸問題　加曽利Ｅ式土器編年の現状と課題」『神奈川考古』11 号

富田孝彦　2000「２．縄文時代中期後半」『坪井遺跡Ⅱ』長野原町教育委員会

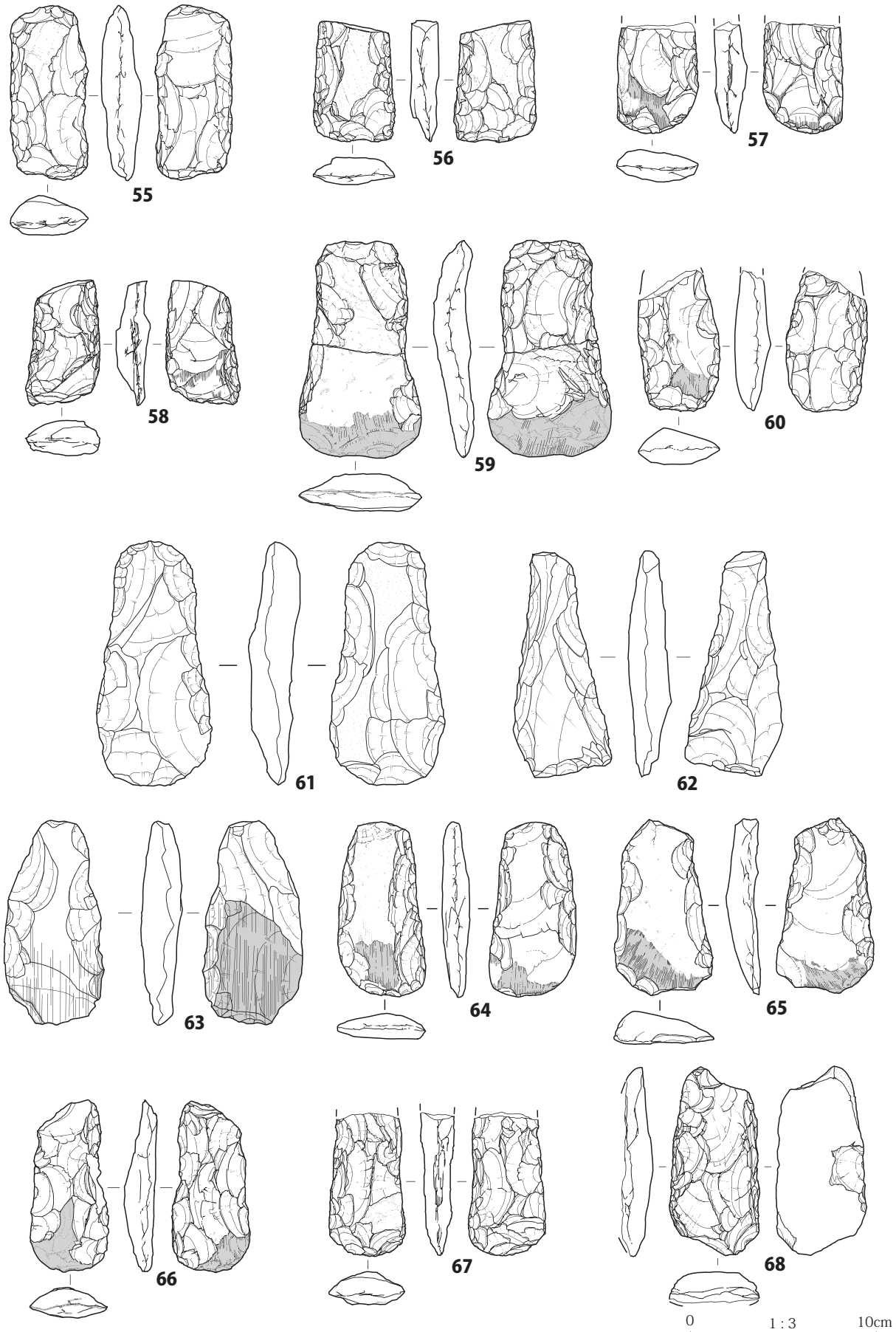
2003「坪井遺跡Ⅴ」『町内遺跡Ⅱ』長野原町教育委員会

長崎元廣他　1979『中部高地縄文土器集成第１集　中期後半の部その１』中部高地縄文土器集成グループ

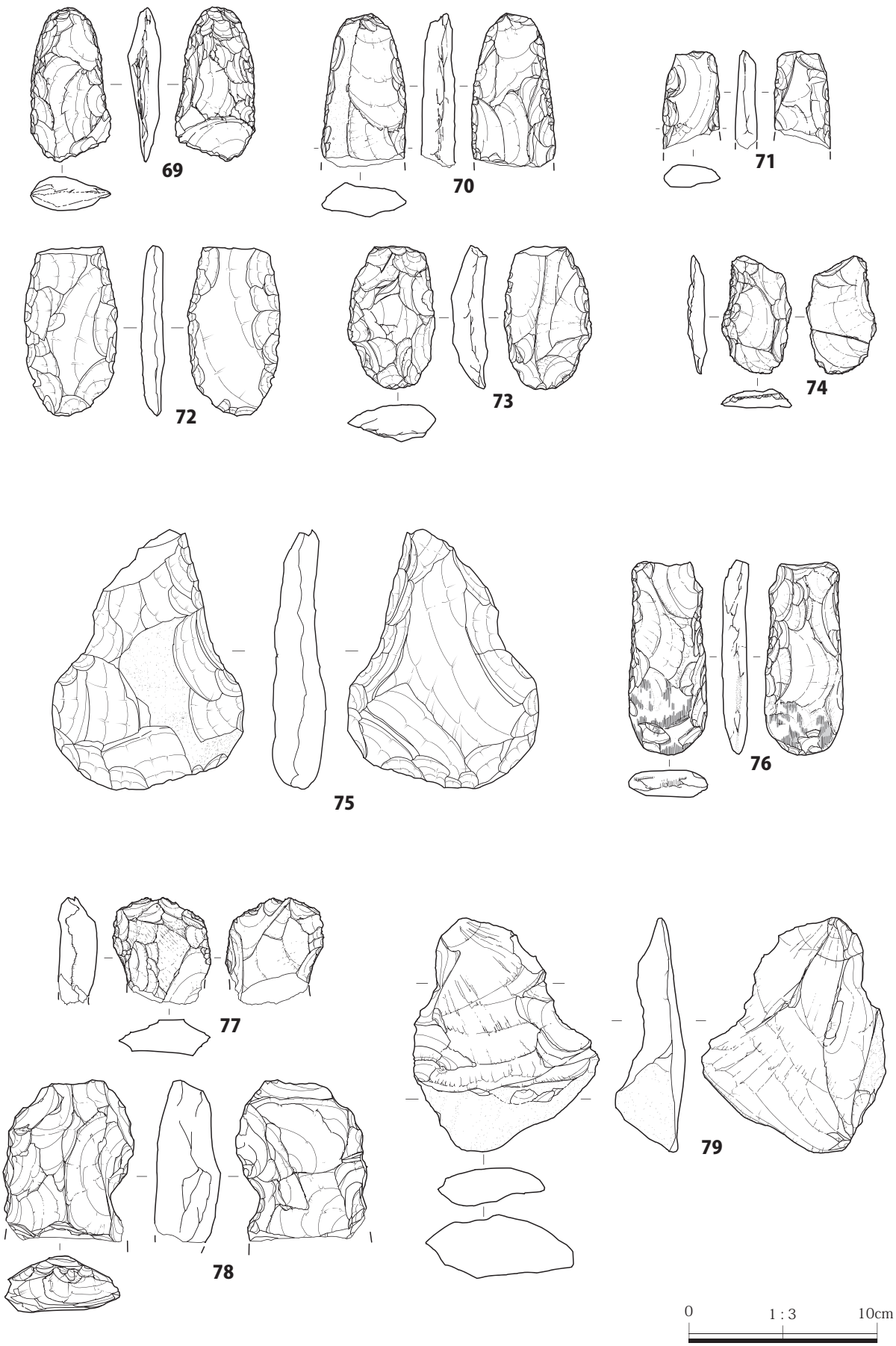
藤田亮策他　1961『栃倉』栃尾市教育委員会

藤森栄一・武藤雄六　1964「信濃境曽利遺跡調査報告」『長野県考古学会誌』創刊号

藤森英二　2007「「佐久系土器」と呼ばれる土器　主にその呼称について」『佐久考古学通信』№98
2011「私が「郷土式」と呼ばなかったわけ」『佐久考古学通信』№107
三上徹也　1988「唐草文系土器様式」『縄文土器大観３中期Ⅱ』小学館
武藤雄六　1962「富士見における中期縄文土器の展開」『信濃考古』３
水沢教子　1996「大木８b式の変容（上）」『長野県の考古学』
1998「第５節　縄文文化の爛熟」『御代田町誌歴史編上』
2003「中期後葉の渦巻文を有する土器とその周辺」『第16回縄文セミナー「中期後半の再検討」』
2013「仙台湾周辺における大木８ｂ式土器の様相」『第26回縄文セミナー　縄文中期中葉土器研究の現状と課題』
湊　晨　1951「富山県内新石器時代遺跡概観」『大鏡』１号
百瀬忠幸　1991「第２節　吹付遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』２　長野県埋蔵文化財センター
2003「中信地域における唐草文系土器の成立と展開」『異貌』21
2004「鱗状短沈線文土器に関する覚書」『異貌』22
山形真理子　1996・1997「曽利式土器の研究（上）・（下）－内的展開と外的交渉の歴史－」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第14・15号
山口逸弘　2013a「群馬県北西部における縄文中期後半の様相」『第26回縄文セミナー　縄文中期中葉土器研究の現状と課題』
2013b「吾妻川中流域における縄文時代中期後葉の土器様相―加曽利ＥⅠ式古段階を中心として－」『研究紀要31』（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
2015「吾妻川中流域における「郷土式」の一様相報告書『長野原一本松遺跡（６）』を中心として」『研究紀要33』（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
山内清男　1940『先史土器図譜』第Ⅸ輯　加曽利Ｅ式　先史考古学会
山本暉久・戸田哲也　1980「神奈川県における縄文時代中期後半土器編年試案　第２版　シンポジウム縄文時代中期後半の諸問題　土器資料集成図集」『神奈川考古』10号
吉川金利　2008「唐草文系土器」『綜覧縄文土器』
綿田弘美　1983「北信地方における縄文中期後葉より後期初頭の土着土器」『須高』17
1988「北信濃における縄文中期後葉土器群の概観」『長野県埋蔵文化財センター紀要』２
1989「長野県東北信地方の中期末葉縄文土器群」『第３回縄文セミナー　縄文中期の諸問題』
1999「千曲川水系における縄文中期末葉土器群－仮称「圧痕隆帯文土器」の再検討」『縄文土器論集－縄文セミナー10周年祈念論文集』縄文セミナーの会
2003「長野県千曲川流域の縄文中期後葉土器群」『第16回縄文セミナー　中期後半の再検討』
2008「郷土式・圧痕隆帯文・大木系土器」『綜覧縄文土器』
2011「郷土式土器の変遷と分布」『佐久考古学通信』№107
2013「長野県北東部における縄文中期後葉土器群　千曲川上・下流域の地域差、唐草文系土器との交流」『第26回縄文セミナー　縄文中期中葉土器研究の現状と課題』
綿田弘美他　2013『中野市千田遺跡　千曲川替佐・柳沢築堤事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書－中野市内その１－』長野県埋蔵文化財センター

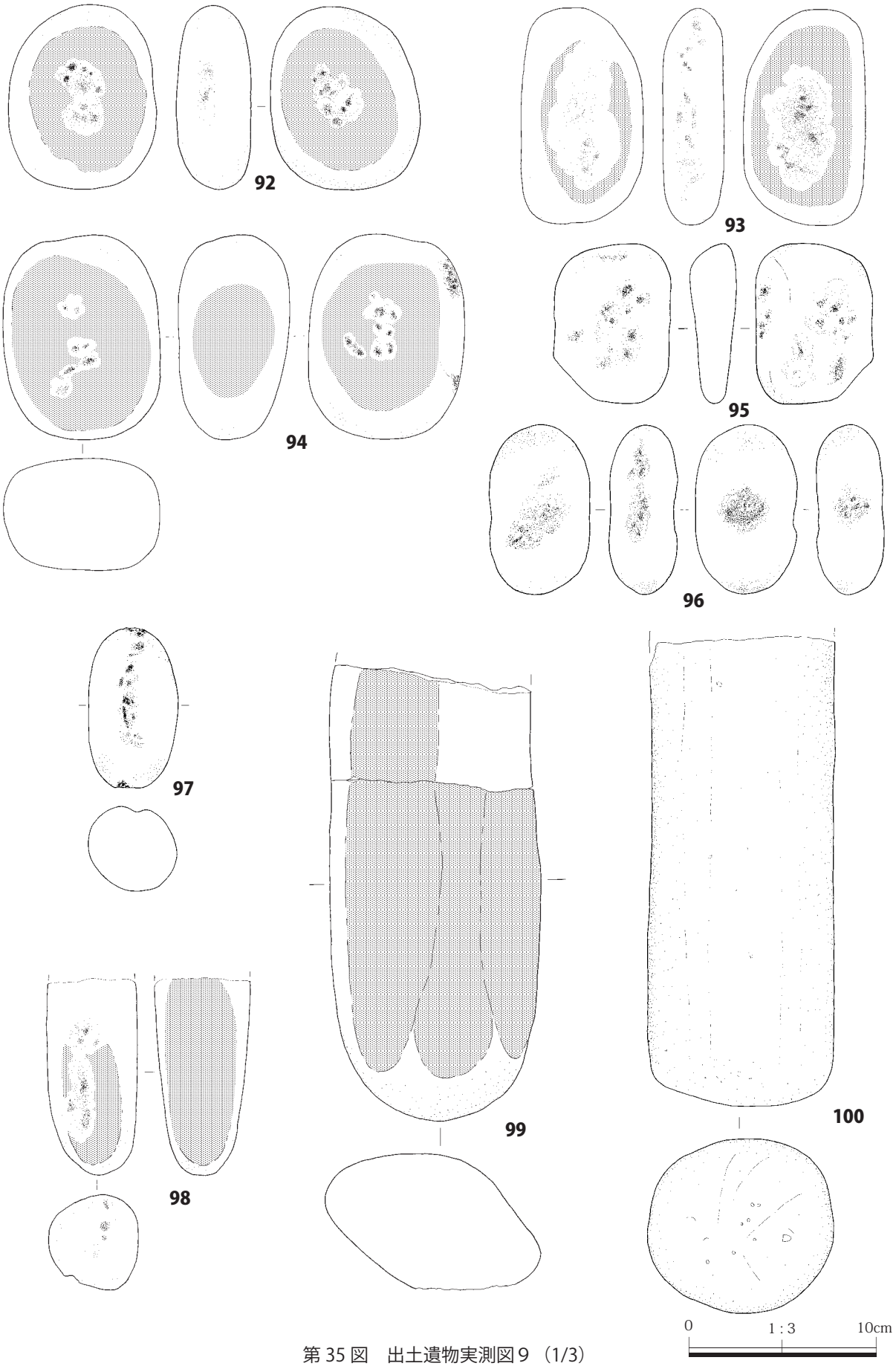


第 32 図　出土遺物実測図 6（1/3）



第 33 図　出土遺物実測図 7 （1/3）

第 34 図　出土遺物実測図８（1/3・1/2）



第 35 図　出土遺物実測図９（1/3）

第７表　出土遺物観察表

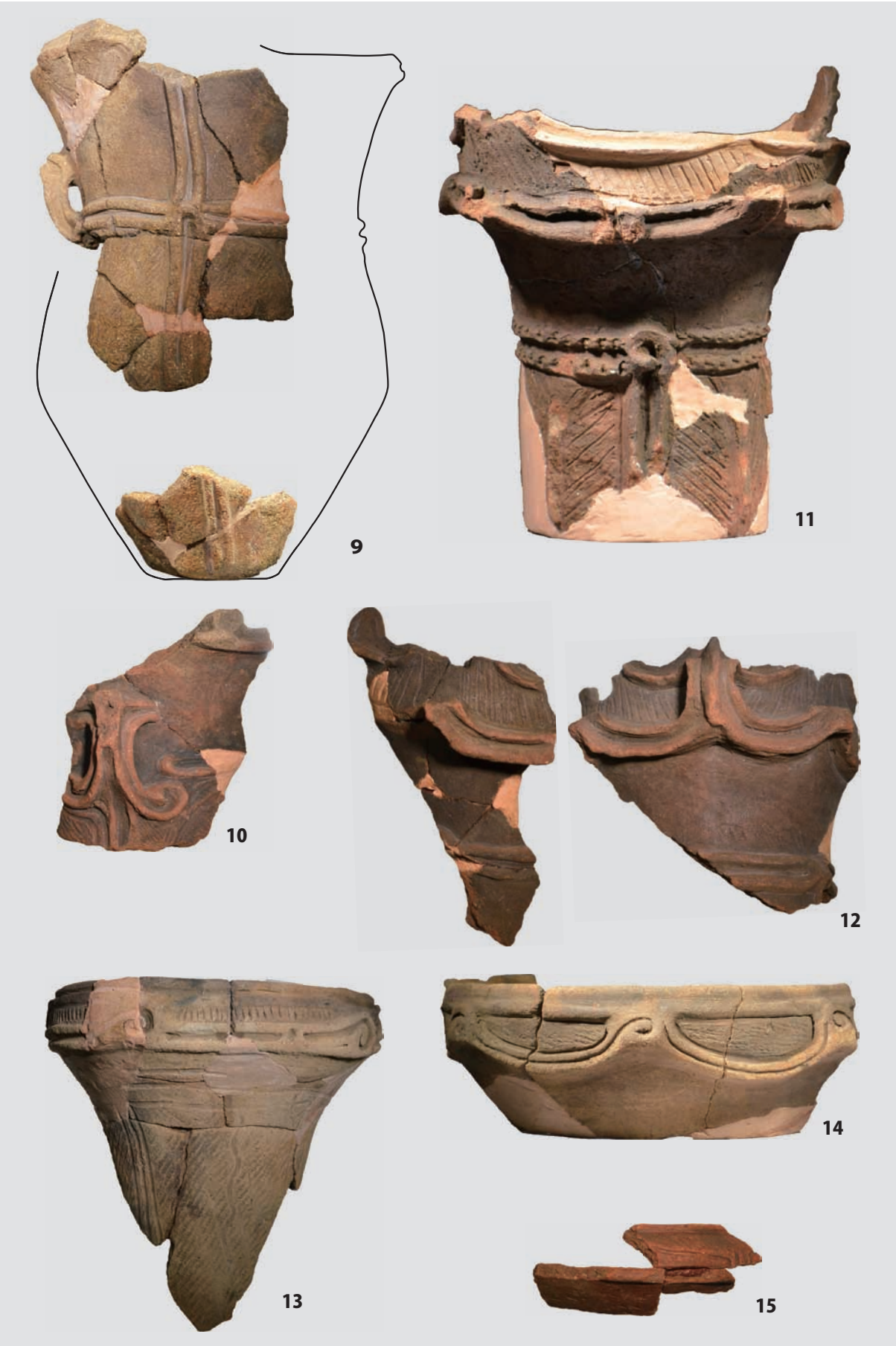
挿図 NO.	図版 NO.	器　　種	法量（器高／口径／底径）（cm）	特　　徴（形態・手法等）	焼　成	胎土・材質等	色調（外面／内面）	備　　考	
27-1	36	縄文土器・深鉢	（10.5）／＜ 15.1 ＞／－	口唇部内面肥厚。蛇行隆帯、隆帯懸垂文、２条単位横位隆帯間刺突列、矢羽状沈線。内面は横位ミガキ。	良好	角閃石・白色粒	暗赤褐／赤褐	口縁部～体部 45％残存	県史№ 8
27-2	36	縄文土器・深鉢	（17.8）／＜ 18.8 ＞／－	口唇部僅かに肥厚。口縁部無文。LR 縄文施文後、ボタン状突起、２条の隆帯（変形した剣先文か）、波状隆帯。内面は横位ミガキ。	良好	角閃石・長石・石英・白色粒	褐／暗褐	45％残存 中期	県史№ 7
27-3	36	縄文土器・深鉢	（16.0）／＜ 11.0 ＞／－	口唇部内部肥厚。横位２条単位隆線、RL 縄文。底部欠損。内面は横位ミガキ。	良好	角閃石・長石・雲母	暗褐／黒褐	90％残存 中期	県史№ 4
27-4	36	縄文土器・深鉢	（36.8）／ 31.6 ／－	口唇部内側肥厚。長楕円文、逆 U 字状隆帯、綾杉状沈線。内面は横位ミガキ。胎土に多量の雲母を含む。	良好	雲母・白色粒	明赤褐／赤褐	50％残存	
27-5	36	縄文土器・深鉢	28.3 ／＜ 21.6 ＞／＜ 10.6 ＞	蕨手文、綾杉状沈線。内面は上部横位ミガキ、体下半部横位ナデ。	良好	長石・雲母・角閃石	明褐／黒褐	口縁部～体部 20％残存	県史№ 5
27-6	36	縄文土器・深鉢	（9.4）／＜ 44.2 ＞／－	沈線、隆帯、渦巻文、腕骨文、綾杉状沈線。内面は横位斜位ミガキ。	良好	白色粒・石英・角閃石・雲母	にぶい赤褐／黒褐	口縁部～体部 70％残存	県史№ 11
27-7	36	縄文土器・深鉢	（23.3）／＜ 28.0 ＞／－	波状口縁。２単位の連結橋状把手か。口唇部内屈。口唇部沈線および２条の隆帯間・渦巻状に刺突列、斜行沈線充填。内面は横位ミガキ。	良好	白色粒・長石・角閃石	褐	口縁部～体部 40％残存 中期	県史№ 24
27-8	36	縄文土器・深鉢	（7.7）／＜ 7.4 ＞／－	口縁部に２条の横位隆帯。LR 縄文を施文後、２条単位並行沈線。内面は横位ミガキ。	良好	角閃石	極暗赤褐／にぶい赤褐	口縁部～体部 30％残存 中期	
28-9	37	縄文土器・深鉢	（39.0）／ 26.1 ／ 8.5	波状口縁。口唇部肥厚、弧状の文様。橋状把手。RL 縄文。十字状区画文。沈線文。	良好	白色粒・角閃石	明赤褐／黒褐	40％残存	
28-10	37	縄文土器・深鉢	（17.4）／＜ 28.6 ＞／－	橋状把手。蕨手文？体部は LR 縄文施文後、沈線区画。内面は横位ミガキ。	良好	雲母・長石・白色粒	にぶい赤褐／褐	口縁部～頸部 20％残存	
28-11	37	縄文土器・深鉢	（22.8）／＜ 19.5 ＞／－	橋状突起。渦巻文。半切竹簡による有刻隆帯、蕨手文、斜位沈線。内面は横位ミガキ。	良好	雲母・石英・角閃石・白色粒	暗褐／にぶい赤褐	口縁部～体部 70％残存	県史№ 6
28-12	37	縄文土器・深鉢	（20.7）／（26.8）／－	橋状把手。区画文、LR 縄文。内面は上部は横位ミガキ、下部は横位ナデ。	良好	角閃石・長石・白色粒・雲母	にぶい赤褐／褐	口縁部 40％残存	県史№ 25
29-13	37	縄文土器・深鉢	（23.7）／ 23.2 ／－	楕円文、横位沈線蕨手文。不規則に２～３条の横位沈線。RL 縄文縦位回転施文後、３条単位縦位沈線、蛇行懸垂文。内面は口縁部付近は横位ミガキ、体部は縦位斜位ミガキ。	良好	白色粒・石英・角閃石	浅黄橙／にぶい黄橙	口縁部 90％、体部 30％残存	県史№ 3・19
29-14	37	縄文土器・深鉢	（11.5）／＜ 33.6 ＞／－	渦巻文、楕円文、RL 縄文。内面は横位ミガキ。	良好	黒色粒・白色粒・角閃石	褐灰／にぶい黄橙	口縁部 55％残存	県史№ 2
29-15	37	縄文土器・深鉢	（5.7）／＜ 10.8 ＞／－	口縁部文様帯は１条の隆帯で区画。LR 縄文、沈線文。内面は、内傾部は横位ナデ、以下外傾部は横位ミガキ後斜位ミガキ。	良好	白色粒・角閃石・小礫	明赤褐／赤褐	口縁部～頸部 20％残存	
29-16	38	縄文土器・深鉢	（31.1）／－／－	U 字文、渦巻文、綾杉状沈線、斜位沈線。内面は横位ミガキ。	良好	砂粒・石英・雲母・角閃石	にぶい赤褐／にぶい橙	体部～底部付近ほぼ完存 炉付近から出土との記述が県史にあり、炉体土器か。	県史№ 10
29-17	38	縄文土器・深鉢	（34.2）／－／ 10.8	腕骨文。渦巻文。U 字文。隆帯断面は三角形、台形、弧状の三種類。縄文は LR と RL の両方が存在。底部網代痕不明瞭。内面は横位ミガキ。	良好	白色粒・石英・角閃石	にぶい橙／にぶい褐	頸部～底部 90％残存	県史№ 9
29-18	38	縄文土器・深鉢	（8.1）／－／－	蛇行隆帯、蕨手文、渦巻文。内面は斜位ミガキ。	良好	角閃石・雲母・白色粒	にぶい赤褐／にぶい黄褐	体下半部 30％残存	県史№ 23
29-19	38	縄文土器・深鉢	（11.4）／－／－	LR 縄文、J 字文、蛇行沈線。内面は横位調整後縦位ミガキ。	良好	角閃石・白色粒	赤褐／黒褐	体下半部 30％残存	県史№ 18
29-20	38	縄文土器・深鉢	（11.7）／－／－	RL 縄文施文後に沈線文。内面は横位調整後、縦位ミガキ。	良好	角閃石・雲母	橙／黒褐	体下半部 30％残存	県史№ 17
29-21	38	縄文土器・深鉢	（8.4）／－／＜ 7.0 ＞	RL 縄文施文後に３条単位沈線。内面は横位ミガキ。底部無紋。	良好	白色粒・角閃石	赤褐／褐灰	体下半部～底部 20％残存	県史№ 20
30-22	38	縄文土器・浅鉢	（10.5）／＜ 49.8 ＞／－	口唇部肥厚。内外面とも横位ミガキ。内外面の凹部などに僅かに赤彩が残る。器面の状況を最大限考慮して図示した。	良好	白色粒・角閃石・石英	にぶい赤褐	口縁部 80％残存	県史№ 12
30-23	38	縄文土器・浅鉢	（9.4）／＜ 44.0 ＞／－	口唇部肥厚。外面は横位ミガキ。凹部などに僅かに赤彩の痕跡を残残る。器面の状況を最大限考慮して図示した。外面は横位ナデ後ミガキ。	良好	白色粒・長石	褐／にぶい黄褐	口縁部 20％残存	
30-24	38	縄文土器・深鉢	（8.3）／－／－	口唇部やや肥厚。蛇行横位隆帯。	良好	赤色粒・白色粒	暗褐／褐	破片資料（口縁部）	
30-25	38	縄文土器・深鉢	（8.2）／－／－	口唇部肥厚。内外面とも横位ミガキ。	良好	角閃石・砂粒・雲母	褐／灰褐	破片資料（口縁部）	

挿図 NO.	図版 NO.	器　　種	法量（器高／口径／底径）（cm）	特　　徴（形態・手法等）	焼　成	胎土・材質等	色調（外面／内面）	備　　考	
30-26	38	縄文土器・鉢	（4.7）／－／－	内外面とも横位ミガキ。	良好	砂・赤色粒	黒褐／暗褐	破片資料（口縁部）	
30-27	38	縄文土器・深鉢	（9.6）／－／－	波状口縁。口唇部肥厚、２条単位隆帯。突起状装飾。内面は横位ナデ。	良好	角閃石・雲母・長石	にぶい褐／黒褐	破片資料（口縁部）	
30-28	39	縄文土器・深鉢	（10.3）／－／－	口唇部肥厚。刺突列、剣先状文。内面は横位ミガキ。	良好	雲母・角閃石	灰褐／明赤褐	破片資料（口縁部）	県史No. 21
30-29	39	縄文土器・深鉢	（4.9）／－／－	口縁部横位有刻隆帯。内面は横位ミガキ。雲母を多量に含む。	良好	雲母・角閃石・赤色粒	灰褐	破片資料（口縁部）	
30-30	39	縄文土器・深鉢	（4.0）／－／－	横位ミガキ。内面は口縁部横位隆帯、横位ミガキ。	良好	角閃石	明褐／にぶい褐	破片資料（口縁部）	
30-31	39	縄文土器・深鉢	（13.9）／－／－	隆線。有刻横位隆帯。区画文。斜行沈線。	良好	雲母・角閃石・赤色粒	褐／にぶい褐	破片資料（口縁部～体部）	
30-32	39	縄文土器・深鉢	（7.1）／－／－	口唇部肥厚。RL 縄文施文後沈線区画。隆帯。内面は横位ミガキ。	良好	角閃石	黒褐／明黄褐	破片資料（口縁部）	
30-33	39	縄文土器・深鉢	（5.7）／－／－	口唇部横位沈線。RL 縄文施文後に沈線区画。内面は横位ミガキ。	良好	角閃石・砂粒	暗赤褐／にぶい黄褐	破片資料（口縁部）	
30-34	39	縄文土器・深鉢	（9.5）／－／－	籠目文、剣先状文。内面は横位ミガキ。	良好	角閃石・白色粒	橙／明赤褐	破片資料（体部）	県史No. 22
30-35	39	縄文土器・深鉢	（6.9）／－／－	籠目文、懸垂文。内面は横位ミガキ。	良好	白色粒・角閃石	黒褐／にぶい赤褐	破片資料（体部）	県史No. 26
30-36	39	縄文土器・深鉢	（6.4）／－／－	垂下沈線、刺突文。内面は斜位・横位ミガキ。	良好	角閃石・白色粒	明赤褐／黒褐	破片資料（底部直上体部）	県史No. 27
31-37	39	縄文土器・深鉢	（15.0）／＜ 14.6 ＞／－	RL 縄文。内面は横位ミガキ。口縁以下 5cmほどのところに φ 6mmの補修孔。	良好	繊維・角閃石・小礫	黄褐／にぶい黄橙	口縁部～体部 30％残存 前期	県史No. 1
31-38	38	縄文土器・深鉢	（9.4）／－／－	菱形羽状縄文。内面は横位ナデ。	良好	小礫・繊維	灰褐	破片資料（体部）	県史No. 14
31-39	39	縄文土器・深鉢	（5.8）／－／－	横位回転 RL 縄文。内面は横位ナデ。	良好	繊維・石英・角閃石・白色粒	灰褐／にぶい褐	破片資料（体部）	県史No. 13
31-40	39	縄文土器・深鉢	（3.7）／－／－	LR 付加縄文。内面は横位ミガキ。	良好	石英・白色粒・繊維	橙／灰褐	破片資料（体部）	
31-41	39	縄文土器・深鉢	（5.3）／－／－	羽状縄文。内面は横位ナデ。	良好	小礫・白色粒・繊維	褐灰／灰黄褐	破片資料（体部）	
31-42	39	縄文土器・深鉢	（4.9）／－／－	RL の付加縄文。内面は横位ミガキ。	良好	白色粒・石英・繊維	にぶい褐／褐灰	破片資料（体部）	
31-43	39	縄文土器・深鉢	（6.3）／－／－	RL 縄文。内面はナデ。内面下部に炭化痕。	良好	白色粒・砂粒・繊維	灰褐／灰黄褐	破片資料（体部）	
31-44	39	縄文土器・深鉢	（4.2）／－／－	外面は RL 付加縄文。内面は横位ミガキ。	良好	白色粒・石英・角閃石・繊維	にぶい赤褐／褐灰	破片資料（体部）	
31-45	39	縄文土器・深鉢	（10.4）／＜ 15.6 ＞／－	LR 縄文。内面は横位ミガキ。	良好	白色粒・角閃石・長石	褐／暗褐	口縁部～体部 40％残存	
31-46	39	縄文土器・深鉢	（5.4）／＜ 8.6 ＞／－	RL 縄文。内面は横位ミガキ。	良好	白色粒・小礫	にぶい黄褐／暗褐	口縁部 20％残存	
31-47	39	縄文土器・深鉢	（6.9）／－／－	斜位条線、波状文、押引文、円形刺突文。内面は斜位ミガキ。	良好	角閃石・石英	にぶい黄橙／灰褐	破片資料（体部）	県史No. 15
31-48	39	縄文土器・深鉢	（5.8）／－／－	口唇部斜刻文。外面に沈線文。内面は横位ミガキ。	良好	雲母・白色粒	黒褐／にぶい黄橙	破片資料（口縁部）	県史No. 16
31-49	39	縄文土器・深鉢	（2.6）／－／－	蛇行隆帯、沈線文。内面は横位ミガキ。	良好	角閃石・白色粒・長石	にぶい赤褐／灰褐	破片資料（口縁部）	
31-50	39	縄文土器・深鉢	（4.2）／－／＜ 10.6 ＞	内外面ともナデ。底面は 4-4-2 の網代圧痕。	良好	白色粒・小礫	黄橙／褐灰	底部 60％残存	県史No. 30
31-51	39	縄文土器・深鉢	（9.0）／－／－	波状口縁。刺突列、渦巻文。内面は２条単位横位沈線、横位ミガキ調整。	良好	角閃石・雲母	黒褐／橙極暗	破片資料（口縁部）	県史No. 28
31-52	40	縄文土器・深鉢	（11.0）／－／－	口縁部２条単位横位隆帯。沈線区画文。RL 縄文。内面は横位ミガキ。	良好	角閃石・赤色粒・白色粒・雲母	赤褐／褐	破片資料（口縁部～体部） 後期	
31-53	40	縄文土器・深鉢	（8.9）／－／－	口唇部内屈、円形刺突文。無紋。内面は横位ミガキ後縦位磨き。横位並行沈線。	良好	角閃石・長石	黒褐	破片資料（口縁部～体部） 後期	県史No. 29

挿図NO.	図版NO.	器　　種	法量（器高／口径／底径）(cm)	特　　徴（形態・手法等）	焼　成	胎土・材質等	色調（外面／内面）	備　　考
31-54	40	土師器・坏	＜5.6＞／＜14.0＞／6.0	右回転ロクロ成型。外面はロクロナデ。内面はミガキ。内面黒色処理。底部回転糸切り。	酸化焔・良好	赤色粒・白色粒	灰黄褐／黒	20％残存
32-55	40	打製石斧類・打製石斧	長9.4／幅4.2／厚2.2	重さ104g。平形。刃部先端部縁、階段状剥離。	―	黒色頁岩	―	完存
32-56	40	打製石斧類・打製石斧	長（6.5）／幅4.4／厚1.5	重さ59g。平形。	―	頁岩	―	70％残存
32-57	40	打製石斧類・打製石斧	長（6.0）／幅4.4／厚1.8	重さ59g。平形。刃部擦痕。直交する線条痕。側面部に素材の扁平礫自然面残存。	―	黒色頁岩	―	70％残存
32-58	40	打製石斧類・打製石斧	長（6.7）／幅4.0／厚1.9	重さ54g。平形。裏側刃部付近に刃部ほぼ直交擦痕様使用痕。	―	安山岩	―	80％残存
32-59	40	打製石斧類・打製石斧	長11.7／幅6.6／厚2.2	重さ169g。平バチ形。表裏にやや斜めと交差する線条痕。	―	安山岩	―	完存
32-60	40	打製石斧類・打製石斧	長（7.7）／幅4.4／厚2.0	重さ75g。平バチ形。	―	黒色頁岩	―	80％残存
32-61	40	打製石斧類・打製石斧	長13.0／幅6.2／厚2.8	重さ196g。平バチ形。		安山岩	―	完存　県史№31
32-62	40	打製石斧類・打製石斧	長12.1／幅5.2／厚2.3	重さ122g。平バチ形。	―	黒色頁岩	―	完存　県史№32
32-63	40	打製石斧類・打製石斧	長10.9／幅5.4／厚2.2	重さ450g。平バチ形。刃部使用痕。	―	安山岩	―	完存　県史№34
32-64	40	打製石斧類・打製石斧	長9.4／幅4.7／厚1.5	重さ85g。平バチ形。刃部に光沢及び、刃部直交線条痕。	―	安山岩	―	完存
32-65	40	打製石斧類・打製石斧	長9.4／幅5.3／厚1.8	重さ93g。平バチ形。刃部に直交又は斜位線条痕、使用欠損、摩耗あり。	―	安山岩	―	完存
32-66	40	打製石斧類・打製石斧	長9.2／幅4.2／厚1.7	重さ70g。平バチ形。刃部先端周縁光沢痕。	―	黒色頁岩	―	ほぼ完存
32-67	40	打製石斧類・打製石斧	長（7.7）／幅4.1／厚1.8	重さ75g。平バチ形。基部欠損。	―	黒色頁岩	―	80％残存
32-68	40	打製石斧類・打製石斧	長10.2／幅4.8／厚1.7	重さ94g。平バチ形。片面自然劣化剥落。	―	安山岩	―	60％残存
33-69	40	打製石斧類・打製石斧	長8.2／幅4.3／厚1.8	重さ65g。平バチ形。	―	安山岩	―	完存
33-70	41	打製石斧類・打製石斧	長（8.2）／幅4.5／厚1.8	重さ79g。平バチ形。刃部欠損。	―	安山岩	―	70％残存
32-71	41	打製石斧類・打製石斧	長（5.2）／幅3.0／厚1.2	重さ22g。平バチ形。刃部欠損。	―	デイサイト	―	70％残存
33-72	41	打製石斧類・打製石斧	長9.0／幅4.9／厚1.3	重さ66g。平バチ形。	―	黒色頁岩	―	80％残存　県史№33
33-73	41	打製石斧類・打製石斧	長7.6／幅4.7／厚2.0	重さ72g。平バチ形。被熱全体に受け、変色変質。	―	ホルンフェルス	―	ほぼ完存
33-74	41	打製石斧類・打製石斧か	長6.3／幅3.7／厚1.0	重さ19g。平バチ形。	―	黒色頁岩	―	完存
33-75	41	打製石斧類・打製石斧	長14.8／幅10.9／厚3.1	重さ450g。平大バチ形。	―	安山岩	―	完存　県史№37
33-76	41	打製石斧類・打製石斧	長10.3／幅4.2／厚1.5	重さ94g。平細形。表裏とも刃部先端に直交する微細線条痕及び使用摩耗光沢痕＋階段状剥離。	―	安山岩	―	ほぼ完存
33-77	41	打製石斧類・打製石斧	長6.6／幅4.2／厚1.2	重さ66g。分銅形。	―	安山岩	―	50％残存　基部

挿図NO.	図版NO.	器　　種	法量（器高／口径／底径）（cm）	特　　徴（形態・手法等）	焼　成	胎土・材質等	色調（外面／内面）	備　　考
33-78	41	打製石斧類・打斧未成品	長（8.6）／幅 7.0 ／厚 3.4	重さ 262g。平分銅形。失敗品。	―	黒色頁岩	―	70％残存
33-79	41	打製石斧類・打斧未成品か	長 12.5 ／幅 9.9 ／厚 3.8	重さ 312g。凸形。	―	安山岩	―	完存
34-80	41	打製石斧類・打斧未成品か	長 8.5 ／幅 6.9 ／厚 2.2	重さ 124g。凸型か。	―	安山岩	―	完存
34-81	41	打製石斧類・削器Ａ	長 6.6 ／幅 4.2 ／厚 1.1	重さ 27g。片刃	―	黒色頁岩	―	完存
34-82	41	打製石斧類・削器Ａ	長 7.1 ／幅 3.5 ／厚 0.9	重さ 18.1g。両刃	―	黒色頁岩	―	完存　県史№ 35
34-83	41	打製石斧類・削器Ａ	長 11.0 ／幅 5.5 ／厚 0.9	重さ 35g。錯向。刃が付けられているものの、あまり加工されていない。	―	黒色頁岩	―	完存
34-84	41	その他・磨製石斧か	長 7.3 ／幅 3.4 ／厚 1.1	重さ 42g。	―	ホルンフェルス	―	完存
34-85	41	その他・磨製石斧	長 6.6 ／幅 5.9 ／厚 2.3	重さ 156g。	―	蛇紋岩	―	50％残存
34-86	41	剥片石器類・石匙	長 4.9 ／幅 7.2 ／厚 1.1	重さ 30.6g。横型	―	チャート	―	完存　県史№ 36
34-87	42	剥片石器類・二次加工のある剥片	長 2.6 ／幅 2.3 ／厚 1.0	重さ 4.7g。	―	黒耀石	―	完存
34-88	42	剥片石器類・二次加工のある剥片	長 3.4 ／幅 1.9 ／厚 0.8	重さ 4.8g。	―	黒耀石	―	完存
34-89	42	剥片石器類・二次加工のある剥片	長 2.1 ／幅 2.2 ／厚 0.7	重さ 2.2g。	―	黒耀石	―	完存
34-90	42	剥片石器類・二次加工のある剥片	長 3.4 ／幅 2.5 ／厚 1.1	重さ 4.8g。	―	黒耀石	―	完存
34-91	42	剥片石器類・二次加工のある剥片	長 4.8 ／幅 2.3 ／厚 1.8	重さ 13.7g	―	黒耀石	―	完存
35-92	42	礫石器類・磨石＋凹石＋敲石	長 9.8 ／幅 7.9 ／厚 4.0	重さ 456g。平円形。	―	安山岩	―	完存　県史№ 39
35-93	42	礫石器類・磨石＋凹石＋敲石	長 11.5 ／幅 6.5 ／厚 3.3	重さ 440g。平形。	―	安山岩	―	完存　県史№ 41
35-94	42	礫石器類・磨石＋凹石＋敲石	長 10.9 ／幅 8.3 ／厚 5.9	重さ 855g。平形。	―	安山岩	―	完存　県史№ 42
35-95	42	礫石器類・凹石＋敲石	長 8.5 ／幅 6.3 ／厚 2.5	重さ 185g。平形。	―	安山岩	―	完存
35-96	42	礫石器類・凹石＋敲石	長 9.0 ／幅 5.4 ／厚 3.6	重さ 200g。平形。	―	安山岩	―	完存　県史№ 40
35-97	42	礫石器類・敲石	長 8.5 ／幅 4.7 ／厚 4.5	重さ 263g。長形。	―	安山岩	―	完存　県史№ 38
35-98	42	礫石器類・磨石＋敲石	長（10.5）／幅 4.8 ／厚 5.1	重さ 418g。長形。	―	安山岩	―	80％残存
35-99	42	礫石器類・石皿か	長（33.9）／幅 15.2 ／厚 9.7	重さ 7,000g。長形。面取りして磨られているものの、丁寧な成型は行われていない。二つに割れていて、割れた片方には磨面が続いていない面がある。	―	安山岩	―	残存率不明、片端部欠損
35-100	42	その他・石棒	長（29.8）／幅 11.9 ／厚 11.0	重さ 7,250g。周囲を面取りし、磨きの調整をしている。	―	安山岩	―	残存率不明、上部欠損　県史№ 43

第 36 図　出土遺物 1



第 37 図　出土遺物 2

第 38 図　出土遺物 3

第 39 図　出土遺物 4

第 40 図　出土遺物 5

第 41 図　出土遺物 6

第 42 図　出土遺物 7

第４章　勘場木石器時代住居跡関連文献集成

第１節　概　要

勘場木石器時代住居跡は発見以来、概報はされているものの本報告はされていない。ここではこれまで本住居跡に関連する文献を集成した。新聞記事も含めると13点を確認することができた（第８表）。そのうち４点を再収録する。文献は全文を掲載することを旨とするが、山崎氏報告の引用は一部省略した。さらに旧字体は新字、漢数字は西洋数字に置き換えて、読点、改行を施し、読みにくい漢字は平仮名に直し、明らかな誤植は訂正し、読者の便宜を図った。またキャプションが無いものはこちらで便宜上作成した。

第８表　勘場木石器時代住居跡関連文献一覧

№	文　献	備　考
1	山崎義男　1954『群馬県長野原町勘場木　石器時代竪穴住居阯について』	本章第２節
2	県立長野原高校新聞部　1955「郷土史跡めぐり（一）勘場木石器時代住居跡」『長野原分校新聞』創刊号	第15図
3	塩野新一　1972『群馬県吾妻郡長野原町（群馬県史跡指定）勘場木遺跡』	本章第３節
4	長野原町　1976「勘場木遺跡」『長野原町誌』上巻	山崎概報引用
5	相川徹子　1977「浅間火山博物館と吾妻川沿岸の遺跡について」『関東の史跡と文化財』第369号　関東史跡会	
6	桜岡正信　1988「勘場木遺跡」『群馬県史』資料編１	本章第４節
7	長野原町教育委員会　1989「勘場木石器時代住居跡」『長野原町の文化財』	
8	上毛新聞記事「外からでも観察OK 長野原の勘場木住居跡保存用の新覆屋が完成」　平成３年４月14日	
9	池田政志　1999「勘場木石器時代住居跡」『群馬県遺跡大辞典』上毛新聞社	
10	富田孝彦　2001「勘場木石器時代住居跡」『群馬県の史跡（原始古代編）』群馬県教育委員会	本章第５節
11	長野原町公民館大津分館　2004「石器時代の住居跡」『写真集「大津のあゆみ」』	
12	上毛新聞社・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団編　2005『群馬の遺跡・２　縄文時代』	施設紹介
13	奈良文化財研究所文化遺産部遺跡整備研究室編　2013 「勘場木石器時代住居跡」『遺構露出展示に関する調査研究報告書』	

第２節　『群馬県長野原町勘場木石器時代竪穴住居阯について』

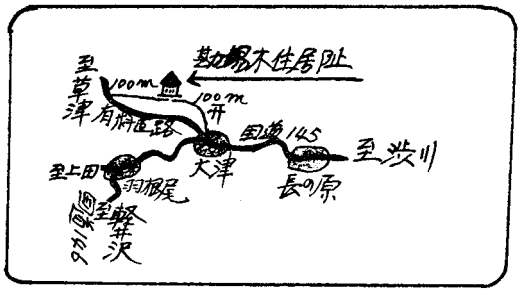
群馬県文化財専門委員
山崎義男

１　はしがき

本遺跡は昭和28年暮、吾妻郡長野原町大字大津勘場木438番地の畑地を田圃になす為に、土地所有者塩野要造氏と、その子息新一氏が開墾している際、遇然一完形土器を発見したのに興味を覚え、引継いで発堀を続けている内、偶々住居趾の西南部を発見したので、なお続行して本年（昭和29年）１月、竪穴を完全に露出せしめたのである。そこで同町教育長桜井東介氏が来橋して、県会図書室長萩原進氏にその旨報告した。 萩原氏からその報告は私に伝えられたので、早速１月23日、24日両日現場に赴き、発見者塩野氏、桜井氏両家の御厚意に依り大雪の内を容易に遺蹟遺物を調査する事が出来、不完全ながらこの報告文を書くことが出来たのである。

2　所在地

府県道中之条上田線は、吾妻川の左岸沿いに走る吾妻郡の幹線であるが、長野原町大津にて二又に分岐し、本線は鹿沢方面に向い、右する分線は約10㎞で草津温泉に達するが、この道路に沿って右折するとすぐの部落が字勘場木である。本遺跡は県道から北方約300ｍばかり右に入った畑地にあり、南西部は限界が開けていて、東南部に小渓俗称大津用水が流下し（現在の水路は人口に依ったものだが、全然新らしい水路でない事は竪穴発掘に際しこの附近の地下から多数の川砂利が発見されている点で推測できる）東北部は山に囲まれていて、日当りのよい突出台地をなしている。標高は750ｍ程度と思考される。５万分の地図で位置を求めるなら、小字名勘場木と記載されているヶ所の「場」という字の附近に一軒屋がある。それが塩野氏の宅で、その東部畑地に竪穴が発見されたのである。

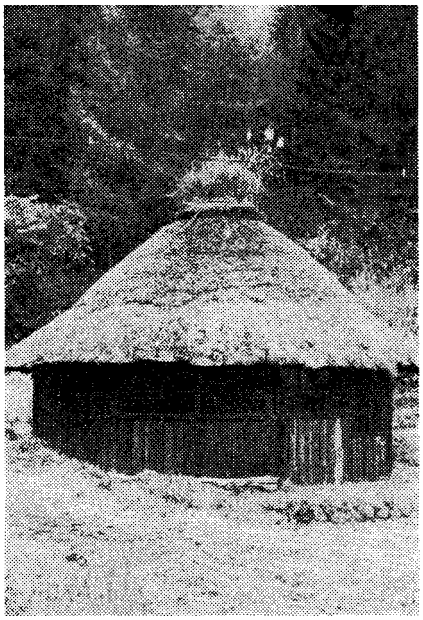


第43図　位置図

3　住居址

住居趾の西南部は、図示の通り遇然発堀に際し、周壁は取崩されて不明であるが、底面のロームの堅結状態からしてその境界は容易に判断できるのであるが、住居趾の平面は平均約４ｍ50㎝の近似円形をなしている。表土は約50㎝程度の黒色土であり、それに続いて黄色粘土層となり、その層に堀り込んで住居趾が出来ている。注意されるのは北から南に向って図示A~A断面の如く約３度の勾配で底面が傾斜している点と北部周壁は床面から約40㎝に近く深堀されているが、南部に向うに従いその深さを減じている点であり、これはロームの自然勾配上に底面を定めて、北部のみ深くローム層を堀り下げ、南部は勾配の変化に従い殆んど無壁となした如く築造されたものの如く、所謂片堀り型の竪穴式住居趾であって、こうした例は神奈川県横浜市青ヶ台遺跡、本県では多野郡藤岡町光徳寺裏遺跡等で、如実にその類似を知るのである。

周湟は東北部のみに発見されたが、底面の高所から端を発し、南部の最低部でその巾と深さを増している事は、排水の理に従っている如く推思される。炉趾として確認出来るのは図面中央記号14であるが、長径約70㎝、短径約60㎝の近似矩形をなし灰および木炭を発見した。近接13号は長径約50㎝、短径約40㎝の楕円形をなし、これも灰を伴ったのであるが、近接して二ヶの炉の必要も考えられないし、底面及周壁の状態からして重複した竪穴住居址とも考えられないので、此の場合炉趾として断定出来難く一応疑問とした


第44図　住居址

い。15号は長径1ｍ30㎝，短径1ｍ10㎝の楕円形をした凹部であるが、こうした凹部はこの種堅穴住居址には往々見受けられるものの如く、強いて推測するなら所謂貯蔵所とも考えられよう。

柱穴は12ヶあり、その形状は図示表の如くである。その内記号1、2、3、7、10、12の6孔を主柱と推定すると大体等間隔であり、その各孔の規模からしても妥当性が多い。

尚出入口は底面のこう配からしても、小柱の存在からして特にその部分の構造が複雑であったろうと想像される点より南面即ち柱孔3と7の間ではあるまいか。

4　遺　物

石　器

住居趾から安山岩製石棒断片長30㎝、径11㎝のものが出土している。その他は短冊形に類する長10㎝、巾3～4㎝程度の打斧が数個出土しているが、石質は主として砂岩で、又安山岩製のものも見受けられた。黒曜石破片が3、4ヶ出土しているが、それによる完形品はなかった。

土　器

完形しているのは唯1ヶで高16㎝、口径12㎝の甕で、平底径7㎝、頸と胴との境界部径8㎝、器厚5㎜、黒褐色を呈し口頸部は無文、胴と頸との接合する部分に2条の隆線が取巻き、肩部から以下は荒目の右撚左傾縄文が一面に附されている。小形甕でその特徴を把握出来難いが本ヶ所の土器片から推定して 加曽利E2式類似と思考される。

土器片

土器片を大別して南関東地方の編年を標準とすれば、加曽利E式の新、旧2式、堀の内式の新、旧2式に区分される如く考察される。次にそれぞれ各形式の土器片について記載する。

A　加曽利E1式

甕

共通点としては口頸部が無文である。肩部から以下は全面に左傾縄文のあるものと箆描矢羽根形沈線で埋められたものと2種類ある。勝坂式類似波型隆線文が頸と胴の接合部に張り付けられたもの、又は同上形をした所謂 垂飾的文様を胴部に張付けたもの、頸胴接続部に2条の隆起線を囲らし、蕨手状渦文を前同垂飾的手法で胴部に張付けた類、又 勝坂式に見られる籠目式と呼ばれる手法を用いたもの、即ち粘土の細紐を土器面に張付けるかわりに半載竹管で土器面に隆起の連続を作りその上にその線と斜向して細紐を荒目に張付けたもの等で、焼成は大方よく赤褐色又は黒褐色を呈し、胎土は荒々しく器厚8㎝程度、全般に隆線は未だ衰えず、勝坂式の余韻が残っている。

深　鉢

同一器と推定される破片が数片あったが、仲々復元は困難と思われた。それによれば口縁部がく字形に内曲し胴部は長円筒形を呈し、口縁部の上下隆起線間は箆描沈線にて、所々に上下隆線を結合させる環状の盛り上った把手があり、その尖端は口縁を波形に変化させている。頸部は無文で胴部は竹管文の刻目のある２条の隆線が廻って、それから端を発した渦巻の垂飾的隆線で区分され、その内部は箆描矢羽根沈線で埋められている。厚８㎜、黒褐色を呈し器面は金雲母を、胎土に長石紛を含んでいる阿玉台式と勝坂式の両方に類似の点がある哉に考えられる。

B　加曽利Ｅ２式

前記小形甕が該当される。

深　鉢

口縁部上下２隆起線を所々で渦巻で区切って、その内部を箆描沈線、又は水平に近い傾斜縄文で埋めている。 胴部は沈線で区分して、その内に左傾斜縄文を認められるものもある。厚８㎜程度。

浅　鉢

口縁く字形に外曲し、胎土は長石紛を含み、荒々しいが、焼成甚だよく、しかも内外器面よく研磨され赤褐色を呈し口縁部内面は、丹塗りである。表面に文様はない。厚８㎜。

C　堀之内１式

深　鉢

口縁部に粘土帯を囲らしその為に口唇部断面は三角形をなしている。帯表面は箆で、刻目を附している。 厚５～７㎜程度、黒褐色で胴部に箆描沈線で三角形渦巻状模様のあるもの、又は２条の沈線が胴部を取巻いて、それから所々に２条の沈線が垂下して区間を作り、その内を荒々しい右斜縄文で埋められたものもある。

D　堀之内２式

深　鉢

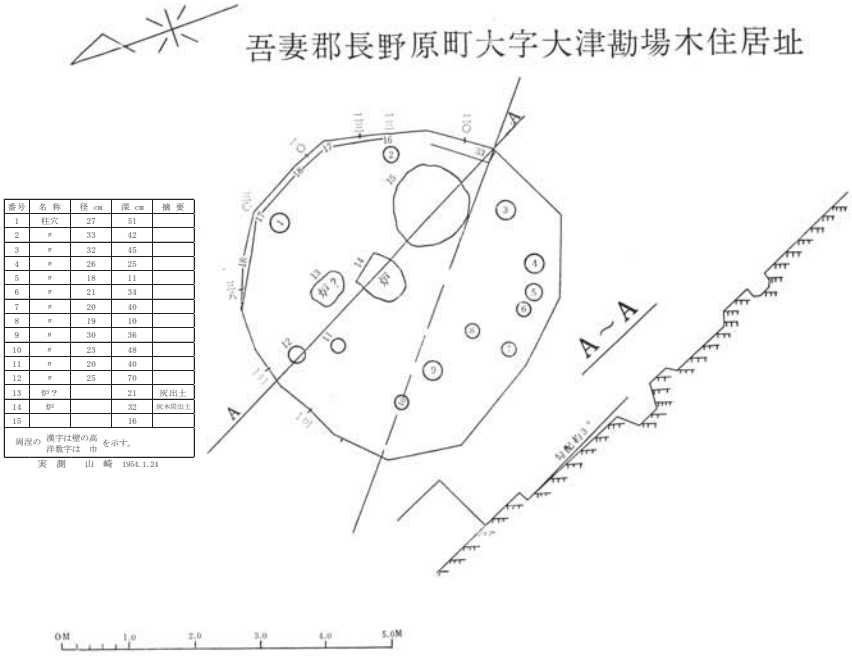
口縁所々に小隆起把手あり、その表裏面に１ヶの渦巻沈線を描き、口唇は箆で鋸歯形にきざみ目をつけている。土器把手表面渦巻文から下方に３条の沈線が垂飾的模様に描かれている。５㎜程度の薄手で赤褐色を呈し焼成はよい。

5　あとがき

長野原町大字大津には、この遺跡の他、同じ文化圏に字二軒屋、字立石等あるが、総て勘場木に続いて草津街道に面した東南面の突出台地である。従ってこの種堅穴式住居趾は従来出土の例にみても群集して存在する可能性がある。

又土器による編年は４通りに分類され、厳密に云えば４文化期が重複している訳だが、出土状態から云って別に層位的相違は無いものの如く、従って出土量の比較的多

い加曽利 E1~2 式の文化圏に属する住居趾と認めて支障ないものと思う。尚同町横壁ではかつて敷石住居趾が発見された由であるが、然りとせばこれはむしろ堀之内式に属するものと考えられいずれにしろ石器時代中期末から後期初頭にかけて、吾妻川沿岸、長野原を中心として相当な集落が営なまれた事は推測される。最後に今度注目される点として、隣接長野県文化との交流地として最も重要な場所であり、この附近から県界方面は一層研究されるべきである。（完）



番号	名称	径 cm	深 cm	摘要
1	柱穴	27	51	
2	〃	33	42	
3	〃	32	45	
4	〃	26	25	
5	〃	18	11	
6	〃	21	34	
7	〃	20	40	
8	〃	19	10	
9	〃	30	36	
10	〃	23	48	
11	〃	20	40	
12	〃	28	70	
13	炉？		21	灰出土
14	炉		32	灰木炭出土
15			16	

周溝の 漢字は壁の高 洋数字は 巾 を示す。

実測 山崎 1954.1.24

第 45 図　住居跡実測図

第 3 節　『群馬県吾妻郡長野原町勘場木遺跡調査（概報）』

群馬県勘場木遺跡の縄文式土器について

1．

中部山岳地帯における縄文文化に対する一般的な認識と理解は、戦前よりの尖石遺跡、戦後まで調査した井戸尻遺跡の資料に基く場合が多い。ところが長野県東信濃区において、軽井沢南石堂、小諸郷土、小諸氷、埴科幅田等の遺跡調査によって新たな遺構遺物の発見と調査がなされ、（註 1）ここに従来の見解を大いに発展させる必要が生じて来ている。本稿はこうした中にあって、特に、勘場木遺跡出土の土器についてふれ、当該上信国境地方及びその周辺における縄文文化研究の一資料に供そうとするものである。

勘場木遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町大字大津字勘場木 438 番地とその台地周辺にあって、昭和初年塩野要造氏によって注視され昭和 29 年に山崎義男氏等で発掘調査が行われ、その概要はすでに考古学年報（註 2）等によって報告されている。しか

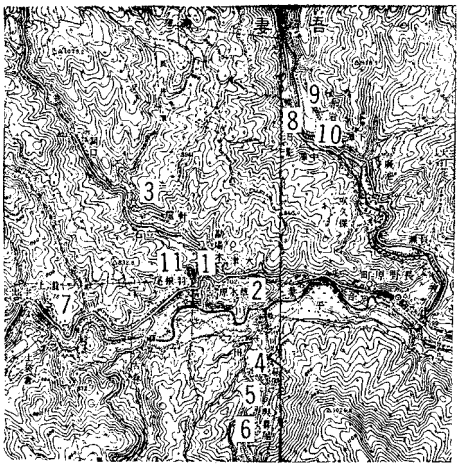
し、これ等の報告においては土器そのものについての記述は紙数等の関係から決して充分なものではなかった。従ってその詳報はすでに各方面から期待されていたものである。

※ 群馬県下では、古墳時代に至り、東国最大の古墳分布地域として栄えた。ことに縄文時代遺跡を紹介するに隣県、長野県方面の文献等も参照し、上信国境のうちことに信州側の縄文時代遺跡を付して参考資料とした。

2.

上信国境の本県界には縄文遺跡多く、佐久地方渓谷性遺跡の立地と相共通する環境にある。勘場木遺跡ではことにその性格が強く、遺跡の所在する附近は、白根山（2.164m）の南麓、白根硫黄鉱山に源をなす遅川が流入する吾妻川の南岸に位置し、標高約 700m を計る。附近の遺跡は縄文遺跡ばかりでなく、吾妻川下流では弥生時代の岩櫃山、鷹ノ巣洞窟、道心穴、蝦夷穴遺跡群等は弥生式でも古式に属する墳址として著名であり、該期の土器は、浅間連峯を隔てた南佐久郡月夜平、上の原、佐久市深掘遺跡からも検出され、種々問題点が上げられている。（註 3）

さて先行する弥生文化に両県相共通した土器の存する事を指摘しつつ、次の縄文文化を概観してみたい。長野原町附近の主要遺跡は表 1（第 9 表）の如くであり、当地方では発掘調査少なく、相急な判断はさけたいが、吾妻川上流域は、河川に沿った分布状況にあり、渓谷性と称しても良い。ただ浅間山の火口より北東部一帯は大きく白紙となっているが、天明三年の大噴火による泥川が流下し、吾妻川一帯にも及んだといわれる。これが今日の六里ヶ原を形成している。また上信国境は火山活動の泥流堆積ばかりでなく、火山噴出物の浮石流の堆積もみており、火山活動と遺跡の立地の上からも話題にもなっている（註 4）火山活動の姿は煙が恋歌となり古典に登載され、さらに時期が下り、浅間修験熊野修験の霊場ともなった。この事は私達の祖先は大昔から高山大岳には神霊がしづまり給うという信仰を持ち、そうした山の神々は



第 46 図　群馬県吾妻郡長野原町大津・勘場木遺跡周辺遺跡の分布（1:20,000）

第 9 表　吾妻郡長野原町遺跡一覧表

番号	時期	所在	地図	地目	立地	遺品
1387	縄文	大字横壁字中村	草津	畑・水田	平地	摩石斧、石匙、石鏃、土器片（中期）
88	〃	大字横壁字東平	〃		平地	石器片、土器片（中期）
89	〃	大字与喜屋小字下田	〃		平地	石斧、土器片（前期）（晩期）
90	〃	大字与喜屋小字本村	〃	畑・宅地	傾斜地	土器片（前・中・後期）
91	〃	大字与喜屋小字上ノ平	〃	畑	〃	石槍、盃、石錐、土器片（中・後期）
92	〃	大字応桑小字小宿	〃	畑・宅地	平地	土器片（前期）
93	〃	大字大津	〃	水田	平地	石斧、土器片（前・中・後期）
94	〃	大字大津小字勘場木	〃	水田	傾斜地	土器（加曽利 E、堀之内）石器
95	〃	大字立石	〃	畑	平地	磨製石斧、石錐、石匙、石鏃、（中期）
96	〃	大字林小字下田	〃	畑	傾斜地	石匙、土器片（中・後期）
97	〃	大字林小字大村	〃	〃	〃	石鏃、石斧、土器片（中・後期）
98	〃	大字川烏湯小字原畑	〃		〃	土器（群大史学研保管）

地方の守護神であり、鎮護の神としてあつい崇敬が捧じられていた。この様な山岳信仰の源は山における素朴な人々の生活の上に欠くことの出来ない水を恵み、また山々からむらがる雲・霧は時になって雨となり、あるいは雪となって気候をやわらげ、流れ出て大地を潤し沃野を作り、滋雨をもたらしてこそ五穀を稔らせ生活の上に豊かな恩恵をもたらした。また時には雷鳴、霖雨、暴風、洪水の脅威となって人々にせまってきた。そこで人々は礼を尽して神慮を慰め己を逃れんとしたし、感謝と祈願との信仰を深めて山が信仰の対象となり、あるいは峠路でも同様であった。上野国神名帳に正一位浅間大明神が銘記されているがそれである。またそれと別の修験、熊野修験が伝えられ、利根川支流一帯総数 359 の社の分布をみている。（註 5）ことに峠の熊野社は景行天皇 40 年 10 月熊野三社を勧請したといい、日本武尊を男神、伊邪那美命を女神の夫婦神であったといわれ、この社には大正年度故永峯光寿調査官、調査にかかわる正応元年壬辰卯月 8 日銘の鐘が伝えられ、音の聞ゆ地方に正応の鐘恋しやの伝承が生じたといわれる。（註 6）

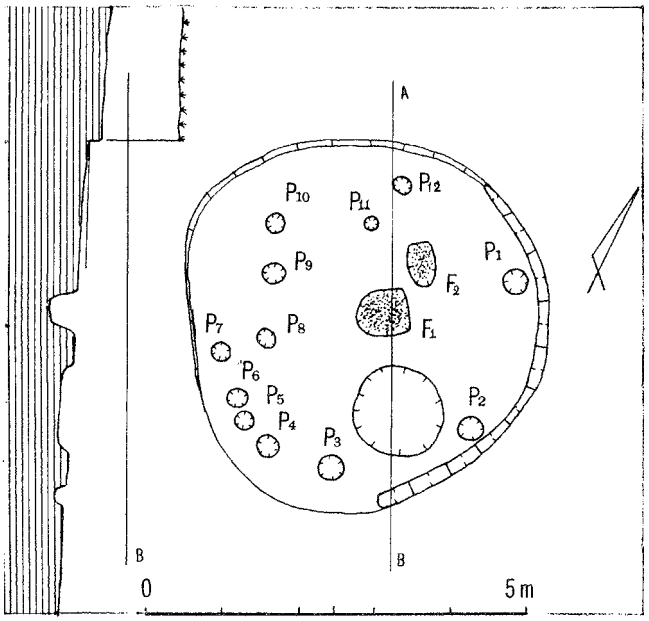
さて、上信国界の遺跡の立地及び環境について概観し、両県地域に於ける文化様相の共通性を述べ、遺跡での古代人の生活と浅間火山が共存している事に触れつつ勘場本遺跡についてふれてゆきたい。遺跡の所在する台地からは、西南方に浅間山が遠望される。

3.

勘場木遺跡の概略は、山崎義男氏「石器時代竪穴住居址について」の原稿があり、土器分類は再整理を必要とするが、遺跡の性格を知る上で全文を再録する。（註 7）

※前節で掲載しているので省略し、文章に合わせて作成した図面は掲載する。

1、はしがき
2、所在地（第 46 図）
3、住居趾（第 47 図）
4、遺物
　石　器（第 48 図）
　土　器（第 49・50 図）

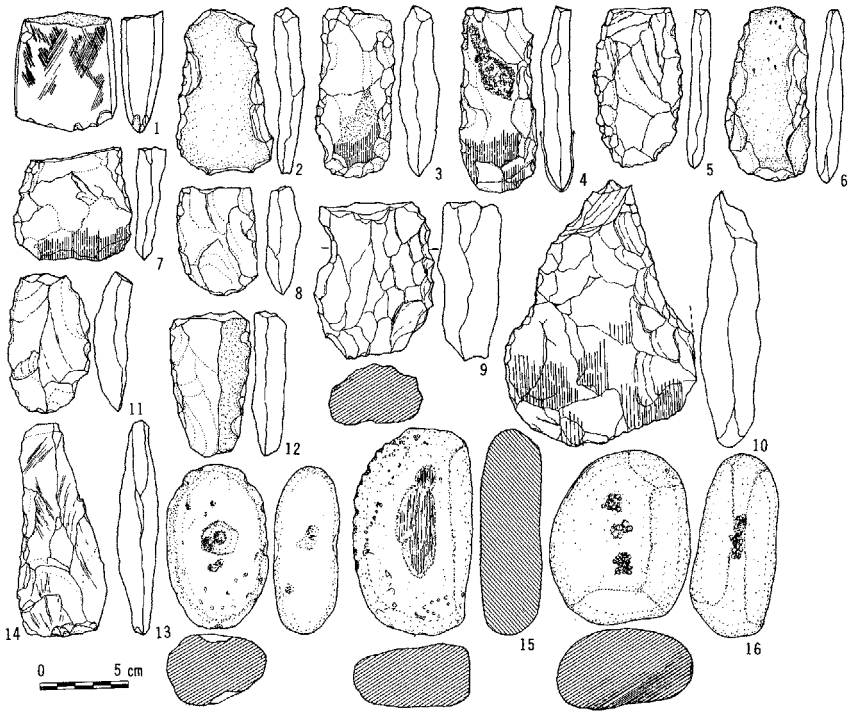


第 47 図　群馬県勘場木遺跡住居址（1:200）

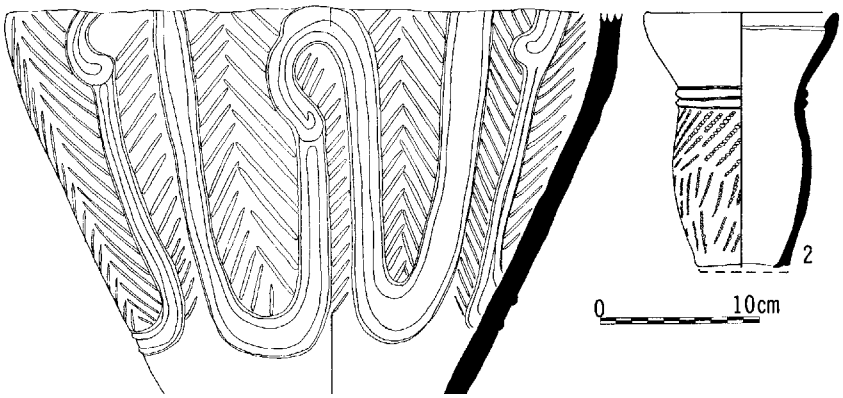
第 10 表　住居址柱穴一覧表（cm）

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	F1	F2
名称	柱穴	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	炉址	炉址
直径	27	33	32	26	18	21	20	19	30	23	20	25		
深さ	51	42	45	25	11	34	40	10	36	48	40	70	21	32
摘要													灰出土	灰木炭出土

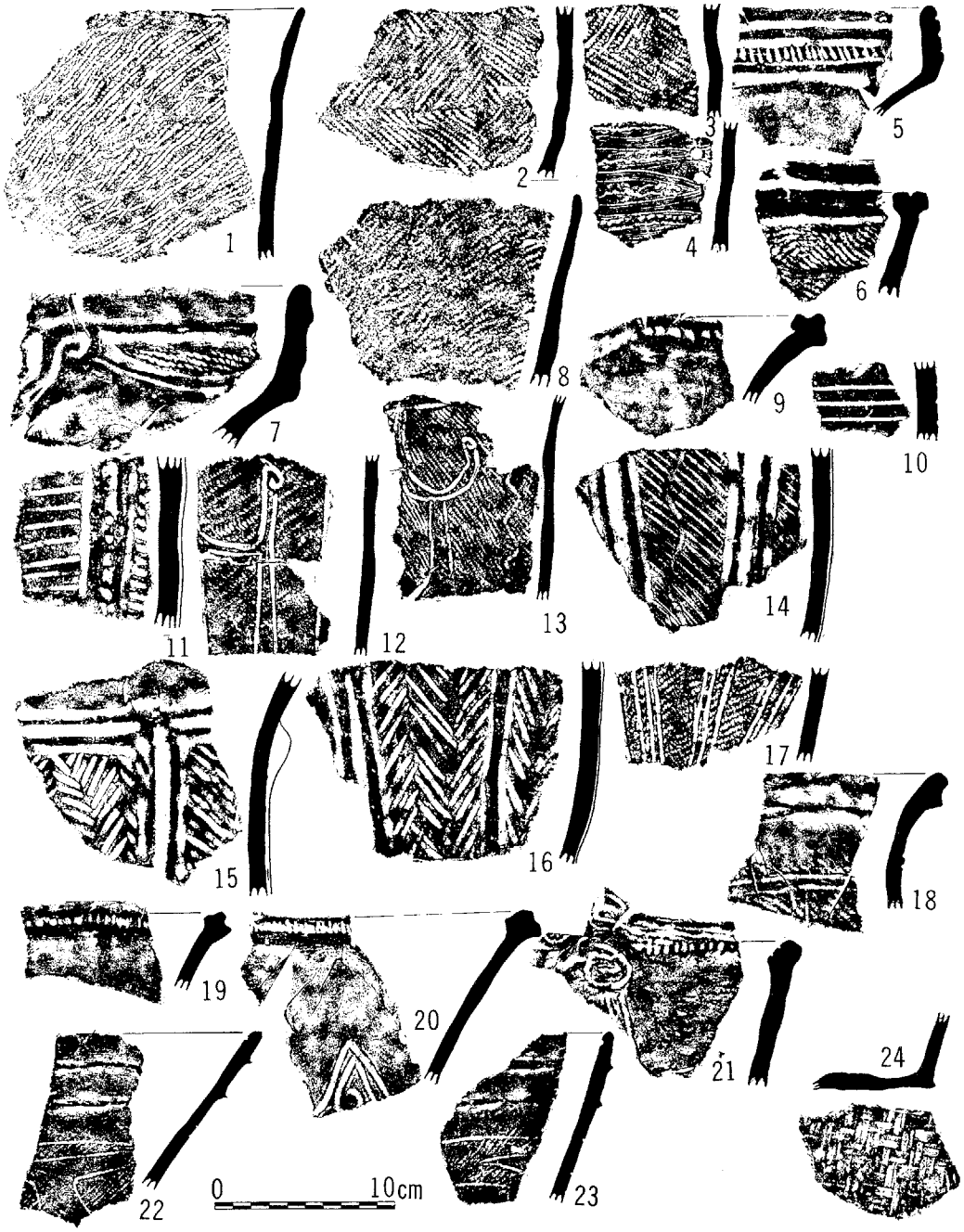
以上が山崎氏調査所見で、氏はこの翌年、つまり昭和30年5月～9月にかけ軽井沢町境新田と 松井田入山の峠路の入山峠にて祭祀遺跡の調査発見にあたっている頃で、当時の成果より該期文化の諸問題点を指摘しており、その後20年程経過した現状の資料にて、遺跡を再度整理したい。



第48図　勘場木遺跡住居址出土石器（1：5）



第49図　勘場木遺跡住居址出土土器（その1）（1：5）



第 50 図　勘場木遺跡住居址出土土器（その 2）（1 : 4）

4.

さて、千曲川上流地域における縄文後・晩期遺跡の分布と、配石状遺構の伴出遺跡の分布状況を 集計してみると、それから本地方ではその遺跡の立地が、流域に沿っており河岸台地となっている。これ等の遺跡での既出土製品及び土偶のあり方については、桐原健氏が問題点を述べている。その後調査の行われた本地域での遺跡より、遺構状況の事実を示し、再整理をしてみたい。

（1）浦屋敷遺跡＜小諸市加増浦屋敷＞

昭和28年発掘調査が行われ、遺構は東西9m、南北7.3mのほぼ円形プランをなし、敷石住居址であり、二ヶ所調査されている。イ号址はかなり覚乱がみられ敷石は断続して一石の上に二石が重なり、よく旧態が示されている。範囲は3×3mの広さで形状は円状なプランとなっている。東南の隅みに炉址らしい跡が残る。東南に径32㎝、深さ30㎝のピット遺構があり、与良清氏は貯蔵穴か、墳墓的なものか判明しないと述べている。遺物は敷石面から凹石、敲石、打製石斧が出土している。ロ号址はイ号址より北西地点2.4m離れて位置して発見された。比較的よく遺構プランは残り、経約4.2mの円形敷石遺構で、中央部に紫褐色を 呈する浮石切石6枚を楕円形に並べたものがあり、径42㎝を計る。炉の内底に口縁部を欠く。 素製浅鉢形土器が伏せられていた。また敷石外部端には縁取って大小の石で斜めに埋めた境石らしいものが弧を描いている。敷石は鉄平石ではなく、自然石を整然と並べた配石が検出された。またこの面より支那銭数枚が出土している。両遺構とも鉄平石を敷いてその面は同レベルとなっている。遺物としては縄文中期土器片に交り注口土器片、浅鉢形土器等堀之内式に相当している。また小諸市郷土遺跡では、ロ号址遺構に形態がよく似て、一辺2.8mのやや中心ふくらみの方形プランで、火山灰層を25㎝掘り下げて、そこに1.5~2㎝の厚さの鉄平石を接合するよう打調して敷きつめてある。炉はほぼ中央部にあり、一辺50㎝の方形石囲炉となっている。炉の内部からは炉からは焼けた骨片が出土している。柱穴と思われピットはなかった。この敷石遺構住居址の南壁に接して2.2×0.9mの長方形プランをとる墓址がある。肩部に石を立ててあり、足部にも石を置き、東側壁にも割石を積んである。敷石住居址からは縄文中期加曽利E式のコップ状形土器、短冊形打製石斧、縄文後期堀之内式土器片が伴出している。つまり遺構は縄文中期に構築され、住居址に使用されたものが後期に至り墳墓の跡を示している。

敷石遺構の特異あるあり方は、敷石周端に石斧（打製）が立並して出土しこれのあり方は次に記述する茂沢南石堂遺跡第3地点遺構と規模プラン、生活のあり方がよく類似し、浅間山と相対する位置にピットを構築しその上部に集石積した遺構が存する。さらに望月町協和字吹上からは方形石囲炉を伴い、きわめて鉄平石を微ずか配置した敷石住居址が確認されている。時期はいづれも縄文後期土器片が伴出している。郡内にはこの他石神、宮平、舟久保、芦田古町等から縄文後期の配石址が確認されそれ等は、敷石遺構的なもの、住居址と思われるものが知られている。

鹿曲川流域　協和には今日尚きわめて良質の鉄平石の産出をみている。（註8）

(2) 宮平遺跡＜御代田町大字豊昇字宮平＞

御代田町公民館より東方4㎞に豊昇部落がある。この東側丘陵50mに位置し、部落の南側を湯川が東西に走り、この遺跡の台地は標高800mである。この緩傾斜面は、東西200m、南北100m位の長方形台地であり、宮平地籍附近は、小田井から豊昇より茂沢を通過し、入山峠をへる道筋は旧道であり、最も古い古通路の名残り、東山道にあてられている。この社は合併で遷宮し、今は居住地域で用いられた敷石を高く積み上げた上に、大正3年大井宅蔵氏の建てた「春日神社碑」があって神社址を明らか

にしている。

宮平遺跡は古くから地方人の話題にも上り、その出土品も大井氏が蒐集したといわれ、明治12年村誌にも「此の畑中何と申事なく、祭器又は古壺等の粋げたる出ず、亦右地より堀出し候、石器、雷槌、雷斧、神足石等所有持するもの有之」とある。本遺跡の調査は、明治37年同村佐々木朝次郎氏の発堀を始めとし、大井宅蔵氏の間歇的な発堀、また昭和5年6月15日北佐久教育会と共に軽井沢在住のアイヌ人研究医師で人類学者であったM・G・マンロー博士の発堀をへて、昭和6年八幡一郎氏の調査となった。氏は石器時代住居址なる事を認めて次に述べている。

『伍賀村の遺物蒐集家大井宅蔵氏は同村宮平の遺物の地下には層々石が並んでいるのを実見した旨語った。宮平遺跡地は湯川の左岸久能部落より一段高い丘陵縁に存し広い範囲にわたって多量の遺物が散乱している。一体に砂質の耕地で其一部を掘り下げること約50㎝にして敷石面に到達した。発堀区域長さ約9m、幅約7mに亘って一面に規則正しく又不規則に大小の石が敷き並べてあった。規則正しい部分が多く全体の状況を充分に調査することが不可能であった。諸所に炭末があり遺物があった。住居にあるべき炉柱穴の如き施設には遭遇しなかったが、敷石住居址であることは、小県郡東部町の滋野寺の浦、成立に発見された遺跡と共通し、……』と記し、遺物は三群に分類され発見されている。

本遺跡の調査は不充分といえど遺構が敷石的なものであったことは理解できる。附近より採集された遺品には縄文土器片と共に耳飾・土偶等の土製品が顕著なあり方となってもおり、今後遺跡での学術調査による成果を待ちたい。

（3）茂沢南石堂遺跡＜軽井沢町大字茂沢字南石堂＞

宮平遺跡より湯川上流地点、約2㎞東方に沖積台地の平坦地がある。遺跡はこの台地上800 m × 300mの南北に長方形を呈する台地全地籍に所在し、前述宮平遺跡と共にその存在は古くから知られ、石堂原遺跡と記載されてきた。第1～4地点まで調査をみているが、遺跡の台地の中央部（西窪遺跡）及び南端部分は調査を見ており、遺跡の北端（南大原遺跡）からは多量の縄文後期の土器片をみている。

この遺跡からは縄文中～後期にわたる配石址、箱形石棺、敷石遺構が検出され、生活様相が変化に富んでいる。また黒色土層から縄文後期の不整円形の堅穴が発見されている。

土器片の出土量は多く、東信濃区該期の遺跡の生活史への問題点が指摘された。（註9）

第1地点・配石址は大半環状にあり、黒色土層に構築され、推定される径は18.5m、幅6.5mを計る。この下層に敷石住居址の一部が検出されている。配石群に組合わせ状石棺あるいは鉄平岩石の敷石を再使用した箱形状石組が5カ所、他に土拡状のもの等がみえ、№1からは後期の素製浅鉢が伏せ、中央部には径約20㎝の丸石が抱石状態に置かれてあった。№2では石囲いから微量の骨粉が出土し、さらにこの附近から注口土器二個体分が出土している。 注口土器は加曽利B期のものであるが、報告書に記載されていないので少しふれたい。口径9.25㎝、高さ17㎝を計りきわめ

て固い焼成良好のもので、色調はチョコレート色をなしている。曲線施文の該期の典型的なものである。

第２地点の敷石遺構下には口径 80㎝、底径 40㎝、深さ 38㎝のピットが伴い、その中には堀之内期の素製浅鉢形土器が上向きに埋めてあった。ここより西に 5.5m 離れた位置に、径 1m、深さ 0.7m のピット内に石鬼、石器がつまれ検出されている。第３地点、第４地点は、円形敷石遺構で東西約 4.5m、南北 4m で、一部に欠損がみられるがほとんど鉄平石である。中央部に 48 × 56㎝の石囲い炉があり、底部に径約 13㎝の土器が上向きに（敷石面下約 80㎝下に）埋められていた。この中からは微量の骨粉が出土し、さらにこの石囲い炉には蓋があったらしく、それに相当する石がそばにあった。

以上、上信国境の縄文期の遺跡を概観し、本遺跡と類似している事をふれた。勘場木遺跡周辺は遺跡多く、再度整理して扱ってみたいと考えている。

最後に調査にあたった故山崎義男・塩野要造両氏の霊に捧げると共に関係者及び協方者の労に深く感謝の意を表したい。

尚、本文の遺物実測図は土屋長久が作成した。

塩　野　新　一

註 1.　縄文中・後期遺跡調査例としては長野県を主にみると、

三上次男：上野佳也「軽井沢町茂沢南石堂遺跡」『軽井沢町文化財調査報告』昭 43。

八幡一郎・岩崎卓也「郷土遺跡」『長野県埋蔵文化財調査要覧』その 1 ＜昭 25 ～ 40 年度＞長野県教育委員会、昭 46。

永峯光一「氷遺跡の調査とその研究」『石器時代』第 9 号、昭 44。

金子浩昌、米山一政・森島稔「埴科郡戸倉町幅田遺跡調査報告」『長野県考古学会誌』第 2 号、

関孝一・土屋長久也「東部町桜井戸遺跡」『信越線滋野・大屋間複線化工事内埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長野県教育委員会。昭 46。

これ等の調査からして、千曲川上流地域は、縄文中期終末から後・晩期遺跡の立地は諸河川の河岸台地にあり渓谷性遺跡のあり方を示し、ことに佐久地方では敷石遺構及び配石址が顕著で、このうち、茂沢南石堂、桜井戸では、縄文中期に構築された敷石住居が、後期に再度その地が墳墓址として営なまれている事が指摘され、土製品、土偶等の多いのも本地方の特質となっている。

註 2　山崎義男「群馬県長野原町勘場木石器時代堅穴住居址について」第 91 号（謄写）

池田秀夫「山崎コレクション目録」群馬県立博物館研究報告第 5・6 集 昭 45

註 3　藤沢平治「南佐久郡臼田町月夜平の弥生式土器」『長野県考古学会誌』第 12 号

岩櫃式土器を検出する。遺跡としては、上信国境に近い菅平石小屋洞穴、唐沢岩陰、鳥羽山洞穴等からあり、上州的な樽式要素の土器では、深堀遺跡から検出されている。上の原遺跡の土器は墳墓址的な性格とされ、時期の下る佐久市蟻畑遺跡でもやや類似をなしている。弥生後期でも樽式土器と同様なものが佐久市一本柳遺跡から検出されている。

註 4　文化財審議委員会「天明三年浅間山大焼記録集」御代田町教育委員会、昭 44

土屋長久「浅間山浮石流下の遺物」若木考古第 84 号、昭 42。

浅間山北側は泥流が流れ、鬼押出しの六里ヶ原では溶岩樹型群となり、同山東南側では、浅間山噴出物の浮石で被われ、入山峠、芝沢、水沼、上久保遺跡等、遺構の上部が厚い浮石流が堆積し、浅間山第一浮石流（P・F・I)、同 第二浮石流（P・F・Ⅱ）とされ、地質方面での追求はあり、この浮石流の堆積と噴火には、　入山峠祭祀遺跡の調査で、千葉大学神尾明正先生の調査があり、結果が待たれる。

群馬県遺跡台帳作成委員会「群馬県の遺跡」昭 38、110~120 頁。

註 5　井田安雄「群馬県における熊野神社の分布」『群大史学』第 9 号 1 ～ 6 頁。

群馬県教育委員会「松井田町の民俗 － 坂本・入山地区 －」昭 42。

浅間修験については小諸藩国学者、山田弁道の「大浅間神社の遺跡を捜索る議」を著している（小諸高等小学校編『浅間山研究』全所収)。今日の考古地理学的見解にたち修験道遺跡を追求しているが遺品の記載はない。

註 6　永峯光寿「関東地方の梵鐘の研究」『国史学会』大正 5。

註 7　註 2 に同じ。群馬県歴史研究会編「群馬の歴史」昭 45。

註 8　長野県埋蔵文化財調査要覧（その 1)、昭 46。

註 9　三上次男、上野佳也「軽井沢茂沢南石堂遺跡」『軽井沢町文化財調査報告』昭 43。

第 4 節『群馬県史』 資料編 1　原始古代　旧石器　縄文

64　勘場木遺跡　　長野原町大津字勘場木

立地　吾妻川に沿って走る国道 145 号線は、長野原町市街の西 2 ㎞ほどの大津で上田方向と草津方向に分岐する。本遺跡はこの分岐点から草津方向へ 200 m ほど入った北側の、南傾する小台地上に位置している（第 51 図)。この台地は、本白根山から連なる丘陵末端部の浅い谷状部分にせり出しており、標高は 620 m 前後である。また遺跡の西側に吾妻川支流の遅沢川が南流し、南側約 600 m には吾妻川が深い渓谷となって東流している。

概要　本遺跡の発見は、昭和 28 年に土地所有者が畑地を田圃に造成中に 1 個の完形土器を発見したことに端を発し、続いて住居の一部を検出し、翌 29 年 1 月には 1 軒を完全に露呈させるに至った。このことは群馬県文化財専門委員であった山崎義男に伝えられ、同年 1 月 23･24 日の両日にわたって遺構･遺物の調査が行われた。この時の調査報告は山崎義男によってまとめられている（本章第 2 節)。

なお、検出された住居は昭和 30 年 1 月に県指定史跡となり、住居保存のための小屋が建てられている。

また、住居出土遺物中に平安時代後期の土師器が混じっていたことから、周辺に当該期の遺構の存在が予想

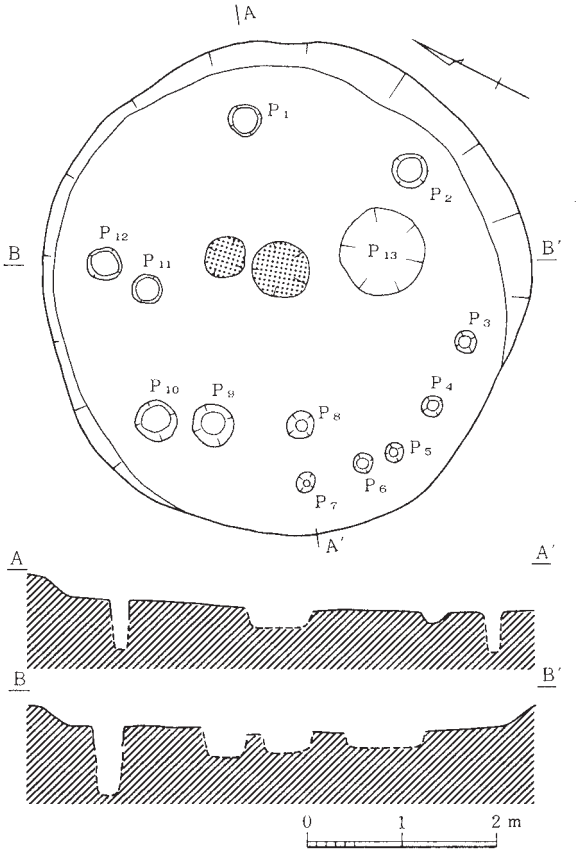
第 51 図　位置図

される。

遺構　検出した遺構は住居1軒だけである。住居の現状は長年の風化および床面が水田面下であることからの水の流入によって柱穴などの埋没や壁の崩壊が激しく、かろうじて12か所の柱穴、炉2か所、土壙1基の位置が分かる程度である。したがって、ここに掲載した住居実測図は、現地で実測したものに山崎の実測図のデータを加えて修正したものである（第52図）。

住居調査に関しては、以下山崎の報文の一部を引用する。

「住居址の西南部は、図示の通り偶然発掘に際し、周壁は取崩され不明であるが、底面のロームの竪結状態からして、その境界は容易に判断できるのであるが住居址の平面は平均約4ｍ50㎝の近似円形をなしている。表土は約50㎝程度の黒色土であり、それに続いて黄色粘土層となり、その層に掘り込んで住居址が出来ている。注意されるのは北から南に向かって図示Ａ－Ａ'断面の如く約3度勾配で底面が傾斜している点と、北側周壁は床面から約40㎝に近く深掘されているが、南部に向かうに従いその深さを減じている点であり、これはロームの自然勾配上に底面を定めて、北部のみ深くローム層を掘り下げ、南部は勾配の変化に従い殆ど皆無となした如く構築されたものの如く、所謂片掘り型の竪穴式住居址であって　－中略－　周湟は東北部のみに発見されたが底面の高所から端を発し、南部の最底部でその巾と深さを増している事は、排水の理に従っている如く推思される。炉址として確認出来るのは図面中央記号14であるが、長径約70㎝短径約60㎝の近似矩形をなし、灰及木炭を発見した。近接13号は長径約50㎝、短径40㎝の楕円形をなし、これにも灰を伴ったのであるが、近接して2ヶの炉が必要も考えられないし、底面及周壁の状態からして、重複した竪穴式住居址とも考えられないので、此の場合炉址として判断出来難く一応疑問としたい。15号は長径1ｍ30㎝、短径1ｍ10㎝の楕円形をした凹部であるが、　－中略－　所謂貯旧所とも考えられよう。柱穴は12ヶあり、－中略－　その内記号1、2、3、7、10、12の6孔を主柱と推定すると大体等間隔であり、その各孔の規模からしても妥当性が多い。尚出入口は底面の勾配からしても、小柱の存在からして特にその部分の構造が複雑であったろうと想像される点より、南面即ち柱孔3、7の間ではあるまいか。」（本章第2節）。以上のことから中央に地床炉を有する6本柱の円形住居であったことが分かる。柱穴の規模は（直径㎝×深さ㎝）、P1（27×51）、P2（33×

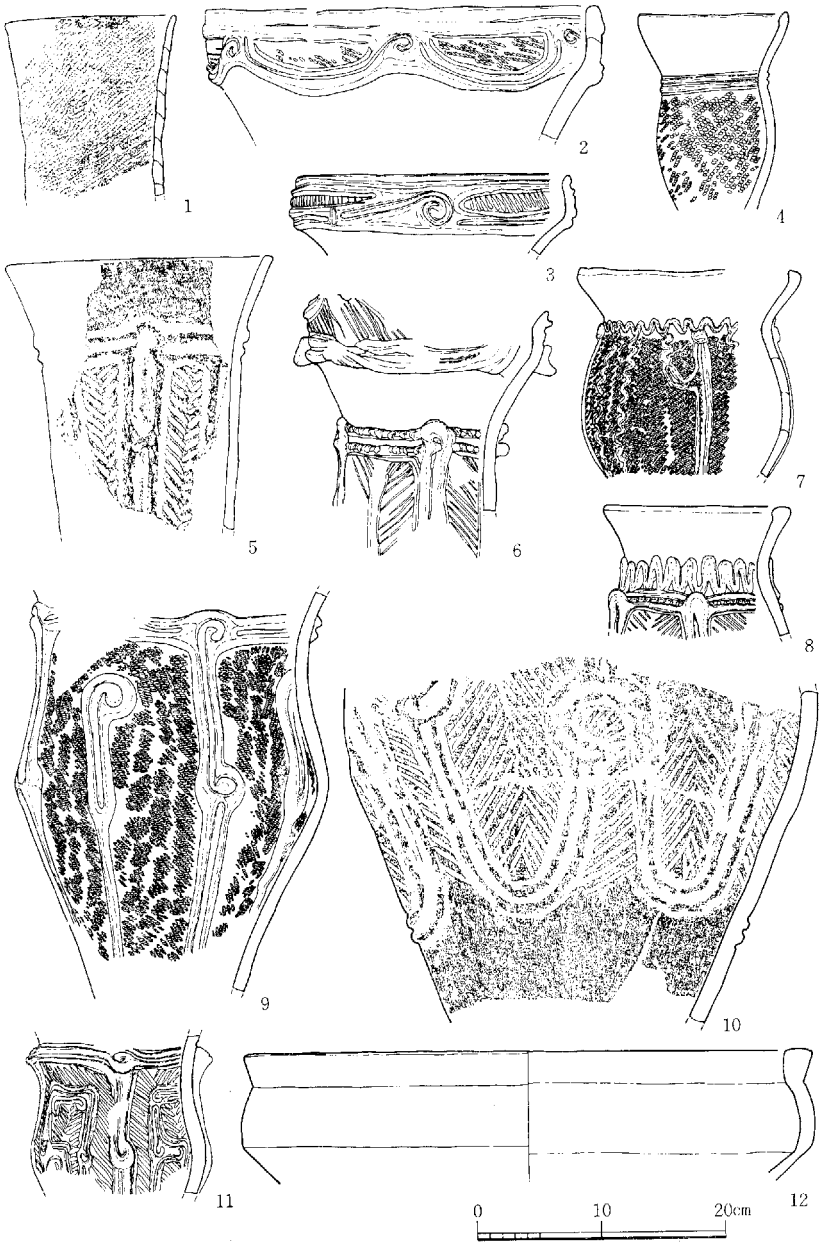


第52図　住居跡実測図

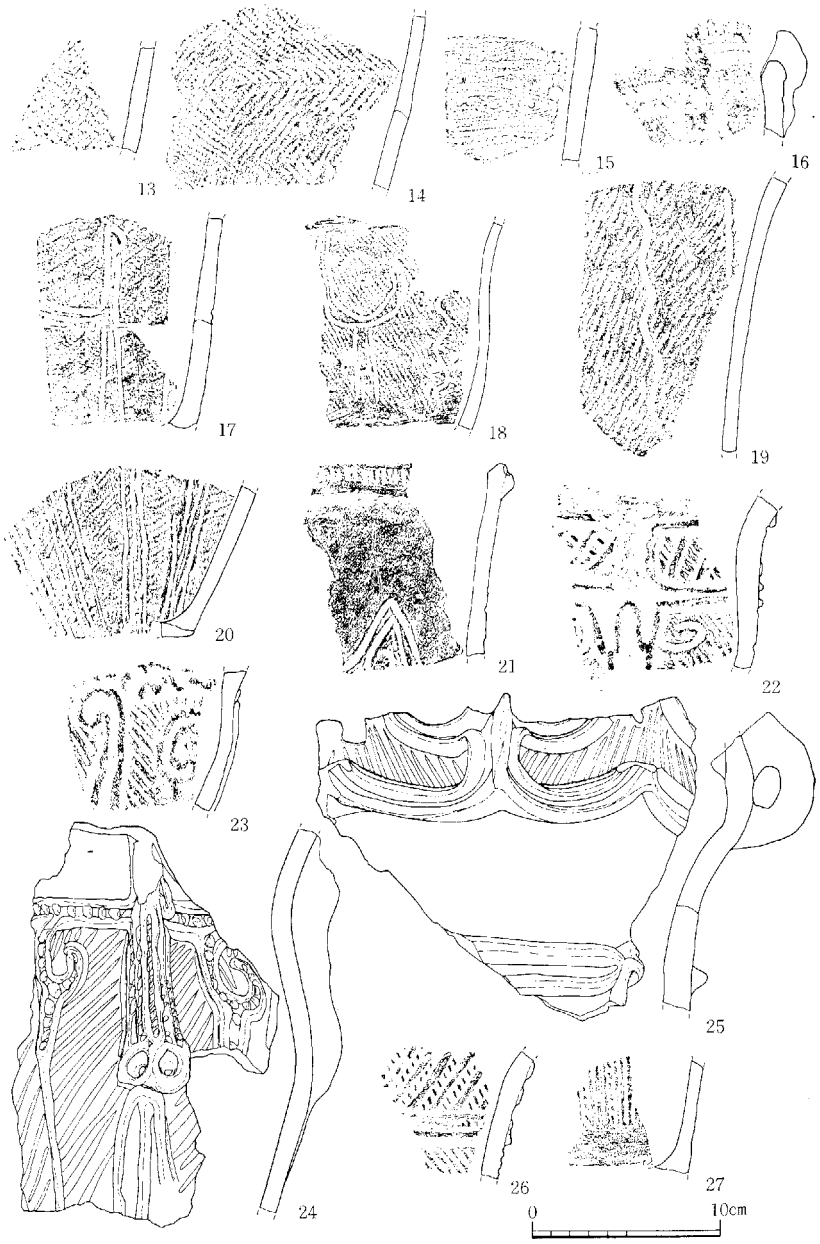
42)、P3（32 × 45)、P4（26 × 25)、P5（18 × 11)、P6（21 × 34)、P7（20 × 40)、P8（19 × 10)、P9（30 × 36)、P10（23 × 48)、P11（20 × 40)、P12（25 × 70）で、このうち主柱穴と考えられるP1 ～ P5・P7・P10・P12の深さは、40 ～ 70㎝と径に比して深くしっかりとしている。

遺物　器形・型式の分かる土器は深鉢11点、浅鉢1点で、ほかは大型の破片である。土器片だけの遺物総量は、コンテナに2箱分ほどである。石器は、打製石斧、石匙、不定形剥片石器、磨り石、敲き石のほかに、特殊遺物として石棒が1点出土している（第53 ～ 56図)。

1・13 ～ 15は前期の土器である。1は復元個体で、口径約13㎝、残存高約14.5㎝のやや外反気味に口縁の開く深鉢である。胎土には繊維を多量に含み、輪積み痕が認められる。胴部は全面RL多条の縦位施文である。13・14は破片で、胎土に繊維を含



第53図　勘場木遺跡の出土土器（1）



第 54 図　勘場木遺跡の出土土器（2）　拓影

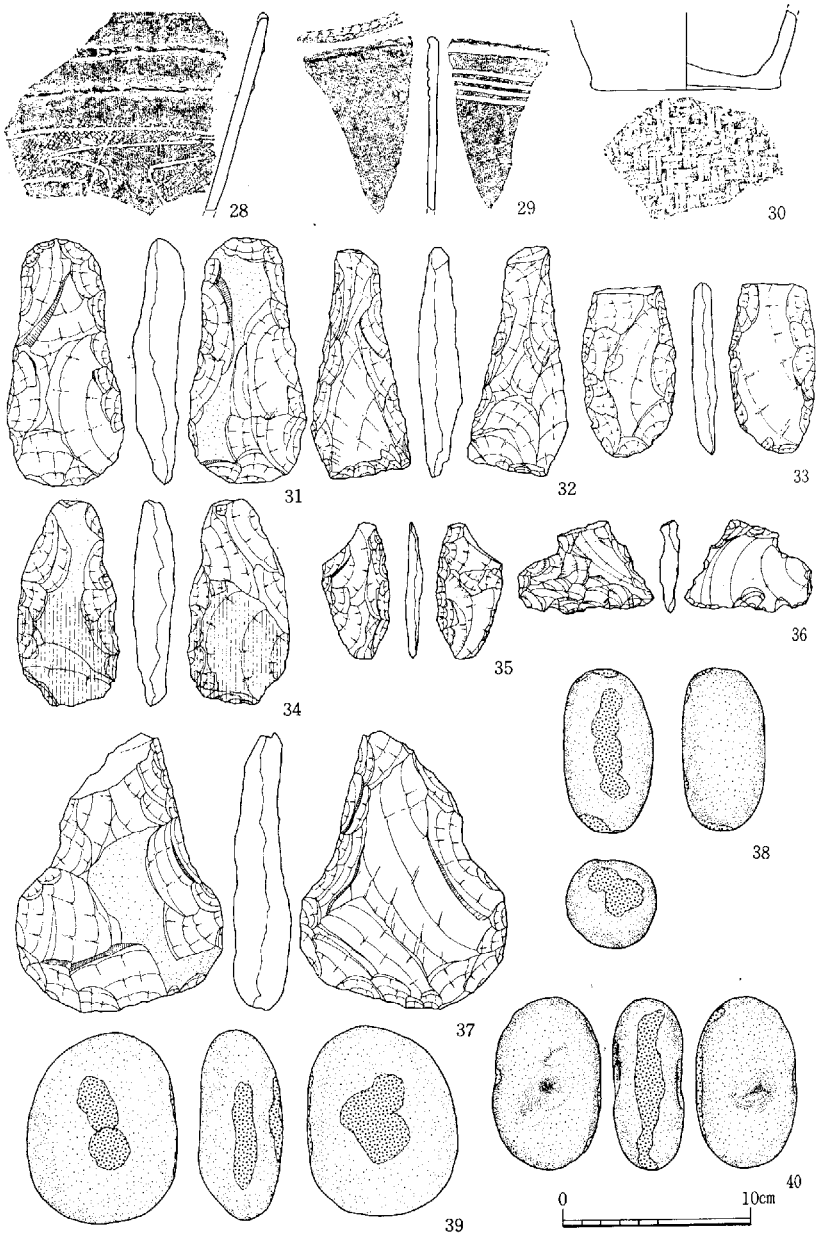
み、13 は RL 横位、14 は RL の同一原体の施文方向を変えることで羽状縄文としている。15 は胎土に繊維を含まない。文様は半截竹管による平行沈線および波状沈線に円形刺突を施している。前 3 者は黒浜式、後者は諸磯 a 式に比定される。

16 は胎土に金雲母片を含み、口縁部に突起を有し、上部に押圧を施した隆帯で区画している。区画内は半截竹管を 1 条施しており、阿玉台式に比定される。

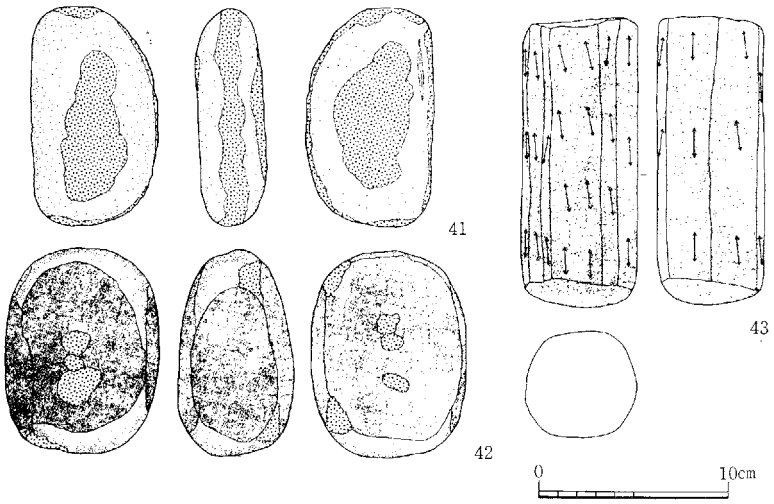
2 は口径 32㎝、残存高約 11㎝で、同上位にくびれ部を有し、口縁部の直立するキャリパー形深鉢である。口縁部文様帯は、口縁直下に 1 条の隆帯を巡らし、その下位に隆帯を 6 単位連弧状に貼り付けることで楕円区画文を構成している。区画内は絡条体を横位に施文後、隆帯区画に沿って沈線を施している。また、連弧状隆帯の連結部には隆帯と沈線による楕円区画文および渦巻き文で、区画内には縦位の平行沈線を施している。また頸部無文帯と胴部文様帯との区画は横位の沈線と思われる。2・3 は口

縁部文様帯および頸部無文帯が明確に分離されていることから、加曽利Ｅ２式後半に比定される。

４は口径約 12㎝、頸部径約 8.5㎝、残存高約 16㎝で、底部を欠いているものの唯一の完形品である。頸部がくの字状に屈曲し、やや内彎気味に開く口縁部を有する深鉢で、口唇部はわずかに内側に突出する。口縁部は内・外面ともに無文で、磨きが施されている。頸部には２条の隆帯を横位に貼り付け、口縁部と胴部を明瞭に区画している。胴部は RL の縦位施文である。また、外面の口縁部および胴部中位の一部に二次焼成によると思われる剥落が認められる。５は口径約 21.5㎝、残存高約 22㎝の深鉢である。口縁部は無文で外反し、口唇部は平坦である。頸部には２条の隆帯を横位に巡らし、隆帯上から下方に隆帯を垂下して胴部を縦区画し、区画内には平行沈線で綾杉文を施している。６は頸部径約 13㎝、残存高約 21㎝で、頸部に無文帯を有し、口



第 55 図　勘場木遺跡の出土石器（１）



第56図　勘場木遺跡の出土石器（2）

縁部に突起をもつ深鉢である。口縁部文様帯は隆帯区画で、区画内には斜位の平行沈線を施している。また、頸部を区画する隆帯上と口縁突起との間には橋状に隆帯が施されていたものと思われる。胴部文様帯は、頸部に貼り付けられた上部に押圧を有する2条の隆帯から、四単位に隆帯を垂下して縦区画し、区画内に斜位の平行沈線を施文する。7は口径約18㎝、頸部径約13.5㎝、残存高約16.5㎝で、頸部がくの字状に屈曲し、口縁部はわずかに内彎気味に開き、胴部の張る深鉢である。口縁部は無文で、口唇部はわずかに内側に突出している。胴部は全面にRL縦位の施文後、頸部に波状に隆帯を巡らし、連結して四単位に2条の隆帯を垂下して縦区画後、区画内に縦位に波状の隆帯を垂下している。8は口径約15㎝、頸部径約12㎝、残存高約10.5㎝で、頸部がくの字に屈曲する深鉢である。口縁部は無文で外反し、口唇部は内側に突出している。頸部には波状の隆帯を巡らす。この下に2条の隆帯を巡らし、その間に円形の刺突を施している。この隆帯上から2条の隆帯を四単位垂下して胴部を縦区画し、区画内には平行沈線で綾杉文を施している。9は頸部径約22㎝、胴部最大径約25㎝、残存高約32㎝の胴部がくの字状に屈曲する深鉢で、口縁部および底部を欠いている。胴部はLR縦位の施文後、頸部に2条の隆帯を巡らし、そこから2条の隆帯を四単位垂下して縦区画している。2条の隆帯の上端および中位には小渦巻きを配している。また、区画内にも上端に渦巻きを有する隆帯を貼り付けている。10は胴部最大径約38㎝、残存高約26㎝の大型深鉢で、胴部上半および底部を欠いている。文様は、2条の隆帯を逆アーチ状に連結して胴部を区画し、連結部には渦巻きを配している。区画内には平行沈線による綾杉文を施している。11は頸部径約12㎝、残存高約13㎝の深鉢で、口縁部および胴部下半を欠いている。頸部には2条の隆帯を巡らし、四単位に突起状小渦巻きを配し、渦巻き部から下方に隆帯を垂下して胴部を四単位に縦区画している。区画内には隆帯と沈線でさらに区画文を施文後、綾杉文を施している。以上の8個体は、口縁部のあり方および胴部文様から曽利Ⅱ式に比定されるものである。

17・20は加曽利E2式、21～27は曽利Ⅱ式にそれぞれ比定されよう。12は底部

を欠いた浅鉢で、口径約45㎝、残存高約11㎝である。器面は全面に磨きが施されている。28・29は器厚はきわめて薄く、内・外面ともに丁寧な磨きが施され、紐線文および内面の平行沈線などから堀之内Ⅱ式に比定されるものである。

石器は、31～34・37が打製石斧でとくに34は刃部から中位付近まで使用痕が認められた。35は薄い剥片石器であり、36は横型の石匙と思われる。38～42は磨り石と敲き石で、40には一方に3個、他方に1個の凹みがある。また42は部分的に敲打痕が認められるほか、両面に面取りされた磨り面があって光沢がある。43は石棒で、径約12㎝、長さ約30㎝で、上端を欠いている。周囲を面取りして研磨調整が行われているほか、基部には敲打調整が加えられ、凹みが1個認められた。

以上の出土遺物で、10が炉付近から出土している以外、位置を特定することはできないが、1軒の住居埋没土中からの出土であることは確実と思われる。

所見　1　出土遺物の大半は曽利式系の土器であり、加曽利式系の土器は客体として入っているにすぎず、互いにほぼ純粋なかたちで存在している。これは本遺跡が長野県にごく近く位置しているため、群馬県の中央部のあり方とは逆転した様相を呈しているものと考えられる。時期は、中期後半・加曽利Ｅ２式期後半段階に位置付けられる。

第５節　「勘場木石器時代住居跡（県）」『群馬県の史跡』

指定年月日：昭和30年1月14日
現　在　地：群馬県吾妻郡長野原町大字大津字勘場木438
指定面積：43.0㎡
整備状況：上屋改修、案内板設置
出土品保管先：土地所有者宅
交　　通：ＪＲ長野原草津口駅から車で６分

吾妻川の支流で白根山に源をなす遅沢川の左岸段丘上に立地する。

昭和28年暮れに土地所有者が畑地を田圃に造成中に完形土器1点を偶然発見したことに端を発し、翌29年1月までには竪穴式住居1軒を完掘するに至った。これを聞き、同年1月23・24日にわたって群馬県文化財専門委員であった山崎義男氏により、遺構・遺物の調査が行われた。

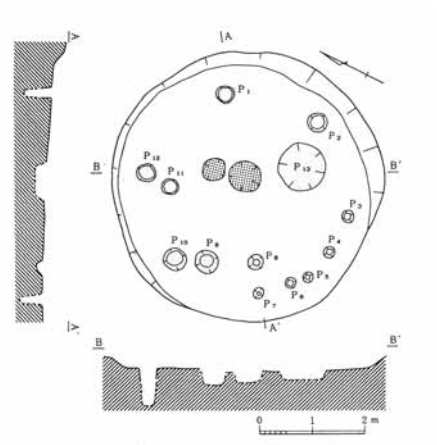
第57図　位置図

検出した竪穴式住居跡は直径4.5ｍのほぼ円形を呈し、北東から南西に向かう傾斜地を北東壁で40㎝程掘り込んで床面を造っている。壁周溝は「東北部のみで発見された」と報告されているが後の精査でほぼ全周していることが明らかとなっている。炉跡はほぼ中央に位置し、長軸約70㎝、短軸約60㎝の楕円形を呈している。柱穴はP1～P12まで確認されているがP1～P3・P7・P10・P12の6本と考えられる。

遺物は復元土器12点のほか土器片がコンテナ２箱分、石器は打製石斧・石匙・剥片石器・磨石・敲石・石棒などが出土している。これら遺物から住居の時期は縄文時代中期後半の加曽利Ｅ２式新段階と考えられる。

本地域は長野県・新潟県と近接して位置し、土器様式もそれを反映している。加曽利Ｅ式系土器は客体的で、唐草文系（越後系）土器が主体を占めるという本県平野部とは逆転した様相を呈しており注目される。

（富田　孝彦）



第58図　住居跡実測図・外観

報　告　書　抄　録

ふりがな	ぐんまけんしていしせき　かんばぎせっきじだいじゅうきょあと
書名	群馬県指定史跡　勘場木石器時代住居跡
副書名	保存修理事業報告書
巻次	―
シリーズ名	―
シリーズ番号	―
編著者名	富田孝彦
編集機関	長野原町教育委員会
所在地	〒377－1392　群馬県吾妻郡長野原町大字長野原1340-1　TEL 0279－82－4517
発行年月日	西暦2021年2月26日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	全体期間	整備面積 (㎡)	修復原因
		市町村	遺跡番号					
かんばぎいせき 勘場木遺跡	群馬県吾妻郡長野原町大字大津	10424	91	363104	1383642	19901026 ～ 20210310	62	遺構面の劣化

事業年度	事業期間	整備面積 (㎡)	整備内容	備考
平成2年度	19901026 ～ 19910125	62	**上屋設置工事** ・既存覆屋解体 ・カラートタン葺鉄骨造新設 ・外構工事	保存修理事業①
平成17年度	20060306 ～ 20060320	―	**上屋改修工事（換気設備増設）** ・腰部分　4箇所 ・面戸部分　4箇所 ・ドア部分1箇所 ・軒部分1箇所	保存修理事業②
平成30年度	20180501 ～ 20181227	43	**再調査及び測量** **遺構面保存処理**	保存修理事業③-1
平成31年度 (令和元年度)	20190426 ～ 20200306	―	**上屋修繕工事** ・外壁その他塗装 ・屋根漏水修繕 ・屋根塗装 ・窓ガラス交換（低反射） **出土遺物の再整理**	保存修理事業③-2
令和2年度	20200420 ～ 20210319	―	**報告書作成**	保存修理事業③-3

群馬県指定史跡　勘場木石器時代住居跡
保存修理事業報告書

令和3年2月24日　印刷
令和3年2月26日　発行

発　行　群馬県吾妻郡長野原町教育委員会
〒377-1392　群馬県吾妻郡長野原町大字長野原1340-1
TEL 0279(82)4517　FAX 0279(82)3115
印　刷　朝日印刷工業株式会社